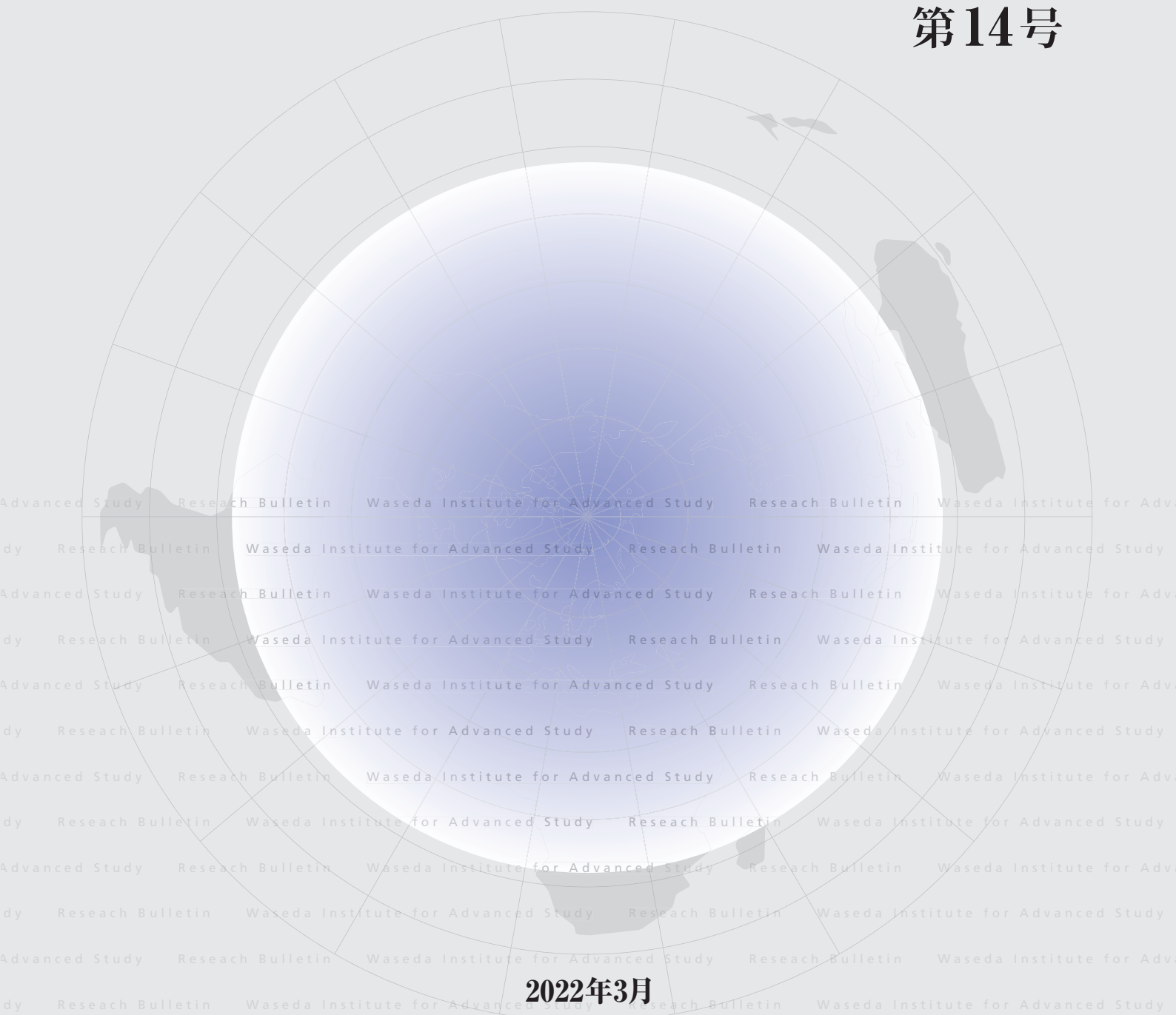


# 早稲田大学高等研究所紀要

第14号



**WIAS**

早稲田大学高等研究所  
Waseda Institute for Advanced Study

## 『早稲田大学高等研究所紀要 第14号』刊行にあたって

2008年度から刊行してきた本紀要もこのたび第14号を刊行する運びとなりました。日頃よりご支援をいただいております皆様におかれましては、厚く御礼を申し上げます。

早稲田大学高等研究所は、次代を担う優秀な若手研究者の育成と、本学の研究活動のより一層の活性化を目的に、2006年9月に設立されました。文系、理系の分野を問わず若手研究者を国際公募にて採用し、学際的な交流を推進するとともに、研究者の自立的な研究環境を提供し、先端的な研究活動を行っております。

2021年度は、人文・社会・自然科学分野で合計34名の研究員が在籍し、その約3分の1は女性研究者、約3分の1が外国人研究者です。本研究所の設立以来、本学を含む国内外の大学や研究機関等へと送り出した研究員は、これまで百数十名にもおよび、各分野の第一線で活躍しております。

本紀要は、こうした現職の研究員やこれまでに在籍した研究員（所友）の研究成果を収録しております。研究内容は多岐に渡り、論文については学内外の専門家による査読審査を経て収録しています。刊行は電子媒体として、本研究所のWebサイトにて、広く皆様にご覧いただいております。

本研究所では、本紀要のほか、研究員が英語にて研究報告を行う月例研究会、研究員の企画による各分野の専門家を招聘した研究会、英国Routledge社と提携して研究所での研究成果を書籍化する『Routledge－WIASモノグラフシリーズ』の刊行の推進など、様々な形の成果発信や研究活動を展開しております。

こうした様々な取組みとともに、本紀要が国内外の皆様の研究活動に貢献することができましたら、これに勝る喜びはありません。

今後とも皆様のご指導とご支援をいただきますよう、心よりお願い申し上げます。

2022年3月

早稲田大学高等研究所

所長 有村 俊秀

副所長 山本 聡美

## 目 次

|                                                                                                                                                                            |                                     |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------|
| 『早稲田大学高等研究所紀要 第14号』刊行にあたって .....                                                                                                                                           | 1                                   |
| 論 文                                                                                                                                                                        |                                     |
| 大阪府と兵庫県に存するドイツ関連史跡の総合的検討.....                                                                                                                                              | 小 原 淳 5                             |
| <i>Kaivalyadīpikā</i> における <i>Bhāgavatapurāṇa</i> 3.25.32-33 解釈                                                                                                            |                                     |
| —— vihitā bhakti の vihitā の意味に関して—— .....                                                                                                                                  | 真 鍋 智 裕 21                          |
| 研究ノート                                                                                                                                                                      |                                     |
| Does Social Capital Moderate the Impact of Disaster on Health and Quality of Life?:<br>Causal Mediation/Sensitivity Analysis and Instrumental Variable Estimation<br>..... | 参鍋 篤司・和田 有理・市田 行信・カワチ イチロー・稲葉 陽二 41 |
| Four Farmers' Expedition: A Review of the <i>Shell</i> Case .....                                                                                                          | シュイ アリソン 55                         |
| 校 注                                                                                                                                                                        |                                     |
| 『選択要決』校註稿——付伝写過程考—— .....                                                                                                                                                  | 森 新之介 (1)80                         |

# Contents

|                                                                                                                                                                            |                                                                                        |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------|
| Preface .....                                                                                                                                                              | 1                                                                                      |
| <b>ARTICLES</b>                                                                                                                                                            |                                                                                        |
| Comprehensive Research about Historical Sites Related to Germany<br>in Osaka- and Hyogo-Prefectures .....                                                                  | OBARA, Jun 5                                                                           |
| The Interpretation of <i>Bhāgavatapurāṇa</i> 3.25.32-33 in the <i>Kaivalyadīpikā</i> :<br>On the Meaning of "vihitā" in <i>vihitā bhakti</i> .....                         | MANABE, Tomohiro 21                                                                    |
| <b>RESEARCH NOTES</b>                                                                                                                                                      |                                                                                        |
| Does Social Capital Moderate the Impact of Disaster on Health and Quality of Life?:<br>Causal Mediation/Sensitivity Analysis and Instrumental Variable Estimation<br>..... | SANNABE, Atsushi · WADA, Yuri · ICHIDA, Yukinobu ·<br>KAWACHI, Ichiro · INABA, Yoji 41 |
| Four Farmers' Expedition: A Review of the <i>Shell</i> Case .....                                                                                                          | XU, Alison 55                                                                          |
| <b>REPORTS</b>                                                                                                                                                             |                                                                                        |
| An Annotated Recension of <i>Senchaku Yōketsu</i> .....                                                                                                                    | MORI, Shin'nosuke (1) 80                                                               |

# 大阪府と兵庫県に存するドイツ関連史跡の総合的検討

小 原 淳

## 要 旨

日本には多数のドイツ史関連史跡が存在する。筆者は既に 1000 以上のそうした史跡——景勝地、建造物、博物館、資料館、コレクション、記念碑等——を確認している。本論文では、大阪府と兵庫県に存する 7 つの史跡を取り上げ、その歴史的背景を論じる。

(1) では、1880 年に起こった釈迦ヶ池遊獵事件と前年のヘスペリア号事件について論じる。(2) では、大阪市内に残るバウハウス様式の建築物について考察する。(3) では、日露戦争に従軍したドイツ系ロシア人を検討する。(4) では、1938～39 年に宝塚少女歌劇団が行ったヨーロッパ公演を検討する。(5) では、三木清と和辻哲郎という、ドイツ留学経験を有する二人の知識人を論じる。(6) では、音楽学者の田中正平の生涯を紹介する。(7) では、加藤弘之の生涯と日本におけるドイツ学の始まりについて分析する。

## Comprehensive Research about Historical Sites Related to Germany in Osaka- and Hyogo-Prefectures

OBARA, Jun

## Abstract

Many historical sites related to German history exist in Japan. I have already identified more than 1,000 that include, scenic spots, buildings, museums, archives, collections, and monuments. In this paper, I choose seven German-related historical sites in Osaka- and Hyogo-Prefectures, and I explain their historical background.

In the section (1), the Syakagaiké affair in 1880 and Hesperia affair in 1879 are discussed. The section (2) examines the Bauhaus style structure in Osaka, Osaka City Industrial Arts High School. In the section (3), I discuss the Russia Germans at Russo-Japanese War. In the section (4), performance tour of Takarazuka Revue in 1938-1939 are examined. In the section (5), I investigate the two intellectuals who had studied in Germany, Kiyoshi Miki and Tetsuro Watsuji. In the section (6), the life of a musicologist, Shozo Tanaka is introduced. In the section (7), the life of Hiroyuki Kato and the beginning of German studies in Japan is analyzed.

## I. はじめに

筆者は、日本全国に残る日独交流関連の史跡・史実を地域別に提示し、日独関係史の再検討を行おうとしている<sup>(1)</sup>。本稿では大阪府、兵庫県の 7 件の事例を取り上げる。

本研究では、対象を現在のドイツ連邦共和国に属する地域に限定せず、オーストリア、東欧地域、スイス、またドイツ系ロシア人や、アメリカに渡った

ドイツ人移民なども扱う。本論文では関連史跡・史実の一覧を最後に掲載し、そのなかでも、史跡の保存状態が比較的良好であること、文字史料が一定程度残されていること、ドイツ史研究・日本史研究者のあいだで詳細がよく知られているとはいいがたく、今後さらなる検討が必要であること、単なる「奇談」の類ではなく、日独関係史の再考に結びつくような問題を含んでいることといった諸要件を満たしているものについて、本文で詳論する。紙幅の都合

から史料、参考文献への言及は最小限にとどめる。  
また、日付は陽暦で表す。

## Ⅱ. 大阪・兵庫に存する史跡・史実

### (1) 明治12/13年の二つの外交問題<sup>(2)</sup>

フリードリヒ三世 (Friedrich III. 1831-88) の次男、ヴィルヘルム二世 (Wilhelm II. 1859-1941) の弟で、「船乗り皇子」として国民的人気のあったハインリヒ (Heinrich v. Preußen 1862-1929) は、海軍士官候補生だった十代の頃に世界旅行を行い、1879～80年に日本を訪れている。1878年10月7日にコルベツト艦「プリンツ・アーダルベルト号」でキールを出航したハインリヒ一行は、大西洋、太平洋を経由して、翌年5月23日に横浜港に到着した。東京で明治天皇 (1852-1912) に謁見するなどの礼典をこなし、夏場に北海道とウラジオストクを巡航して9月に再来日、日光、京都、大津、坂本、宇治、奈良などを周った。この年、京都ではコレラ流行のため祇園祭が11月に開催されていたが、さらに期間を延長して、入洛する皇孫ハインリヒを迎えた。

冬季を長崎で過ごしたハインリヒたちは、1880年1月9日に神戸に寄港した。コルベツト艦の修理中だった2月7日、ハインリヒは同乗の軍人2名、神戸在住のドイツ人商人1名、日本人の勢子や人足6名を伴って、大阪府島下郡小路村 (現在の吹田市) の釈迦ヶ池でお忍びの鴨猟を行った。吉志部神社から近いこの場所は、「禁猟制札ノ場所」であった。

水鳥を狩り立てようとするハインリヒ一行は、これを見とがめて注意した村人と喧嘩になった。怪我

人を出す争いとなったところに巡査が駆けつけ、一行の氏名を確認しようとしたがドイツ人たちは答えず、身元が確認されるまでの数時間、大阪府庁に留め置かれた。一行は、川口居留地の商人ハイトケンパー (Georg Fr. H. Heidkämper 1843-1900) に引き取られ、その日の夜に神戸に帰った。

事件の二日後、大阪府知事が神戸のドイツ領事を訪れて謝罪し、ハインリヒもそれ以上の対応を求めなかったため、事態は穏便に片付くかと思われた。しかし2月13日、東京から神戸に派遣された外務省の書記官が面談したところ、狩猟に随行したハインリヒの侍従ゼッケンドルフ (Albert v. Seckendorff 1849-1921) は激しい怒りを示し、日本側に対して正式な謝罪を要求した。かくして翌日、ハインリヒや艦長、ゼッケンドルフの列席のもと、吉志部神社で謝罪式が行われ、巡査8名に免職、警部5名に俸給停止1ヶ月の処分が与えられた。新聞各紙はこの日本側の対応を弱腰であると批判し、対して政府は讒謗律によって各紙を罰した。

事件後に東京に帰ったハインリヒは、4月1日に天皇に謁見して事件に対する遺憾の意を伝えられた後、同月5日に横浜を出港、帰国の途についた。ハインリヒは1899年、さらに1912年にも日本を再訪して、明治天皇の大喪の礼にドイツ代表団の一員として参列している。

先行研究には、この釈迦ヶ池遊猟事件が1891年の大津事件に影響を与えたと指摘するものもある。確かに、大津でロシア皇太子襲撃事件を起こした巡査の津田三蔵 (1855-91) は釈迦ヶ池の事件の2年後から三重県警に、その後は滋賀県警に勤務しており、不当な処分に対する関西の警察官たちの痛憤に

- (1) 小原淳「北海道に存するドイツ関連史跡の総合的検討―日独関係史の再検討に向けて」『WASEDA RILAS JOURNAL』8、2020年；同「東北地方に存するドイツ関連史跡の総合的検討」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』66、2021年；同「関東北部に存するドイツ関連史跡の総合的検討」『早稲田大学高等研究所紀要』13、2021年；同「関東南部に存するドイツ関連史跡の総合的検討」『西洋史論叢』42、2021年；同「東海地方に存するドイツ関連史跡の総合的検討」『史観』185、2021年；同「北陸地方に存するドイツ関連史跡の総合的検討」『WASEDA RILAS JOURNAL』9、2021年；同「東山地方に存するドイツ関連史跡の総合的検討」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』67、2022年掲載予定。各論文に共通する執筆方針については、「北海道」および「関東北部」を参照。
- (2) 「独逸国皇孫殿下大阪府下吹田村ニ遊獵ノ際巡査等不敬一件」『日本外交文書』第13巻 (明治13年/1880年)；内山正熊「吹田事件 (1880年) の史的回顧」『法学研究』51-5、1978年；山本俊一『日本コレラ史』東京大学出版会、1982年；百瀬響、谷中章浩「1879年の独逸皇族による北海道巡覧とアイヌ」『函館新聞』による報道を中心に『年報いわみざわ』27、2005年；山中敬一「1880年プロイセン皇孫ハインリヒ吹田遊獵事件」『関西大学法学論集』67-1、2017年；『明治初期の日本―ドイツ外交官アイゼンデッヒャー公使の写真帖より』；Rolf-Harald Wippich, Prinz Heinrichs Japan-Aufenthalt 1879/80 und der Jagd-zwischenfall von Suita. in: Thomas Beck/Horst Gründer/Horst Pietschmann/Roderich Ptak (Hg.), *Überseegeschichte. Beiträge der jüngeren Forschung*, Stuttgart 1999; Ernst Dietrich Mirbach, *Prinz Heinrich von Preussen: Eine Biographie des Kaiserbruders*, Köln/Weimar/Wien 2013.



ふれた可能性がある。また、大津事件の時の大審院長だった児島惟謙（1837-1908）が1883年から大阪控訴院長を務めていたことにも、津田の場合と同様の可能性を見いだせるかもしれない。しかし、二つの事件は11年あまりの年月を隔てている。釈迦ヶ池との繋がりを考えるべきはむしろ、当時の新聞報道も引き合いに出しているように<sup>(3)</sup>、前年に神奈川で起こったヘスペリア号事件である。

日本は1822年以来たびたびコレラ禍に見舞われており、1877年から各地で数度目の大流行が起きて、1879年には10万人を超える死者が出た。同年7月14日、政府は日本初の統一的な検疫規則「海港虎列刺病伝染病予防規則」を公布し、寄港する船舶の乗客の検診や停船措置に関する法制度を整備した。7月14日は「検疫記念日」とされる。この少し前、日本は「検疫停船仮規則」を定め、コレラが流行する神戸や大阪の港から東京湾に来航する船舶は神奈川県長浦港（現在の横須賀市）の検疫場に10日間停泊するよう義務づけることとして、7月3日に各国公使に通知したが、英仏独の同意を得られなかった。7月11日、清から来航して神戸に一時停泊していたドイツ船舶の「ヘスペリア号」が東京湾に進入しようとした。日本側は同船を長浦に回航させ、仮規則に従って検疫を受けるよう求めた。しかし翌日、駐日ドイツ公使アイゼンデッヒャー（Karl v. Eisendecher 1841-1934）は横浜から軍医を派遣して独自の検査を行い、異状なしと判断して、ヘスペリア号の即時解放を要求した。7月15日、砲艦に護衛されたヘスペリア号は横浜への入港を強行した。この事件は日本の世論を憤激させ、滞日中だったアメリカ合衆国前大統領グラント（Ulysses S. Grant 1822-85）もドイツの態度を非難した。外務卿の寺島宗則（1832-93）はドイツ側に強く抗議したが甲斐なく、この事件の2か月後に辞職した。日本がドイツと新たに日独通商航海条約を結び、不

平等条約を改正したのは1889年、さらに海港検疫権を獲得するのは1899年のことである。

明治14年の政変（1881）によって日本でドイツ流が風靡したと言われるが、その直前に日独は摩擦を抱えていた。釈迦ヶ池遊獵事件とヘスペリア号事件は、両国関係の複雑な推移をものがたっている。

## (2) 阿倍野のパウハウス<sup>(4)</sup>

大阪市内にはドイツに縁のある建造物が点在しており、有名なところでは、エンデ・ベックマン事務所の河合浩蔵（1856-1934）が設計した造幣博物館や新井ビル、ウィーンの芸術家フンデルトヴァッサー（Friedensreich Hundertwasser 1928-2000）がデザインした大阪市舞洲スラッジセンターなどがある。ここでは、阿倍野区にある大阪市立工芸高校の本館を取り上げる。

同校の前身である大阪市立工芸学校は、金属工芸科、木材工芸科、工芸図案科の3科を備えた5年制の学校として、1923年4月に開校した。当初は大正区の泉尾工業学校（現在の市立泉尾工業高校）を仮校舎としたが、大阪市営繕課が設計した校舎が翌年10月に完成して現在地に移転した。この新校舎のデザインの原型となったのは、ヴァン・デ・ヴェルデ（Henry van de Velde 1863-1957）が1906年に設計したヴァイマルの工芸学校（1911年）だとされる。第一次世界大戦後、この工芸学校がパウハウスに発展し、ヴァン・デ・ヴェルデの建てた校舎がヴァイマル校として使用されたのは周知のとおりである。

大阪市立工芸学校本館はヴァイマルの工芸学校と同様にL字形だが、素人目には、3階建てであることや建物の規模、縦長のガラス窓が多数並ぶ外観、屋根上の時計台の雰囲気から、工芸学校の向かいに建つ、同時期にやはりヴァン・デ・ヴェルデが設計した美術学校校舎とも似ているように見える。

(3) 例えば、『朝野新聞』1880年2月25日。

(4) 山脇巖『パウハウスの人々』彰国社、1954年；山脇道子『パウハウスと茶の湯』新潮社、1995年；寺尾和幸「水谷武彦が紹介したパウハウス」『日本美術研究』2、2002年；ジェフリー・E・ヘインズ／宮本憲一監訳『主体としての都市―関一と近代大阪の再構築』勁草書房、2007年；木下勇「〈都市計画と公共の福祉〉に関する〈子どもの参画〉と〈場所の感覚〉からの考察」『公共研究』4-1、2007年；常見美紀子「パウハウスラー大野玉枝に関する研究―一日展・光風会の活動と作品を中心に」『デザイン学研究』16-1、2008年；「山口正城と工芸学校展」プロジェクトチーム編『山口正城と工芸学校の教育―大阪のパウハウス』、2016年；大山勝男『「大大阪」時代を築いた男―評伝・関一（第7代目大阪市長）』公人の友社、2016年；深川雅文他編、原田明和訳『開校100年きたれ、パウハウス―造形教育の基礎』アートインプレッション、2019年；Henrike Thomsen, Wie Japan das Bauhaus für sich entdeckte, in: *Die Welt*, 4. Aug. 2000; Petra Ruick, Takehiko Mizutani's Years at the Bauhaus Dessau: Study on the Bauhaus and Takehiko Mizutani 1, 『日本建築学会計画系論文集』71-599、2006年。

大阪市立工芸学校では、山口正城（1903-59）、洋画家の赤松麟作（1878-1953）や小磯良平（1903-88）らが教えた。とくに図案科教諭として1926年に赴任し、バウハウスの理論を教室に導入した山口の功績は大きく、山口の指導を受けた早川良雄（1917-2009）や山城隆一（1920-97）は戦後を代表するグラフィックデザイナーとなった。戦前に日本でバウハウスの教育を実践していたのは他には東京の新建築工芸学院だけであり、阿倍野の学校は日本のデザイン教育の最先端を走っていたと言えよう。なお、新建築工芸学院のほうは建築家の川喜田煉七郎（1902-75）が1932年に銀座に創設した教育機関で、バウハウスに留学した数少ない日本人である水谷武彦（1898-1969）や、山脇巖（1898-1987）と道子（1910-2000）夫妻が教壇に立った。

工芸学校が開校した頃の大阪は、1925年の第二次市域拡張によって日本最大の都市となり、「大大阪時代」の繁栄を謳歌していた。大阪の都市計画を主導した市長の關一（1873-1935）は、1898～1901年にベルギーとドイツに留学してワーグナー（Adolf Wagner 1835-1917）やシュモラー（Gustav v. Schmoller 1838-1917）に学んだ経験をもつ。また、この時期の大阪府の公園・緑地計画や都市計画を担当し、住之江公園、浜寺公園、枚岡公園、岸和田城址公園などの整備に貢献した大屋霊城（1890-1934）は、イギリスのハワード（Ebenezer Howard 1850-1928）の田園都市のみならずドイツのクラインガルテンにも着想を得て、1926年に「花苑都市」の建設を提唱し、甲子園や藤井寺、柏原、石橋、伊丹などに農園付き住宅地を造った。

阿倍野の工芸学校は、近代都市大阪の発展にドイツが及ぼした影響を探るうえでの重要な手がかりであろう。

### (3) 日露戦争とドイツ系ロシア人<sup>(5)</sup>

南海電鉄の泉大津駅から浜手に10分ほど歩いた市営墓地の一角に、ロシア兵の墓地がある。小振りな89の墓が7列に並び、その脇には、ロシアの国章である双頭の鷲を戴いた石造りの慰霊塔が立って

いる。この墓地は日露戦争で捕虜となり、収容中に死亡したロシア兵のためのものである。当時、ここから4キロ離れた浜寺俘虜収容所には2万8000人の捕虜がいたが、これは周辺の高石村の人口の8倍にあたる規模であった。

あらためて墓地の慰霊塔を確認すると、円柱状の碑の半ばにロシア語で「死せるロシアの戦士たちへ / 旅順港の戦友より / 1905年」と彫り込まれているだけでなく、五稜の台座にロシア語、ドイツ語、ポーランド語、アラビア語、ヘブライ語で「魂よ、安らかなれ」と刻まれているのが分かる。日本にとって、ロシア帝国との戦争は「ドイツ人」や「ポーランド人」、ユダヤ教徒、イスラーム教徒との初めての戦争でもあった。

ロシアには多数の、そして多様なドイツ系住民が居住していた。その代表例は、18世紀前半の大北方戦争や世紀後半のポーランド分割によってロシアの版図に包摂されたバルト・ドイツ人だが、エカチェリーナ二世（Yekaterina II Alekseyevna 1729-96）が1762、63年に出した外国人入植誘致令によって、ヴォルガ地方、ヴォルギーニ、ベッサラビアなどへのドイツ人の入植が進み、さらにコーカサスやシベリアにもドイツ人が住み着いた。1897年の最初の全ロシア帝国勢政調査によればドイツ系ロシア人の数は177万人に及んだ。

とくに軍隊は彼らの活躍の場の一つであり、ロシア軍創設以来、参謀部や上級将校に占めるドイツ系の割合は15～20%を推移した。日露戦争に関与したドイツ系ロシア人としては、政治家・外交官では首相ウィッテ（Sergei Witte 1849-1915）、内相プレーヴェ（Vyacheslav Plehve 1846-1904）、外相ラムスドルフ（Vladimir Lamsdorf 1845-1907）、駐日ロシア公使ローゼン（Roman Rosen 1847-1921）、軍人ではバルチック艦隊司令長官エッセン（Nikolai v. Essen 1860-1915）と副司令官フェルカーザム Dmitri Fölkersam 1846-1905）、黒溝台会戦の将軍グリッペンベルク（Oskar Grippenberg 1838-1915）、旅順要塞司令官ステッセリ（Anatolij Stöbel 1848-1915）、旅順艦隊臨時司令長ヴィトゲフト（Wilhelm

(5) スヴェン・サーラ、稲葉千晴編 / 辻英史訳『Der russisch-japanische Krieg 1904/05 im Spiegel deutscher Bilderbogen ヨーロッパから見た日露戦争—版画新聞、絵葉書、錦絵 日露戦争百周年記念展覧会』ドイツ・日本研究所、2005年；鈴木健夫『ロシアドイツ人—移動を強いられた苦難の歴史』亜紀書房、2021年；Gerd Stricker (Hg.), *Deutsche Geschichte im Osten Europas: Rußland*, Berlin 1997; Gert v. Pistohlkors (Hg.), *Deutsche Geschichte im Osten Europas: Baltische Länder*, Berlin 2002; György Dalos, übers. von Elsbeth Zylla, *Geschichte der Russlanddeutschen: Von Katharina der Großen bis zur Gegenwart*, München 2014.



Withöft 1847-1904)、ザバイカル・コサック軍を指揮したレンネンキャンプ (Paul v. Rennenkampf 1854-1918)、ウラジオストク巡洋艦隊長官イエッセン (Karl Jessen 1852-1918)、奉天海戦の司令官カウリバルス (Alexander v. Kaulbars 1844-1925)、バンゲルスキス (Rūdolfs Bangerskis 1878-1958)、東シベリア狙撃兵第四師団の指揮官フォーク (Alexander Fok 1843-1926)、旅順の海軍病院長を務めた探検家ブンゲ (Alexander v. Bunge 1851-1930)、さらにデニーキン (Anton Denikin 1872-1947)、ヴラーンゲリ (Pjotr Wrangel 1878-1928)、ウンゲルン (Roman F. v. Ungern-Sternberg 1886-1921) といった名が挙がる。また、戦争中に日本に多額の資金援助を行ったアメリカ銀行家シフ (Jacob H. Schiff 1847-1920) はフランクフルトのユダヤ人家族の出身である。

無論、彼らが「ドイツ人」としての意識を強固に保持し続け、常に共有し合っていたなどとは言えないが、時に自らのルーツとしてのドイツを強く再確認する、あるいはさせられる状況に直面したことは間違いない。その最たる例は第一次世界大戦であろう。大戦が始まると、ロシア帝国内の学校や教会ではドイツ語の使用が禁止され、ドイツ語新聞は廃刊に追い込まれ、また多くのドイツ系ロシア人がスパイやサボタージュの嫌疑で告発された。例えばヴォルギーニ県では、20万人のドイツ系住民の半分以上がシベリアへ追放され、県南部の国境地帯では50万人が強制移住させられた。また、軍の内部ではドイツ将兵の裏切りが噂され、彼らは戦線の部隊長から外されたり、配置転換された。さらに戦後も、背信的と見なされたドイツ人将校のリストが作成されて出版され、差別が続いた。

先述の日露戦争に従軍したドイツ系ロシア人たちのなかにも、その後に苦難の生涯を辿った者が少なくない。例えば、バルト・ドイツ人貴族だったレンネンキャンプは第一次世界大戦中は西部戦線第一軍の副官として東プロイセン侵攻に加わったが、タンネンベルクの戦いで無抵抗のまま撤退したため更迭さ

れ、世間の非難の的となった。1917年の革命の際にボリシェヴィキに逮捕され、釈放後はアゾフ海のタガンロックでギリシャ人漁夫に身をやつして余生を送っていたが、ドイツ軍が同地に迫る1918年4月、赤軍によって虐殺された。他にも、ウンゲルンも赤軍に処刑され、ヴラーンゲリやデニーキン、カウリバルス、ローゼンは国を追われた。彼らのなかにはさらに、中国に亡命してロシア内戦を生き延びた後、ラトビア国防相や参謀総長を歴任し、第二次大戦中はドイツに協力してSSラトビア人義勇軍団総監となったバンゲルスキスのような人物もいる。バンゲルスキスはラトビア・ユダヤ人5万人の殺害に関与したとされるが、戦後もソ連軍に引き渡されることなく、1958年に西ドイツで没した。

しかし、多くのドイツ系ロシア人は第一次世界大戦後も内戦、追放、強制移住・労働、殺戮、餓死の恐怖にさらされ続けた。1921年のヴォルガ地方の飢饉だけでも30万人以上のドイツ系住民が死亡したと言われる。迫害はスターリン (Iosif V. Stalin 1878-1953) の時代にさらに苛烈さを増し、独裁者の死後も差別は続いた。現代にまで続くドイツ系ロシア人の苦難の歴史は、ここで語り尽くすにはあまりに大きすぎる。

#### (4) タカラヅカのヨーロッパ公演<sup>(6)</sup>

宝塚歌劇団の礎を築いた芸術家の一人に、ハプスブルク帝国出身の指揮者・作曲家ラスカ (Joseph Laska 1886-1964) がいる。リンツ出身のラスカは第一次世界大戦に従軍してロシアの捕虜となり、七年間の捕虜生活を経て、1923年8月にウラジオストクから来日した。まもなく宝塚音楽歌劇学校 (現在の宝塚音楽学校) の教授に迎えられ、宝塚少女歌劇団のオーケストラ団員たちをメンバーとする宝塚交響楽団を指揮し、神戸女学院でも教えた。ラスカはブルックナー (Anton Bruckner 1824-96) の作品を日本で初演した音楽家ともされる。1935年まで神戸に滞在したが、モスクワで開催された音楽大会

(6) 秦豊吉『宝塚と日劇—私のレビュー十年』いとう書房、1948年；秦豊吉『宝塚欧州公演日記抄』（秦豊吉『私の演劇資料』第4冊）私家版、1953年；森彰英『行動する異端—秦豊吉と丸木砂土』TBSブリタニカ、1998年；徳永高志『戦前日本オーケストラの一運営—宝塚交響楽団を例に』『文化経済学』1-4、1999年；川崎賢子『宝塚—消費社会のスペクタクル』講談社、1999年；渡辺裕『日本文化モダン・ラブソディ』春秋社、2002年；岩淵達治『水晶の夜、タカラヅカ』青土社、2004年；朴祥美『〈近代日本〉を世界に見せる—戦時期対外文化政策と宝塚少女歌劇団の欧米公演』『思想』1026、2009年10月；根岸一美『ヨーゼフ・ラスカと宝塚交響楽団』大阪大学出版会、2012年；衣笠弥生『演劇をめぐるファシズム期イタリアの文化政策—宝塚少女歌劇団の第一回欧州公演（1938年）を通じて』『ディアファネース—芸術と思想』6、2019年。

から帰国しようとしたところ、突然に日本への再入国を禁じられ、やむなくウィーンに去った。

ラスカがいなくなってから3年後、宝塚少女歌劇団は日独伊親善芸術使節団として初めての海外公演を行った。この公演は歌劇団の創設者にして音楽歌劇学校校長でもあった大実業家、小林一三(1873-1957)がドイツ側に働きかけて実現したものだった。小林の三男の米三(1909-69)を団長に、組長の天津乙女(1905-80)、副組長の奈良美也子(1907-2000)以下の生徒30名を中心とする合計56名は、1938年10月2日、ドイツによるズデーテン併合の翌日に神戸を出港し、5ヶ月後の1939年3月4日に帰国した。これと同時期の8月16日～11月12日にはヒトラー・ユーゲントの来日イベントがあり<sup>(7)</sup>、また11月25日には日独間で「文化的協力ニ関スル日本国独逸国間協定」が締結されている。

現地でマネージャーとして八面六臂の活躍をした秦豊吉(1892-1956)は多才な人である。日本橋の生薬問屋に生まれ、叔父に七代目松本幸四郎(1870-1949)をもつ秦は、一高で山本有三(1887-1974)らと交わり、東京帝大法学部独逸法律科在学中に『若きエルテルの悲み』を翻訳して新潮社から出版している。卒業後、三菱商事に入社し、1920～26年にベルリンに駐在した。ベルリン時代にはシュニッツラー(Arthur Schnitzler 1862-1931)やハウプトマン(Gerhart Hauptmann 1862-1946)、オイケン(Rudolf Eucken 1846-1926)を訪ね、交流した。帰国後も勤めのかたわらでドイツ文学の翻訳を続け、レマルク(Erich M. Remarque 1898-1970)の『西部戦線異状なし』(1929)の他、ゲーテ(Johann Wolfgang v. Goethe 1749-1832)、シュニッツラー、シラー(Friedrich v. Schiller 1759-1805)、宮津を訪れて『さっさよやっさ』(1911)を書いたケラーマン(Bernhard Kellermann 1879-1951)などの作品を訳した。秦は「丸木砂土」の筆名で、艶笑文学も手がけている。1932年に東京宝塚劇場に抜擢され、日劇ダンシングチームを育成したり、東宝名人会を始めた。なお、日劇ダンシングチームはヒトラー・ユーゲント来日の際に、荻野幸久(?-1991)の演出、益田隆(1910-96)とオリガ・サフィア(Olga Sapphire 1907-1981)の振り付けで「ハイル・ヒトラー」

と題したショーを上演している。秦はその後、東宝映画、株式会社後楽園スタジアム(現在の東京ドーム)の取締役や社長を、戦後は帝劇社長などを歴任し、日本テレビ放送網の経営にも関与した。越路吹雪(1924-80)を育てたり、「額縁ショー」を考案したのも秦の功績である。

ヨーロッパ公演中の秦は、各地の劇場関係者や有力者と交渉して公演の契約を取りつけ、生徒たちの世話をし、ホテルや列車や食事の手配に奔走し、プログラムや解説を作成し、舞台裏で指示を出し、トラブルに対応し、しかし同時にヨーロッパのエンターテインメントの実情も観察しつつといった具合で、超人的な働きをみせた。秦を補佐したのが楽長の須藤五郎(1897-1988)で、須藤は戦後に関西労音の初代会長となり、共産党から参議院議員に選出されている。

公演旅行は最初から多難であった。当初はベルリン・シャルロテンブルクの州立オペラ座での公演を予定していたが、一足先に現地に入った秦が劇場に赴くと、話が通っていなかった。通俗的なレビューの類だと判断されたのが理由の一つであった。秦は駐独大使の大島浩(1886-1975)に泣きつくが、大島は非協力的で、再三の交渉の末、生徒たちがベルリンに到着した翌日の11月5日によりやく、フォルク劇場での公演にこぎつけた。しかも、11月20～23日のベルリン公演のうちの一回は、大島主催の冬季救援事業として無料で公演することになった。

11月13日の『フェルキッシャー・ベオバハター』には「宝塚の少女たち」と題した紹介が掲載されているが、目を引くのはむしろ、「国外のドイツ人も法の庇護下にある！ライヒ、ユダヤの犯罪に対して賠償を請求」と題した一面の記事である<sup>(8)</sup>。この記事は、11月9～10日に発生したいわゆる「水晶の夜」に関するものである。11月10日の秦の日記には、「午前ベルリン市内商店打ち壊しの騒ぎあり。午後より邦君〔1937～45年にベルリンで活動していた舞踏家の邦正美(1908-2007)のこと〕のお世話にてファザーネン街の稽古場を借受け、「雪」の稽古を初む。同家向かい側のユダヤ教会放火せられ、終日燃えつつあり」とある。独文学者の岩淵達

(7) ヒトラー・ユーゲントの来日については、小原淳「東山地方」Ⅱ(6)を参照。

(8) *Völkischer Beobachter*, 1938.11.13.

治が当時を体験した生徒から聞いたところによれば、この稽古中に大きな音がして、向いの教会に火の手があがったという。

ソ連・ポーランド不可侵条約が更新された11月26日、一行はワルシャワへ向かった。1919～21年のポーランド・ソビエト戦争の際に日本によってシベリアから救出されたポーランド孤児たちが結成した「極東青年会」の支援で、急遽決まった巡演だった。11月28～30日にワルシャワで公演してからイタリアに移動し、12月3～16日にフィウメ（現在はクロアチアのリエカ）、ヴェネチア、ボローニャ、ジェノヴァ、トリノ、ミラノ、フィレンツェ、ローマ、ナポリを周った。15日の公演はムッソリーニ（Benito Mussolini 1883-1945）が観覧し、劇場は熱狂状態になったという。ヒトラー（Adolf Hitler 1889-1945）はおろかゲッベルス（Joseph Goebbels 1897-1945）すら劇場を訪れなかったドイツとは大きな違いであろう。

歌劇団はさらに、年をまたいで12月28日～1月26日にドルトムント、フライブルク、カールスルーエ、マンハイム、マインツ、ザールブリュッケン、カッセル、ライプツィヒ、ブレスラウ（現在はポーランドのヴロツワフ）、ドレスデン、デュッセルドルフ、ミュンスター、ケルン、ミュンヘンで34公演という強行軍をやり遂げた。この経験は大きな自信になったであろう、宝塚少女歌劇団は翌年4～7月にアメリカで二度目の海外公演を行っている。

最後に、ラスカのことに再びふれたい。不本意にオーストリアに帰国したラスカはウィーンで活動していたが、宝塚の訪欧の少し前の1938年9月、政治思想を疑われてゲシュタポの取り調べを受けた。その後も1939年と1941年に当局の尋問を受け、1942年12月について投獄された。戦後も音楽活動を続け、愛国的な「オーストリア賛歌」（1946）や「オーストリアに寄せる歌」（1946）、「前線に立て、労働者たちよ 闘いの歌」（1948）や「我が身を護れ、労働者たちよ」といった歌曲、あるいは朝鮮戦

争を嘆いた「コリアの子供たち」や「朝鮮 Chosen」といった反戦的作品を残している。

#### (5) 播州人のみたヴァイマル・ドイツ<sup>(9)</sup>

姫路の市街を中心にして半径10キロ余りの円を地図に描いた時、その内側のさほど広くない領域に美濃部達吉（1873-1948）、三木清（1897-1945）、和辻哲郎（1889-1960）の生地が収まっていることに驚かされる。三人の知識人は別々の分野で活動したが、ドイツに留学して自身の学問を構築した点では共通している。ここでは、他の二人と別の時期に留学した美濃部は外し、1920年代のヴァイマル・ドイツで学んだ三木と和辻について述べたい。三木と和辻は近い時期にドイツにだけでなく、滞独中にハイデガー（Martin Heidegger 1889-1976）の影響を受けたという知的関心のありようにおいても、通じるところがある。

三木清は兵庫県揖保郡平井村（現在のたつの市揖西町）の裕福な家庭に生まれた。同時期の同郷人に三木露風（1889-1964）や鹿島守之助（1896-1975）がいる。幼少期から学業に秀でており、龍野中学校（現在の県立龍野高校）で国語教師の薫陶を受けて読書に目覚める。一高を経て京大へ進み、西田幾多郎（1870-1945）や田邊元（1885-1962）に学ぶ。

大学卒業後の1922年、波多野精一（1877-1950）の推薦、岩波茂雄（1881-1946）の出資を受けてドイツに留学する。ドイツに着いた6月24日は、奇しくも外相ラーテナウ（Walther Rathenau 1867-1922年）が極右テロリストに暗殺された日であった。最初の一年はハイデルベルク大学でリッケルト（Heinrich Rickert 1863-1936）に学んだが、1923年5月にマールブルクに移り、ハイデガーに師事するようになる。翌年8月からパリで研究し、1925年10月に帰国した。留学中、日本人では石原謙（1882-1976）、阿部次郎（1883-1959）、天野貞祐（1884-1980）、北吟吉（1885-1961）、大内兵衛（1888-1980）、九鬼周造（1888-1941）、久留間鯨造（1893-1982）、

(9) 酒井三郎『昭和研究会—ある知識人集団の軌跡』TBSブリタニカ、1979年；三木清『三木清全集』第13、16、19巻、岩波書店、1968年、1985年；和辻哲郎『和辻哲郎全集』第25巻、岩波書店、1992年；竹内洋『革新幻想の戦後史』中央公論新社、2011年；マイルス・フレッチャー／竹内洋、井上義和訳『知識人とファシズム—近衛新体制と昭和研究会』柏書房、2011年；長山靖生『日本回帰と文化人—昭和戦前期の理想と悲劇』筑摩書房、2021年；原田昌博『政治的暴力の共和国—ワイマル時代における街頭・酒場とナチズム』名古屋大学出版会、2021年；Erich Ludendorff, *Vom Feldherrn zum Weltrevolutionär und Wegbereiter Deutscher Volksschöpfung. Meine Lebenserinnerungen von 1919 bis 1925*, München 1941；Dirk Schumann, *Politische Gewalt in der Weimarer Republik 1918-1933: Kampf um die Straße und Furcht vor dem Bürgerkrieg*, Essen 2001。



藤田敬三 (1894-1985)、黒正巖 (1895-1949)、羽仁五郎 (1901-83)、ドイツ人ではヘリゲル (Eugen Herrigel 1884-1955)、マンハイム (Karl Mannheim 1893-1947)、グロックナー (Hermann Glockner 1896-1979)、そしてハイデガーの助手だったレーヴィット (Karl Löwith 1897-1973) らと交歓した。

対して和辻哲郎は、兵庫県神崎郡砥堀村仁豊野 (現在の姫路市仁豊野) で、代々続く医者の一家に生まれた。姫路中学校 (現在の県立姫路西高校)、一高を経て、東京帝大へ進学し、谷崎潤一郎 (1886-1965)、芦田均 (1887-1959)、阿部次郎、安倍能成 (1883-1966)、そして夏目漱石 (1867-1916) と交わった。卒業後は東洋大学、法政大学で教え、1925年に京都帝国大学助教授になる。

1927年、38歳で洋行した和辻は妻に宛てて頻繁に手紙を送り、異国での暮らしぶりを事細かに伝えている。4月6日にベルリンに着いたが、言葉が分からず、また分かった限りではあまり感心もできない大学での聴講はすぐにやめてしまう。真面目に授業に出て、ドイツ語でゼミの発表や討議を行い、ドイツ人の学者と積極的に交流し、新聞に論文まで寄稿した三木と異なり、和辻はむしろ読書や博物館見学、史跡めぐり、音楽鑑賞、観劇、散歩、日本人同士の交流に時間を費やした。このベルリン滞在中、和辻は出版されたばかりのハイデガーの『存在と時間』(1927)を読んでおり、その影響と留学中の見聞は代表作『風土』(1935)に結実する。結局、和辻は3年間の留学の予定を半分に縮め、イタリア、フランス、イギリスを周って早期帰国した。

留学中の過ごし方は対照的にも思える二人だが、ともにヴァイマルの騒乱を目の当たりにし、知人や家族に送った手紙に自らの体験を綴っている。まず三木の場合、全集に収録された書簡は1923年11月24日より前が薄く、とくに11月8~9日のミュンヘン一揆についての情報が得られないのが惜しい。しかし、それ以前から三木がドイツの政治情勢の変化を感じ取っていたことは確認できる。例えば来独から三ヶ月たった1922年9月20日付の石原謙 (1882-1976) に宛てた手紙には、「こちらの状態は悪くなるばかりです。今日もハイデルベルヒでは一般のストライキがあつて軍隊がでたりしました。夜も何処のレストーランも閉つてしまつて食事出来ず、閉口しました。在留の日本人も著しく減つてゆくやうです」とある。11月24日付の田邊元

宛ての手紙には、「独逸はなかなか恢復しさうにもありません。衰へてゆく民族を黙つて眺めてゐなければならぬのも悲しいことです」と記している。ルール占領とハイパー・インフレーションが続き、各地で騒擾が繰り返され、数日前にライヒ銀行総裁ハーフェンシュタイン (Rudolf Havenstein 1857-1923) が急死し、前日にシュトレゼマン内閣が辞任した状況を踏まえれば、三木のペシミズムは決して大袈裟とは思えない。

1924年1月6日付の田邊宛の手紙は、「独逸は今不思議な小康の状態にあります。いつまた騒ぎ始めるのか分かりませんが、とにかく今は落附いてゐます」と書いている。しかしマールブルクに移った5月になると、ドイツの情勢と三木の心情にまた変化が現れる。日本ホーリネス教会の牧師であつた森五郎 (1887-1961) に送った5月31日付の手紙には、以下のような一節がある。「この間からマールブルヒでは“Deutsche Tage”があつた。これはルーデンドルフ一味の帝国主義的、軍国主義的運動である。先達ではハレでめつぼうな宣伝をやつた連中だ。この運動がこの町では人気を喚び起し、宿の主婦まで感激して毎日この話をするので、私はひどく不機嫌になつてゐる」。

文中の「Deutsche Tage」(ドイツの日) とは、民族至上主義的な文筆家バルテルス (Adolf Bartels 1862-1945) の提唱で1913年に始まった極右派の祭典のことである。ヴァイマル期になるとドイツ民族防衛同盟が主催者となり、鉄兜団 (シュタールヘルム) やナチ党も参加して規模が拡大し、1920年にヴァイマル、1921年にデトモルト、1922年にコーブルク、1923年にニュルンベルクとバイロイト、1924年にハレ、マールブルク、ジーゲン、ヴァイマル、ミュンスター、ブルッフザールと、毎年開催されるようになった。三木が語っている1924年5月1日ハレの「ドイツの日」では、ルーデンドルフ (Erich Ludendorff 1865-1937)、マッケンゼン (August v. Mackensen 1849-1945)、シェア (Reinhard Scheer 1863-1928)、 Luckner (Felix v. Luckner 1881-1966) といった英雄的軍人、そしてヴィルヘルム二世 (Wilhelm II. 1859-1941) の五男オスカー (Oskar v. Preußen 1888-1958) が参列し、モルトケ像が建立されたが、共産主義者との銃撃戦が起こり、死者が出て467人が逮捕された。

三木が直接に見聞したマールブルクの集会は、

ルーデンドルフも参加して5月25～30日に開催された。マールブルクでは同月4日の国会選挙で、ナチ党が他の極右政党と合同で結成した「フェルキッシュ・ブロック」が17.7%の票を獲得しているが、この数字は全国平均の6.6%を大きく上回っている。

三木の文章に切迫した響きがあるのに対して、和辻のほうはどこか傍観的である<sup>(10)</sup>。留学先のベルリンに着いて一ヶ月後の1927年5月7日、和辻は、鉄兜団がベルリンで7万人規模でデモ行進をするという噂を耳にする。警察が市中で警戒に努めており、「宿のばあさん」からも外出を控えるよう言われるが、和辻は「今日のひるまは大変穏やか」、「何か起こるとすれば今晚か明日の日曜」だろうと考えて、午前中は大学で事務手続きや聴講を済ませ、3時まで友人と昼食をとりつつ歓談し、夕方は語学のレッスンに通った。その日の夜に書いた手紙は、「二、三日前に右傾派の一団が演説会で大分人をなぐつて、その団体（国民社会党）は解散を命ぜられた。どうも右傾派が中々荒つばい事をやつてゐる。さうして人気もある。今日と明日は鉄かぶとに同情を有する人は黒白赤の三色旗（昔の、帝政時代のドイツの国旗か）を出してもらいたいという宣伝があつたが、今日町を歩いていると、中々方々にこの旗が出てゐた」というものである。「二、三日前」の「荒つばい事」とは、ナチ党が5月4日の集会で反対派の牧師に暴力をふるったために一時的な活動禁止になった事件を指すと思われるが、この手紙は「右傾派」の中身を区別していない。

「何か起こる」と予想した翌日も、和辻は友人と3人でポツダムに散歩に行き、「ポツダムでもスタールヘルム〔鉄兜団〕の行列を二つほど見たが、なかなか整然として立派なものだつた。これでは右傾派の運動も中々馬鹿に出来ぬと思つた」と、妙に感心している。3月19日に市内のリヒターフェルデ・オスト駅でナチ党と共産党の大規模な衝突が発生し、いよいよ街頭の政治暴力が激化し始めつつあったベルリンにしながら、和辻の観察に緊迫感はない。

6月6日に書かれた手紙は、前日にベルリン市内で共産党の2万人規模のデモ行進があったことを伝えている。和辻は日本人仲間8人と野次馬をする

つもりだったが、仲間の提案で予定を急遽変更し、郊外のグリュネヴァルトを散歩することにした。結局、日本人会で夕食を済ませた9時ごろに、行列の一部に出くわした程度であったという。数日後の6月10日付の手紙は、5月に行われた鉄兜団の行進を写した絵葉書を同封し、自分の住む屋敷町で家々から掲げられるのは帝国旗ばかりで、共産党の示威行動の際も赤旗は見なかったと書いている。

10月3日の手紙は、前日のヒンデンプルク80歳誕生日の祝賀会の模様にもふれている。方々の家の窓に帝国旗が掲げられ、ヴァイマル共和国の旗を出しているのは一割ほどだった。和辻はヒンデンプルクの姿を一目見ようと、ブランデンプルク門のあたりで群衆に混ざって1時間半待った。しかし、ヒンデンプルクの乗った自動車が門柱の間にちらっと見えたとたん、前に立っていた青年が帽子をもった手を高く挙げて万歳したため、何も見えなかった。周囲の人も同様で、皆で笑いあったという。「ヒンデンプルクは大戦争の大立者といふばかりでなく、人物が立派なのだと云ふ。多分さうなのだろう。しかしとにかく社会主義的な革命までやつて来た国で、まるで日本の天子様のやうに大統領が尊敬されているといふ事は、いかにもドイツ人の気風をよく現してゐる。つまりかういふ点では昔のカイザーの時分と一向変わつてないのだらう」というのが、和辻の感想である。妻子に宛てた私信ということも勘案しても、和辻の吞気さは三木と対照的であり、旧稿で扱ったミュンヘン一揆の時の斎藤茂吉（1882-1953）と石原莞爾（1889-1949）の差を思い起こさせる<sup>(11)</sup>。

既に予定していた紙幅を超過しているため、その後の二人についてはアウトラインをなぞるにとどめる。三木は1925年に帰国し、希望していた京大への就職がうまくいかず、1927年に法政大学教授に就任、1930年5月、共産党シンパ事件で逮捕された。11月に出獄してからは教職を辞め、文筆生活に専念するようになる。1933年5月17～19日の『報知新聞』に掲載した「ナチスの文化弾圧」でナチの焚書を非難し、レッシング（Gotthold E. Lessing 1729-81）以来のドイツ文学の寛容の精神の伝統、ドイツ文化に対する外国文化の影響、ユダヤ人の文化的貢献を説いた。7月に長谷川如是閑

(10) 以下は、『和辻哲郎全集』所収の1927年5月11日付の妻宛ての手紙を参照。

(11) 小原淳「東北」Ⅱ(7)を参照。



(1875-1969)、徳田秋聲(1872-1943)、秋田雨雀(1883-1962)らと学芸自由同盟を発足して反ナチ的な態度をより明確にするとともに、この頃から時評を多く書くようになる。

1937年11月に『中央公論』に書いた「日本の現実」において「日本の思想的現実」と「日支親善」を論じたのが、近衛文麿(1891-1945年)のブレントラストである昭和研究会の目に留まり、1938年8月に同会に迎えられ、さらに文化部門の委員長として、第一近衛内閣の対中交渉に助言するようになった。しかし三木の「東亜共同体論」は換骨奪胎されて大東亜共栄圏の理論に転用され、昭和研究会も1940年11月に解散した。

1938年6月以来『文学界』などに書いたエッセーをまとめて1941年8月に出版した『人生論ノート』がロングセラーとなる。しかし、1942年1月に『中央公論』に発表した論文「戦時認識の基調」が軍部の批判を受け、その後の三木は言論活動を制限された。同月、軍に徴用されて、陸軍宣伝班員として12月までマニラで勤務することとなる。1945年3月、治安維持法の容疑者を匿い逃亡を助けた嫌疑で警視庁に検挙され、9月26日、豊多摩拘置所で悲惨な獄死を遂げた。竹内洋が推測するように、三木が生き延びていれば、戦後知識人の配置図は変わっていたかもしれない。

他方、和辻は1931年に京大教授に昇任、翌年に博士号を授与され、1934年に東京帝大文学部に転任した。翌年に出版された『風土』は代表作となる。戦後は1946年1月に『世界』の創刊に関与し、また『思想』や『展望』に発表した「人倫の世界史的反省 序説」、「歴史的自覚の問題」、「世界的視圏の成立過程」などの論考をもとに、東大退職後の1951年に『鎖国』を発表した。同書で読売文学賞、2年後の『日本倫理思想史』で毎日出版文化賞を受賞している。戦前戦後をつうじて宮中での進講も行

い、正田美智子(1934-)にも講義した。一族には多くの学者・文化人がいる。留学後の人生もまた、和辻と三木とは大きく異なって見える。

#### (6) ドイツ皇帝に謁見した音響学者<sup>(12)</sup>

ドイツ皇帝ヴィルヘルム二世に拝謁してパイプオルガンの演奏を披露した田中正平(1862-1945)は、淡路国三原郡八幡村(現在の兵庫県南あわじ市)に生まれた。幼少時から人形浄瑠璃を好み、虫の音を聞くのを楽しんだという。1878年に東京大学に入学、田中館愛橘(1856-1952)や藤澤利喜太郎(1861-1933)とともに、理学部物理学科でメンデンホール(Thomas Mendenhall 1841-1924)に学んだ<sup>(13)</sup>。物理学者のメンデンホールは夫婦ともに音楽を愛好しており、毎週土曜日の晩に学生を家に招いてヴァイオリンやピアノの演奏を披露し、歌唱や音楽理論を教えてくれた。後年の回想によれば、田中はこの頃から、日本の音楽と西洋の音楽の違いはハーモニーの有無にある、日本音楽はハーモニーがないために貧弱である、日本音楽の「これから先の進歩は矢張りハーモニーを使用する点に進んで行くだろう」と考えるようになったという。

卒業後の1883年から同校の助教授及び予備門教諭になり、1884年から3年間の予定でドイツに留学する。8月24日に横浜を出港した船には、飯盛挺造(1851-1916)、穂積八束(1860-1912)、長與稱吉(1866-1910)、宮崎道三郎(1855-1928)、片山国嘉(1855-1931)、隈川宗雄(1858-1918)、丹波敬三(1854-1927)、萩原三圭(1840-94)、森鷗外(1862-1922)が同船しており、鷗外が詠んだ「日東十客歌」が洋行の様子をユーモラスに描き出している。

ベルリン大学に入学した田中はヘルムホルツ(Hermann v. Helmholtz 1821-94)に師事して音響学と磁気学を学び、他からも和声学や音楽形式論、対

(12) 田中正平「純正調発案の動機」『日本音響学会誌』2、1940年；田中正平『日本和声の基礎』創元社、1940年；伊藤完夫『田中正平と純正調』音楽之友社、1968年；平塚知子「〈発達〉する日本音楽—田中正平の理想と実践をめぐる—」『比較文学研究』71、1998年；西原稔「田中正平の〈日本和声〉の理論と〈日本的なもの〉の思想（『転換期の音楽』編集委員会編、『転換期の音楽—新世紀の音楽学フォーラム・角倉一朗先生古稀記念論文集』音楽之友社、2002年）；平田公子「明治30年代後半の音楽論にみる日本音楽観—田中正平の日本音楽観とその評価を通して—」『福島大学教育学部論集・人文科学部門』75、2003年；泉健「田中正平における西洋音楽の受容」『和歌山大学教育学部紀要・人文科学』61、2011年；酒井健太郎「クラウス・プリングスハイムの日本での音楽活動について—昭和音楽大学オペラ研究所〈オペラ情報センター〉を利用して—」『昭和音楽大学研究紀要』36、2017年；篠原盛慶「田中正平の日本製の〈純正調〉オルガン—〈廣義の純正調〉の具現化」『音楽学』65-2、2020年；Shohé Tanaka, Studien im Gebiete der reinen Stimmung, in: *Vierteljahrsschrift für Musikwissenschaft*, Nr. 6-1, 1890;

(13) 藤澤については、小原淳「北陸」Ⅱ(2)を参照。

位法を学んだ。また、それまで楽器をほとんど演奏したことがなかった田中はシュテルン音楽院（現在のベルリン芸術大学）でヴァイオリンやピアノを習ってオーケストラに参加したり、大学の合唱部にも入部し、コンサートにも足しげく通った。

しかし、ベルリンでの田中の一番の課題は純正律の研究であった。純正律は、周波数が単純な整数比である純正音程から成る音律であり、倍音のうねりを伴わない、美しい響きの和音を得られる。しかし、転調や移調をすると音が濁ってしまうため、近代西洋音楽においては1オクターブを12等分した平均律を用いるのが一般的である。先述のとおり、田中は、日本の音楽はモノフォニーからポリフォニーへと「進歩」していくと予測していた。そして、西洋音楽が単旋律のグレゴリオ聖歌から始まってロマン派のハーモニーへと発展したように、この進歩を人類の普遍的な現象だと考えた。しかし他方で彼は、学生時代にメンデンホールから聞かされた、西洋音楽こそが自然法則に基づく完全な音楽であるという言葉分には承服しかねた。田中は平均律を用いた西洋音楽とは異なる、日本独自のハーモニーの確立を模索するようになる。

本人の後年の回想によれば、そうした時にヘルムホルツに、「将来日本の国民が進んで行く時に於ては何れハーモニーは要求されるだらう。さう致しました時にどう云ふハーモニーの土台を作ったら宜いでせうか」と聞いたところ、「それは無論純正調に行くより仕様が無い。西洋の音楽には平均律と云ふのに瀾漫して居るが、夫には一種の歴史的経路があり歴史的の習慣性を帯びて斯うなつた。新しく和声始めるのに何を苦しんで平均律を使ふか」と、「激烈なる御奨励」を与えられた。かくして、田中は西洋の平均律に対する日本の純正律を追究し続けることとなった。

田中は1890年に論文「純正調の研究」を『音楽学季刊誌』に発表、ベルリン大学から哲学博士の学位を授与された。さらにこの年、純正調のリード・オルガンを製作、ベルリン・フィルの指揮者ビューロー（Hans v. Bülow 1830-94）によって「エンハルモニウム」と名付けられたこの楽器を各地で実演し

た。ブルックナーもウィーンで田中の実演を聞き、興味を示したという。田中のエンハルモニウムの話題はヴィルヘルム二世の耳に届き、皇帝の要望を受けた田中はヴァルカー社と共同で大型の純正調パイプオルガンを製作した。1893年にベルリンのドロートンシュタット通りにあったギムナジウムに自作のパイプオルガンを設置し、9月に皇帝の御前で演奏した。

1899年4月、田中は14年半ぶりに帰国する。しかし日本の音楽界に地位を得られず、ドイツから持ち帰ったエンハルモニウムも母校の物理学研究室に保管されたままとなった。その後の田中は技術者としての道を進み、日本鉄道会社や帝国鉄道庁（後に鉄道省）に勤務、1929年まで務めた。1901年には最初の国産ガスマントル（白熱ガス灯）の特許を申請している。

しかし、1908年に月島に自宅を建てて邦楽研究の場とし、邦楽の五線譜化に取り組んだり、邦楽の鑑賞や普及を目的とする「美音会」、「美音倶楽部」を組織して邦楽の振興に尽力するなど、田中は日本固有の音楽についての探究を放棄しなかった。そして1930年、東京帝大に預けていたエンハルモニウムを修理して、純正律の研究を再開する。日本楽器製造株式会社に依頼してエンハルモニウムを改良したオルガンを製作、1932～38年に5台のオルガンが完成、さらに浜松楽器工業株式会社が1942年に1台を製造した。田中は1932年に社団法人東京音楽協会理事長、1941年に文部省国民精神文化研究所（後に教学錬成所）の嘱託となり、1940年には自身の和声理論をまとめた『日本和声の基礎』を執筆している。1945年、疎開先の千葉県で死去した。

日本的ハーモニーの可能性を模索した田中は、しかし西洋人が日本風の音楽を作ることには懐疑的であった。例えば、東京音楽学校のドイツ人教師ユンケル（August Junker 1868/70-1944）が作曲して1912年に帝国劇場で初演された「熊野」や、時代を下って1940年に初演されたプリングスハイム（Klaus Pringsheim 1883-1972）の「管弦楽のための協奏曲」などの日本風な旋律と和声を、田中は肯定しなかった<sup>(14)</sup>。

(14) プリングスハイムはシュレーゲンのユダヤ人商人の家の出身で、一族から音楽家、学者が多数輩出した。双子の妹のカタリーナ（Katharina “Katia” H. Mann-Pringsheim 1883-1980）はトーマス・マン（Thomas Mann 1875-1955）と結婚しており、また母方の祖父は風刺雑誌『クラダラダッチュ』の編集長だったドーム（Ernst Dohm 1819-83）である。

この点に関連して気になるのは、田中が「君が代」の音楽性をどのように評価していたのかという問題である。「君が代」は、1880年に宮内省雅楽課が作成した旋律に、プロイセンの軍楽家エッケルト（Franz Eckert 1852-1916）が和声をつけて現在のかたちとなった。なお、エッケルトは「大韓帝国愛国歌」の作曲者でもある。この、西洋人の手を経た日本風の楽曲に対する田中の議論の検討は、今後の課題としたい。

#### (7) 加藤弘之の独逸学事始<sup>(15)</sup>

東京大学初代総理・帝国大学第二代総長、独逸学協会学校長、帝国学士院長、貴族院議員、枢密顧問官などを歴任し、政治、学問、教育の各分野に足跡を刻んだ加藤弘之（1836-1916）は、近代日本のドイツ学のパイオニアの一人でもある。自伝によれば、加藤は恵まれぬ幼少時代を送った。天保の大飢饉と藩の減俸が重なった不幸な時期に出石藩士の子として生まれ、腕力も弱く、友人も少なかったという。14歳の時に母と死別し、1852年、江戸詰めとなった父親に従って出府し、父とともに佐久間象山（1811-64）に西洋式の兵学を学ぶ。象山は加藤に目をかけてくれたが、一年もしないうちに失脚してしまった。次いで大木忠益（坪井為春、1824-86）に学ぶが、今度は父が急死する。家督を継いだ加藤は、家族の反対を押して江戸に戻り、衣食に事欠く貧乏暮らしをしながら勉学を続けた。

1860年、師の周旋で蕃書調所教授手伝となる。職を得て暮らしぶりが多少良くなっただけでなく、箕作阮甫（1799-1863）、川本幸民（1810-71）、杉田玄端（1818-89）、木村軍太郎（1827-62）、市川兼恭（1818-99）、寺島宗則、坪井信良（1823-1904）、津田真道（1829-1903）、西周（1829-97）、杉亨二（1828-1917）といった碩学と机を並べる機会を得て、加藤の人生は上向きになった。

加藤の蕃書調所への入所の翌年、日本とプロイセンのあいだで日普修好通商条約が結ばれた。条約の締結当初、プロイセン側から日本へ送られる書簡にはオランダ語訳または和訳が添えられていたが、そ

の後、ドイツ文のみとなったため、幕府はドイツ語を解する人員を育成しなければならなくなった。加藤は市川兼恭とともにドイツ語を学び、1862年に市川と協力して『官版独逸単語編』を編纂した。これは日本人による最初のドイツ語単語集であり、日本におけるドイツ学に先鞭をつける仕事であった。この年、加藤は市川の妻の姪と結婚した。

1864年、加藤は出石藩を離れて幕臣となり、大目付として明治維新を迎えた。すぐに新政府から政体律令取調御用掛を拝命する。西洋の事情に通じていることが、異例の早さでの登用の理由だったと思われる。1869年、大学大丞となり、大学南校の長を務めることとなる。さらに1870～74年には、毎週2、3回、スイスの法学者ブルンチュリ（Johann Caspar Bluntschli 1808-81）などをテキストにして明治天皇に進講した。1875年に元老院議員、1877年に東京開成学校総理に就任する

蕃書調所への入所以来の十数年間、加藤はただドイツ語を習得するだけでなく、政治学や道徳、哲学に関する書物を読んで、自らの学問の幅を広げた。この点は、ドイツ語の力では加藤を凌ぎながら、もっぱら語学や電信技術、印刷技術の習熟に才能を費やして、出世街道を辿らなかった市川との分岐点だったかもしれない。

いち早くヨーロッパの言語や思想にふれた加藤は、既に幕末から、西洋の立憲政体が東洋の専制よりも優れていると考えるようになっていた。桜田門外の変以降の政治変動のなかで二十代半ばに書いた最初の著書『隣艸』（1861）は、「大律」と「公会」、つまり憲法と議会を設けて君主の権力を抑制する、「上下分権の政体」を理想としている。同書は表面的には隣国の清について論じたように装っているが、実際には日本のあるべき政体を論じた書である。これは同僚の津田や西の助言を容れての細工であった。加藤の著述活動はその後、『隣艸』を補完する『立憲政体略』（1868）や、立憲政の施政を論じた『真政大意』（1870）の執筆、さらにブルンチュリの『国体汎論』の訳出（1872～74）を挟んで、フリードリヒ二世（Friedrich II. 1712-86）を引き合

(15) 加藤弘之先生八十歳祝賀会編・出版『加藤弘之自叙伝—附金婚式記事概略・追遠碑建設始末』、1915年；上田勝美、福嶋寛隆、吉田曠二編『加藤弘之文書』3、同朋舎出版、1990年；区建英「〈隣艸〉と〈西洋事情〉—西洋理解の思考様式の角度から」『北大法学論集』41-1、1990年；堅田剛『独逸法学の受容過程—加藤弘之・穂積陳重・牧野英一』御茶の水書房、2010年；田中友香理『〈優勝劣敗〉と明治国家—加藤弘之の社会進化論』ぺりかん社、2019年；田畑忍『加藤弘之』吉川弘文館、2020年；Andreas Neemann, *Landtag und Politik in der Reaktionszeit: Sachsen 1849/50-1866*, Düsseldorf 2000.



いに出しつつ「天皇も人なり」と言い切り、あらためて立憲君主政の妥当性を主張した1874年の『国体新論』の発表へと続いた。この間の1873年、加藤は明六社の結成に加わり、また訳業のほうでは、フランクフルト国民議会の五十人委員を経験し、後にザクセンの国民自由党のリーダーとなったビーダーマン (Karl Biedermann 1812-1901) の『各国立憲政体起立史』(1875)、政治的なトゥルネン運動に参加したためにアメリカへの亡命を余儀なくされたリーバー (Franz Lieber 1798/1800-72) の『自由自治』(1876) を出版している。

しかし、旧東京大学初代総理になった1881年前後から、加藤の思想に変化が表れる。この年、彼は旧著を自ら絶版にする。『国体新論』への批判、政府からの圧力がその直接の理由だが、しかし本人の弁によれば、自分自身がその少し前から、進化論を知ったことかつての持論から離れていたという。1882年に発表した『人権新説』で、加藤はイギリスやドイツの研究に依拠しつつ社会進化論を展開し、天賦人権説の「妄想」を強く否定した。この頃、加藤が総理を務める東京大学でモース (Edward S. Morse 1838-1925) やフェノロサ (Ernest Fenollosa 1853-1908) によって社会進化論が紹介され、「優勝劣敗」の理論が日本に拡大しつつあった。短期間に三版を重ねた加藤の『人権新説』もまた、この流れを補強するものだった。

ただし、田中友香里によれば、加藤は社会進化論に傾倒してかつての立憲政体論から「転向」したわけではなく、むしろ、立憲政体が樹立される過程を進化論によって明確化しようとしたのだという。国権と民権、保守と進歩という二分論にあてはめれば、確かに加藤は転向者、変節漢のごとく見える。しかし、ドイツを代表する進化論者ヘッケルの思想が人種主義者と社会主義者、さらには青年運動や生改革運動の参加者にもよく読まれたように、ドイツにおいても日本においても、進化論は相対する両陣営の双方に大きな影響を与えた。『人権新説』で引用されているドイツ人学者たちを例にとっても、自由思想家党に属し、リープクネヒト (Wilhelm Liebknecht 1826-1900) とともに協力関係があったビューヒナー (Ludwig Büchner 1824-99)、学生時代に1849年バーデン蜂起を支持して退学処分を受

け、後年にはビスマルク (Otto von Bismarck 1815-98) の社会保障制度の実現に尽力したシェフレ (Albert Schäffle 1831-1903)、独自の中欧国家連合構想を掲げてビスマルクを批判した一方で反ユダヤ主義者でもあったフランツ (Constantin Frantz 1817-91)、1848/49年革命期のリーダーで大ドイツ主義であったが後にプロイセン支持に移ったフレーベル (Julius Fröbel 1805-93)、そして全ドイツ連盟の創始者に名を連ねるヘッケル (Ernst Haeckel 1834-1919) というように、その政治的立場は多様で流動的である。日本においても、『人権新説』と同時期に民権派の松島剛 (1854-1940) がスペンサー (Herbert Spencer 1820-1903) の著書を訳し『社会平権論』(1881~84) として出版するなど、やはり社会進化論は思想の左右を問わず、浸透しつつあった。

1893年、加藤は帝国大学総長を辞職した八ヶ月後にヘルヴァルト (Friedrich v. Hellwald 1842-92) の著作に感化されて『強者の権利の競争』を執筆し、翌年にそのドイツ語版をベルリンのR・フリードレンダー・ウント・ゾーン社から出版した。当時としては異例の、日本人によるドイツでの出版に対しては、『ベルリナー・ターゲブラット』、『ケルニッシェ・ツァイトゥング』、『ディー・ポスト』、『アルゲマイネ・ツァイトゥング』といったドイツ語圏の各紙、あるいはフランスの『ル・タン』が書評を寄せた。例えば、オーストリアの社会学者ラッツェンホーファー (Gustav Ratzenhofer 1842-1904) の著作と併せて加藤の著作を紹介した『グレンツボートン』誌の書評は、加藤のことを「ドイツの学問を吸収しているが、生粋のドイツ人につきものの偏見や執着、思い入れ、配慮を知らない日本人」であるがゆえに、「極めて論理一貫したドイツ人」と評する<sup>(16)</sup>。そして、ドイツ人が書いたもの以上にドイツ的な加藤の著作は、「東アジアが本当に我々の文化圏 Kulturkreis に入場したこと、今後は政治や国民経済の面で彼らを考慮に入れなければならないことを新たに証明した」としている。各紙が加藤の思想の独自性を認めたわけでは決してないが、先達のいない道を独力で進んだドイツ学の徒であった加藤からすれば、自らの意見をドイツ語で示してドイツに向けて発し、一定の反響を得たことは、ドイツ学の

(16) Die Grenzboten, 53-3, 1894, S. 585-595.



免許皆伝の証と言えるかもしれない。1907年、加藤は功績を認められ、ヴィルヘルム二世からプロイセン王冠第一等勲章を授与された。

加藤は11人の子供をもうけ、息子の照麿(1863-1925)、次男の晴比古(1870-1944)、女婿の榊保三郎(1870-1929)や山縣伊三郎(1858-1927)はドイツ留学を経験した。孫には音楽評論家の京極高鋭(1900-74)、小説家の濱尾四郎(1896-1935)、古川ロッパ(1903-61)がおり、彼らの活動範囲はドイツからはるかに逸脱している。

### Ⅲ. おわりに

西日本における政治・文化・経済の中心地であり、居留地のような国際社会との接点を有していた大阪や神戸は、日独の活発な交歓の場であった。大阪工芸学校や花苑都市、宝塚、あるいは神戸の異人館など、いわゆる阪神間モダニズムの展開にドイツが与えた影響も確認できるし、三木清、和辻哲郎、美濃部達吉、田中正平、加藤弘之といった人びとのドイ

ツ体験についてもさらなる議論の余地がある。また、本稿ではふれられなかったが、お雇い外国人リッター(Georg Hermann Ritter 1828-74)が所属した舎密局や、川口居留地のレーマン・ハルトマン商会なども、大阪・兵庫に残る関連史跡・史実として興味深い。

しかし、もう一つ忘れてならないのは、Ⅱ(3)で論じた日露戦争の捕虜や、兵庫県加西市青野原にあった第一次世界大戦時のドイツ人捕虜収容所、あるいは吹田の釈迦ヶ池遊猟事件のように、この地域の史跡・史実のなかにも、日独関係の摩擦や亀裂の側面をものがたるケースが複数存在していることである。これらの事例は、日独関係史を親善や町おこしの材料として表層的に消費するのではなく、複雑な国際交流の歴史を捉え直す手がかりとして客観的に検討することの必要を再確認させてくれる。

本稿は、2018～22年度科学研究費補助金・基盤研究(C)「1848～1871年のドイツ系革命家たちの活動とネットワークに関する研究」(課題番号18K01050)の成果の一部である。

#### ・大阪府と兵庫県に存する日独関係の史跡一覧

| 史 跡 名           | 住 所                             | 備 考                                                                                                                                                                                      |
|-----------------|---------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 吉志部神社           | 大阪府吹田市岸部北 4-18-1                | Ⅱ(1)に関連。                                                                                                                                                                                 |
| 川口居留地跡          | 大阪府大阪市西区川口 1-5 本田小学校北西角         | Ⅱ(1)に関連。ハイトケンパーの他、レーマン・ハルトマン商会などが活動。                                                                                                                                                     |
| 横浜市長浜ホール        | 神奈川県横浜市金沢区長浜 114-4              | Ⅱ(1)に関連。1879年に神奈川県長浦港(現横須賀市)に設けられた横浜検疫場の事務所を改築。隣接の旧細菌検査室に野口英世(1876-1928)が勤務。近隣に旧長濱検疫所一号停留所(検疫資料館)。                                                                                       |
| 「此附近露国皇太子遭難之地」碑 | 滋賀県大津市京町 2-2-14                 | Ⅱ(1)に関連。                                                                                                                                                                                 |
| 児島惟謙銅像          | 愛媛県宇和島市丸之内 3-6 宇和島城上り立ち門前       | Ⅱ(1)に関連。近隣に生誕地。                                                                                                                                                                          |
| 大審院児島惟謙苦学之地     | 愛媛県西予市野村町野村 12-334              | Ⅱ(1)に関連。                                                                                                                                                                                 |
| 大阪市立工芸高等学校      | 大阪府大阪市阿倍野区文の里 1-7-2             | Ⅱ(2)に関連。                                                                                                                                                                                 |
| 大阪市舞洲スラッジセンター   | 大阪府大阪市此花区北港白津 2-2-7             | Ⅱ(2)に関連。                                                                                                                                                                                 |
| 造幣博物館           | 大阪市北区天満 1-1-79                  | Ⅱ(2)に関連。河合の建築は他に新井ビル(旧報徳銀行大阪支店)(大阪市中央区今橋 2-1-1)。神戸市内に神戸地方裁判所(中央区橘通 2-2-1)、旧小寺家厩舎(重文)(中央区中山手通 5-3-1 相楽園)、神戸メリケンビル(旧神戸郵船ビル)(中央区海岸通 1-1-1)、海岸ビルヂング(中央区海岸通 3-1-5)、神戸市水の科学博物館(兵庫区楠谷町 37-1)など。 |
| 關一銅像            | 大阪府大阪市北区中之島 1-1-26 大阪市立東洋陶磁美術館前 | Ⅱ(2)に関連。                                                                                                                                                                                 |

大阪府と兵庫県に存するドイツ関連史跡の総合的検討

|                  |                          |                                                                                                            |
|------------------|--------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 多摩聖蹟記念館          | 東京都多摩市連光寺 5-1-1          | Ⅱ (2) に関連。設計者の一人である蔵田周忠 (1895-1966) はパウハウスを訪問。                                                             |
| 三岸アトリエ / アトリエ M  | 東京都中野区上鷲宮 2-2-16         | Ⅱ (2) に関連。三岸好太郎 (1903-1934) のアトリエ。山脇巖が設計。                                                                  |
| ロシア兵墓地           | 大阪府泉大津市春日町 19-13         | Ⅱ (3) に関連。                                                                                                 |
| 浜寺公園             | 大阪府堺市西区浜寺公園町             | Ⅱ (3) に関連。園内に日露友好の像。近隣に浜寺俘虜 (捕虜) 収容所跡地の説明板 (高師浜 4-10-1)。                                                   |
| 東福寺派塔頭 霊雲院       | 京都府京都市東山区本町 15-801       | Ⅱ (3) に関連。ロシア兵捕虜関連の展示。                                                                                     |
| 日露友好の丘           | 長崎県対馬市上対馬町西泊             | Ⅱ (3) に関連。日露戦争百周年記念で建立。                                                                                    |
| ロシア兵墓地           | 愛媛県松山市御幸 1-531-2         | Ⅱ (3) に関連。第一次世界大戦のドイツ兵捕虜の墓も。他に石川県戦没者墓苑 (金沢市野田町)、明治記念堂 (佐渡市千種)、島根県隠岐郡隠岐の島町中町大城の五、福知山市堀にも。                   |
| 坂の上の雲ミュージアム      | 愛媛県松山市一番町 3-20           | Ⅱ (3) に関連。                                                                                                 |
| イルティッシュ号慰霊碑      | 島根県江津市和木町 1148-68        | Ⅱ (3) に関連。近隣の和木地域コミュニティ交流センター (和木町 570-1) に展示。                                                             |
| ステッセルのピアノ        | 石川県金沢市末町 10 金沢学院大学       | Ⅱ (3) に関連。                                                                                                 |
| 記念艦三笠            | 神奈川県横須賀市稲岡町 82-19        | Ⅱ (3) に関連。                                                                                                 |
| 東郷神社             | 福岡県福津市渡 1815-1           | Ⅱ (3) に関連。戦艦三笠の主砲の先端部。大峰山の山頂に日本海海戦記念碑。日本各地に東郷神社、児玉神社、乃木神社。宗像大社の神宝館 (渡 1238) に戦艦三笠の現物の羅針儀を所蔵。               |
| 宝塚歌劇の殿堂          | 兵庫県宝塚市栄町 1-1             | Ⅱ (4) に関連。                                                                                                 |
| 帝国劇場             |                          | Ⅱ (4) に関連。旧劇場の「翁面」が残る。                                                                                     |
| 高砂通運旧本店          | 兵庫県高砂市高砂町鍛冶屋町 1603-1     | Ⅱ (5) に関連。                                                                                                 |
| 美濃部親子文庫          | 兵庫県高砂市高砂町横町 1099-1 高砂公民館 | Ⅱ (5) に関連。近隣に美濃部達吉生家跡 (高砂町材木町)。                                                                            |
| 和辻哲郎の生家の碑        | 兵庫県姫路市仁豊野 309            | Ⅱ (5) に関連。                                                                                                 |
| 姫路文学館            | 兵庫県姫路市山野井町 84            | Ⅱ (5) に関連。                                                                                                 |
| 霞城館              | 兵庫県たつの市龍野町上霞城 30-3       | Ⅱ (5) に関連。                                                                                                 |
| 白鷺山公園「哲学の道」      | 兵庫県たつの市龍野町中霞城            | Ⅱ (5) に関連。三木清哲学碑。                                                                                          |
| 旧川喜多邸別邸 (旧和辻邸)   | 神奈川県鎌倉市雪ノ下 2-2           | Ⅱ (5) に関連。                                                                                                 |
| 田中正平博士顕彰碑        | 兵庫県南あわじ市賀集八幡 734 賀集八幡神社  | Ⅱ (6) に関連。                                                                                                 |
| 京都女子学園建学記念館「錦華殿」 | 京都府京都市東山区今熊野北日吉町 35      | Ⅱ (6) に関連。純正調オルガンを所有。他に国立音楽大学楽器学資料館 (東京都立川市柏町 5-5-1)、民音音楽博物館 (東京都新宿区信濃町 8)、浜松市楽器博物館 (静岡県浜松市中区中央 3-9-1) にも。 |
| 国歌君代発祥之地         | 神奈川県横浜市中区妙香寺台 8          | Ⅱ (6) に関連。                                                                                                 |
| 加藤弘之生家           | 兵庫県豊岡市出石町下谷 10-1         | Ⅱ (7) に関連。                                                                                                 |
| 明治館              | 兵庫県豊岡市出石町魚屋 20           | Ⅱ (7) に関連。                                                                                                 |
| 蕃書調所跡            | 東京都千代田区九段北 1-3-2         | Ⅱ (7) に関連。                                                                                                 |

|                       |                                |                                                                                                                                                                           |
|-----------------------|--------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 大阪舎密局跡                | 大阪府大阪市中央区大手前 3-1               | 舎密局は京大の前身。リッターらが関与。オランダ人化学者ハラタマ (Koenraad Wolter Gratama 1831-88) の顕彰碑。京都舎密局跡 (京都市中京区鉾田町) も。                                                                              |
| 阪神甲子園球場               | 兵庫県西宮市甲子園町 1-82                | ドイツ兵捕虜のウォルシュケ (Friedrich Hermann Wolschke 1893-1963) が 1934 年に初めてホットドックを販売。                                                                                               |
| フロインドリープ生田店           | 兵庫県神戸市中央区生田町 4-6-15            | ヴォーリス (William Merrell Vories 1880-1964) 設計の旧神戸ユニオン教会。ドイツ兵捕虜のフロインドリープ (Heinrich Freundlieb 1884-1955) は解放後に日本でパン屋・洋菓子屋・レストランを経営。私宅は北野物語館中央区北野町 3-1-31) に所在。               |
| ドイツクラブ (クラブコンコルディア) 跡 | 兵庫県神戸市中央区山本通 2-14-1 メディセオ北野坂ビル |                                                                                                                                                                           |
| 神戸ユダヤ共同体 (神戸ジュエコム) 跡地 | 兵庫県神戸市中央区山本通 1-4-28            |                                                                                                                                                                           |
| 風見鶏の館                 | 兵庫県神戸市中央区北野町 3-13-3            | デ・ラランデ (Georg de Lalande 1872-1914) が設計、ドイツ人貿易商の住宅。重文。市内のドイツ関連の洋館としてラインの館 (北野町 2-10-24)、旧シャープ住宅 (重文) (北野町 3-10-11)、旧ハンター住宅 (重文) (灘区王子町 3-1)、旧グッゲンハイム邸 (垂水区塩屋町 3-5-17) など。 |
| トアロード                 | 兵庫県神戸市中央区                      | 1908～50 年に沿道にトアホテルが存在。                                                                                                                                                    |
| 小林聖心女子学院本館            | 兵庫県宝塚市塔の町 3-113                | レーモンド (Antonin Raymond 1888-1976) が設計。                                                                                                                                    |
| 青野原俘虜収容所跡地            | 兵庫県加西市青野原町                     |                                                                                                                                                                           |

# *Kaivalyadīpikā* における *Bhāgavatapurāṇa* 3.25.32-33 解釈 —— *vihitā bhakti* の *vihitā* の意味に関して ——

眞 鍋 智 裕

## 要 旨

本稿の主題は、12-13 世紀に活躍したヴィシュヌ教徒ヴォーパデーヴァの著作 *Muktāphala* (MPh) と彼の庇護者であったヘーマードリによる MPh に対する註釈 *Kaivalyadīpikā* (KD) におけるバクティ論である。MPh にみられるバクティの議論のうち、特に「規定されたバクティ」(*vihitā bhakti*) というバクティの分類に関して、バクティが「規定されている」ということは具体的にどのようなことを意味しているのか、ということを取り扱った。MPh は、それぞれの議題の根拠となる *Bhāgavatapurāṇa* (BhP) の引用から成り立つ著作であり、その趣意を理解するには KD を解読する必要がある。本稿では、MPh が「規定されたバクティ」の根拠として引用する BhP 3.25.32-33 に対する KD の記述を分析することで、バクティが「規定されている」ということは、バクティがヴェーダ聖典に規定されているということであること、また「規定されている」のはバクティそれ自体ではなく、バクティの「手段」であることを明らかにした。

## The Interpretation of *Bhāgavatapurāṇa* 3.25.32-33 in the *Kaivalyadīpikā*: On the Meaning of "*vihitā*" in *vihitā bhakti*

MANABE, Tomohiro

## Abstract

The main focus of this paper is a discussion of *bhakti* in the *Muktāphala* (MPh), a work written by Vopadeva, a *Vaiṣṇava* scholar who flourished in the 12th - 13th centuries, and in the *Kaivalyadīpikā* (KD), a commentary on the MPh that was composed by Vopadeva's patron, Hemādri. Among the discussions of *bhakti* in the MPh, I deal specifically with the classification of *bhakti* as "prescribed" (*vihitā bhakti*) and with what it means for *bhakti* to be "prescribed." The MPh is a work consisting entirely of verses quoted from the *Bhāgavatapurāṇa* (BhP), which serve to establish the orthodox position on each theological topic. Therefore, it is necessary to decipher the KD's commentary in order to understand Vopadeva's intentions. By analyzing the KD's interpretation of BhP 3.25.32-33, which in the MPh are cited as proof texts for "prescribed *bhakti*", I show that for *bhakti* to be "prescribed" means that *bhakti* is prescribed in the Vedic scriptures, and what is "prescribed" is not *bhakti* itself, but the "means" of *bhakti*.

## 1. 序

チャイタニヤ (Caitanya, ca. 1486-1534)<sup>(1)</sup>に端を発するガウディーヤ・ヴァイシュナヴァ派 (Gauḍīya Vaiṣṇava) のヴィシュヌ教思想や、彼等の活動がすでに活発化していたベンガル地方で生を

受けたアドヴァイタ・ヴェーダーンタ学派 (不二一元論学派) の思想家マドゥスーダナ・サラスヴァティー (Madhusūdana Sarasvatī, ca. 16-17th CE) のヴィシュヌ教思想は、13 世紀から 14 世紀に活動したヴィシュヌ教徒シュリーダラ・スヴァーミン (Śrīdhara Svāmī) の影響を受けていることがこれ

(1) チャイタニヤの年代は Gupta [2007:3] に従った。



までの研究で明らかになっている<sup>(2)</sup>。一方、ガウディーヤ・ヴァイシュナヴァ派とマドゥスーダナは、シュリーダラの他に、12世紀から13世紀にマハーラーシュトラ地方で活動したヴィシュヌ教徒ヴォーパデーヴァ (Vopadeva or Bopadeva)<sup>(3)</sup>による聖典 *Bhāgavatapurāṇa* の註釈的著作 *Muktāphala* (MPh) に見られるヴィシュヌ教思想と、彼の庇護者であった<sup>(4)</sup>ヘーマードリ (Hemādri) による MPh に対する註釈 *Kaivalyadīpikā* (KD) に見られるヴィシュヌ教思想<sup>(5)</sup>、特にヴォーパデーヴァとヘーマードリのバクティ思想から影響を受けているとも考えられている<sup>(6)</sup>。というのも、ガウディーヤ・ヴァイシュナヴァ派のバクティ思想とマドゥスーダナのバクティ思想は、最高神に対する絶対的帰依であるバクティ (信愛, bhakti) を、インド美学の重要概念であるラサ (rasa, 味わい, 情趣) と結びつけ、バクティ・ラサ (信愛の情趣) として論じている<sup>(7)</sup>が、このバクティをラサと結びつけた最初の人物がヴォーパデーヴァ、ヘーマードリであると目されているからである<sup>(8)</sup>。

これら MPh と KD におけるバクティに関して、これまでにインド美学のラサ論の観点からは研究がなされてきている<sup>(9)</sup>が、そもそもその「バクティとは何か」という視点からの研究はなされてきていない<sup>(10)</sup>。MPh・KD においては第五章でバクティの一般的定義 (sāmānyalakṣaṇa) とその分類 (bheda) が論じられており、そのバクティ論は、17世紀の

アドヴァイタ・ヴェーダーンタ学派の思想家ナーラーヤナ・ティールタ (Nārāyaṇa Tīrtha) によって継承されている<sup>(11)</sup>。ナーラーヤナは、先駆者マドゥスーダナのバクティ論を踏まえながらも、マドゥスーダナとは異なるアドヴァイタ・バクティを論じている。そのため、アドヴァイタ・ヴェーダーンタ学派内部でのバクティ思想の受容という問題を考察するうえで、彼等両者に影響を与えた MPh・KD のバクティ論の全体像を明らかにすることは非常に重要である。そこで本稿では、MPh・KD においてバクティがどのようなものと考えられているのか、という点を明らかにしたい。

また、ヴォーパデーヴァとヘーマードリはアドヴァイタ・ヴェーダーンタ学派とは少し異なったアドヴァイタ (一元論) 思想を奉じていたことが先行研究によって指摘されている<sup>(12)</sup>。しかし、彼等のアドヴァイタ思想が具体的にどのようなもので、どこがアドヴァイタ学派と異なっているのかということも未だ十分に明らかにされていない。この点を明らかにすることは、彼等のバクティ思想がアドヴァイタ学派のマドゥスーダナやナーラーヤナのバクティ思想にどのような影響を与えたかを分析する際に非常に重要な要素となる。そのため本稿では、彼等のアドヴァイタ思想についても注目しつつ考察を加える。

なお MPh は、ある主題に関して、ヴォーパデーヴァがその典拠となると考えている BhP を引用す

(2) Nelson [1986], [2004], Gupta [2007: 65-84], Lutjeharms [2014: 186-188], 眞鍋 [2017] 等を参照。

(3) ヴォーパデーヴァは文法学・修辞学者でもあり、*Mugdhābodha*, *Kavikarṇādruma* 等の著作が現存している。Raghavan [1978: 123f.], Venkatkrishnan [2015: 47] 参照。

(4) ヘーマードリに関しては Raghavan [1978: 123], Venkatkrishnan [2015: 47], Pollock [2016: 286] を参照。

(5) 彼等のヴィシュヌ教関連の著作として、ヴォーパデーヴァには BhP を要約した *Harilīlā* (HL), ヘーマードリには HL に対する註釈 *Harilīlāviveka* (HLV or *Harilīlāvākyā*) が現存する。この HL と HLV, 特に HLV の著者問題を論じた先行研究として、Okita [2020b] がある。

(6) Lutjeharms [2014: 186-187], Nelson [2004], Venkatkrishnan [2015: 195-196] 等を参照。

(7) Raghavan [1940], Nelson [1989], [2004], Sharma [1996], Gupta [1998], Gupta [2006: 137-144], Tongū [2011], Lutjeharms [2014], Pollock [2016: 290-310], Okita [2017], 眞鍋 [2021a], [2021b] 等を参照。

(8) Raghavan [1940], Buchta and Graham [2010], Pollock [2016: 285-303], また Lutjeharms [2014: 186-188], Venkatkrishnan [2015: 50-52] 参照。

(9) Raghavan [1940], Lutjeharms [2014: 186-187], Pollock [2016: 285-303] 等を参照。

(10) 近頃、*Bhāgavatapurāṇa* 10.43.17 に対する諸解釈を比較した論文 Edelman [2021] が出版された。この Edelman [2021] では、ヴォーパデーヴァとヘーマードリのバクティ観やラサ観も論じられている。

(11) Upādhyāya [1998: (19)-(20)], Venkatkrishnan [2015: 233, fn.630] 参照。しかし、この MPh・KD における「バクティ」章のバクティの分類は、ナーラーヤナの先駆者マドゥスーダナによっては採用されていない。ナーラーヤナのバクティ論は、マドゥスーダナのバクティ論をも踏まえて形成されたものであるため、両者の MPh・KD のバクティ論に対する態度の違いは、アドヴァイタ・ヴェーダーンタ学派内部でのバクティ受容を考察するうえで非常に重要であると考えられる。

(12) Raghavan [1978], Venkatkrishnan [2015: 46-51, 195, fn. 534].

る形式で記述されており、どうして当該の BhP がその議論の典拠となるのか、という点に関しては KD の記述を分析する必要がある。そのため本稿では、主に KD に対して考察を加えることとなる。

## 2. MPh・KD におけるバクティの分類と「規定された」バクティ (vihitā bhakti)

ヴォーパデーヴァは、MPh 第五章<sup>(13)</sup>において、バクティを 18 種に分類している。以下に、MPh におけるバクティの分類を列挙する<sup>(14)</sup>。

### I. 規定されたバクティ (vihitā bhakti)

#### ◇混ざったバクティ (miśrā bhakti)

##### ◆行為と混ざったバクティ (karmamiśrā bhakti)

##### ・暗質的なバクティ (tāmasī bhakti)

1. 殺生を目的とするバクティ  
(himsārthā bhakti)

2. 詐欺を目的とするバクティ  
(dambhārthā bhakti)

3. 嫉妬を目的とするバクティ  
(mātsaryārthā bhakti)

##### ・激質的なバクティ (rājasī bhakti)

4. 対象を目的とするバクティ  
(viṣayārthā bhakti)

5. 名声を目的とするバクティ  
(yaśo 'rthā bhakti)

6. 権力を目的とするバクティ  
(aiśvaryārthā bhakti)

##### ・純質的なバクティ (sāttvikī bhakti)

7. 業の消滅を目的とするバクティ  
(karmakṣayārthā bhakti)

8. ヴィシュヌ神の喜びを目的とするバクティ  
(viṣṇuprītyārthā bhakti)

9. 規定の達成を目的とするバクティ  
(vidhisiddhyārthā bhakti)

##### ◆行為と知と混ざったバクティ

(karmajñānamiśrā bhakti)

10. 低位のバクティ (adhamā bhakti)

11. 中位のバクティ (madhyamā bhakti)

12. 最上のバクティ (uttamā bhakti)<sup>(15)</sup>

##### ◆13. 知と混ざったバクティ (jñānamiśrā bhakti)

##### ◇14. 純粋なバクティ (śuddhā bhakti)

### II. 規定されていないバクティ (avihitā bhakti)

15. 欲望から生じるバクティ (kāmajā bhakti)

16. 嫌悪から生じるバクティ (dveṣajā bhakti)

17. 恐怖から生じるバクティ (bhayajā bhakti)

18. 愛着から生じるバクティ (snehajā bhakti)

このように、ヴォーパデーヴァは先ずバクティを「規定されたもの」(vihitā) と「規定されていないもの」(avihitā) の二つに大別し、それぞれの下位分類を行っている。この「規定された」と「規定されていない」というバクティの形容の意味は、後に見るように「ヴェーダ聖典に規定された」、「ヴェーダ聖典に規定されていない」という意味である<sup>(16)</sup>。しかし、バクティはヴェーダ聖典ではなく、ヴェーダ聖典の後に成立した聖典 *Bhagavadgītā* (BhG) において登場したもの<sup>(17)</sup>であり、また通常バクティはヴェーダ聖典に説かれているとは考えられない<sup>(18)</sup>ため、バクティがヴェーダ聖典に「規定された」、「規定されていない」とはどういうことであるのか、という疑問が生じてくる。そこで本稿では、MPh が「規定されたバクティ」の一般的定義として引用する BhP 3.25.32-33 に対する KD の解釈を分析し、バクティがヴェーダに「規定された」とは、一体どういうことを意味しているのか、ということを明らかにする<sup>(19)</sup>。

## 3. MPh・KD におけるバクティ一般の定義

「規定された」バクティの一般的定義を検討する前に、先ず MPh・KD において、バクティ一般がどのように定義されているのかを確認しておきたい。ヴォーパデーヴァは、バクティ一般の定義とし

(13) MPh の全体的な構成に関しては Pollock [2016: 285] 参照。

(14) Upādhyāya [1998: (19)] 参照。

(15) MPh と KD における解説は、uttamā, madhyamā, adhamā の順であるが、便宜上低位のものから高位のものになるように順番を入れ替えて提示した。

(16) 本稿第四節第一項を参照。

(17) BhG 以前にも *Śvetāśvataropaniṣad* に人格神に対するバクティが見られるが、そこでのバクティは BhG に見られるような救済の手段としてのバクティではない。徳永 [1989: 207-209] 参照。

て「それ故、何れの手段によっても、思考器官（心）をクリシュナ〔神〕に集中させるべきである」（*tasmāt kenāpy upāyena manah kṛṣṇe niveśayet*）という BhP 7.1.31cd<sup>(20)</sup>を提示する。このことから、ヴォーパデーヴァはバクティを「思考器官（心）をクリシュナ神に集中させること」と考えていたことが漠然と推察されるが、KD の検討を通じてより詳しく分析していきたい<sup>(21)</sup>。

KD 83,8-11: *tasmād iti. yasmāt kṛṣṇa eva kaivalyapradah. yad vā tasmād upāyaviśeṣasyāviva-kṣitatvāt.*<sup>(22)</sup> *kenāpi vihitena vihitena*<sup>(23)</sup> *vopāyena sādhyasiddhāv*<sup>(24)</sup> *avadhṛtasāmarthyena.*<sup>(25)</sup> *na tūnmādādinā.*<sup>(26)</sup> *kṛṣṇe sattvopādhou brahmaṇi. niveśayet sthīrikuryāt,*<sup>(27)</sup> *liṅnirdeśasyāvivakṣitatvād*<sup>(28)</sup> *upāyapūrvam bhagavati manassthīrikaraṇam bhaktir*<sup>(29)</sup> *iti lakṣaṇārthaḥ.*<sup>(30)</sup>

それ故〔以下を註釈する〕。何故なら、クリシュ

(18) しかし、BhP 1.4.20cd においては、「叙事詩とブラーナは第五のヴェーダであると言われる」（*itihāsapurāṇam ca pañcamo veda ucyate*）という記述がある。また MPh には次のような記述が見られる。MPh 142,10f.: *tasmāt sarvātmanā rājan hariḥ sarvatra sarvadā / śrotavyaḥ kīrtitavyaś ca smartavyo bhagavān nṛṇām* // 7.97 (= BhP 2.2.36) // （それ故に、王よ、人々にとって、全面的に、全ての場所で、全ての時に、主ハリ〔神〕が聴かれるべきであり、称えられるべきであり、想起されるべきである）。この MPh 7.97 に対して KD では以下のように述べられる。KD 142,15: *tasmād yasmād bhaktāv eva vedasya tātparyam*（バクティにこそヴェーダの趣意があるので、それ故に、である）。以上のような記述から、ヴォーパデーヴァとヘーマードリは、ヴェーダの趣意であるバクティを説く BhG や BhP 等を第五の「ヴェーダ聖典」として理解していた可能性がある。その場合には、彼等は、この「第五のヴェーダ聖典」にバクティが説かれているという意味でヴェーダにバクティが規定されていると述べている可能性も浮上する。BhP がヴェーダ聖典と同等のものであるとする考え方は、13 世紀頃のマドゥヴァやガウディーヤ・ヴァイシュナヴァの諸思想家、マドゥスーナ等、広く見られる。眞鍋 [2019: (107)-(110)], Okita [2020a: 460-462] 等参照。しかし管見の限りでは、ヴォーパデーヴァとヘーマードリが「ヴェーダ」（*veda*）や「天啓聖典」（*śruti*）という語を使用する際には、バラモン伝統的な意味で使っているように思われる。例えば、MPh 1.19, 1.28, 2.9, 11.10, 17.13 に対する KD が挙げられる。また MPh・KD において彼等は叙事詩とブラーナを第五のヴェーダと述べる BhP 1.4.20 を引用しない。さらに、彼等は「ヴェーダ聖典に規定されていないバクティ」の根拠として BhP を提示している。そのため、もしも彼等が BhP をヴェーダ聖典と見做しているとすれば、BhP に依拠した「ヴェーダ聖典に規定されていないバクティ」もヴェーダ聖典に規定されているバクティということになってしまう。以上のことから、執筆者は今のところ、彼等が「バクティがヴェーダ聖典に規定されている」という時、伝統的な意味でのヴェーダ聖典が意図されていると考えている。この点に関しては、MPh・KD における「ヴェーダ」、「天啓聖典」という語の用例をよりよく検討したうえで、改めて考察したい。

(19) バクティがヴェーダに「規定されていない」とはどういうことを意味しているのか、という点に関しても別稿を予定している。

(20) 本稿では、BhP の偈文番号は *Śrīmadbhāgavata-Mahāpurāṇa: "Śrīdhārī"tikopetam*. Ed. Paṇḍita Rāma teja Paṇḍeya. Dillī: Chaukhambha Sanskrit Pratishthan 2011 に従っている。また、MPh・KD のロケーションは G に従った。なお、シュリーダラの BhP に対する註釈 *Bhāvārthadīpikā* (BhAD) と MPh・KD とでは BhP 7.1.31 に対する解釈が異なっているが、BhP 7.1.31cd に対しては、BhAD は特に直接註釈を付していない。MPh・KD と BhAD との解釈の違いは、別稿で論じる予定である。

(21) 執筆者は現在、以下の公刊本と写本を使用して MPh・KD 第五章の批判的校訂テキストを作成している。本稿で使用する MPh・KD 第五章のテキストに関しては、その成果を提示する。公刊本は G と P であり、MPh と KD 両方を含む。写本は A, D<sub>1</sub>, D<sub>2</sub>, E, T であり、A, D<sub>1</sub>, E は MPh と KD 両方を含むが、D<sub>2</sub>, T は KD のみの写本である。また、A, E はネパール写本であり、The Nepal-German Manuscript Cataloguing Project (NGMCP) による Microfilm のデジタル・コピーである。また、D<sub>1</sub> と D<sub>2</sub> は、ジャンム・カシュミールの写本であり、Raghuṇath 寺の研究機関である Dharma Trust が、ジャンムの同寺所蔵の写本をデジタルデータ化したものである。Internet Archive 上からダウンロードしたものを使用した。T は、Kerala 州 Thrissur の写本であり、Vadakke Madham Brahmaswam 寺に所蔵されているものを、British Library の助成を受けて、チェンナイの École française d'Extrême-Orient のプロジェクトチームがデジタルデータ化しているもののうちのひとつである。現在 British Library の web サイトで閲覧が可能である。それぞれの詳細は参考文献一覧を参照。ところで A に関して、本稿で主に分析を加える MPh 5.1-2 = BhP 3.25.32-33 と当該箇所に対する KD が含まれるフォリオが欠落してしまっている。しかし本稿においては、煩雑さを回避するために、校訂テキストに A のフォリオ欠落の情報を逐一は入れていない。A の情報が記載されていない場合は、A のフォリオが欠落していると判断されたい。

(22) °viśeṣasyāvivakṣitatvāt D<sub>1</sub>, D<sub>2</sub>, E, G<sub>kh</sub>, T] °viśeṣasya vivakṣitatvāt G, P.

(23) °avihitena D<sub>1</sub>, E, G, P, T] amvihitena D<sub>2</sub>.

(24) sādhyasiddhāv D<sub>1</sub>, D<sub>2</sub>, E, T] sādhyasiddhy- G, P.

(25) avadhṛtasāmarthyena D<sub>1</sub>, D<sub>2</sub>, G, P] avadhṛtasāmarthyena E; avadhṛtasāmarthyē T.

(26) na tūnmādādinā D<sub>2</sub>, G, T] nanūnmādādinā P. D<sub>1</sub> と E に関しては、nanū- なのか na tū- なのか判断不可能。

(27) niveśayet sthīrikuryāt D<sub>1</sub>, D<sub>2</sub>, E, P, T] niveśayet G.

(28) liṅnirdeśasyāvivakṣitatvād D<sub>1</sub>, D<sub>2</sub>, E, G, T] liṅnirdeśasyāpy avivakṣitatvād P.

(29) manassthīrikaraṇam bhaktir D<sub>1</sub>, D<sub>2</sub>, G, P] manassthīrikārṇabhaktir E; manassthīrikaraṇam bhaktir T.

(30) lakṣaṇārthaḥ D<sub>1</sub>, D<sub>2</sub>, E, G, P] lakṣaṇārtthā T.



ナ [神] のみが独存状態 (kaivalya) を与えるものであるから、[それ故に、ということである]。或いは、それ故、即ち特定の手段が意図されていないから、ということである。何れの、即ち [ヴェーダに] 規定された、或いは [ヴェーダに] 規定されていないくとも、手段によって、すなわち達成対象の実現に対して適性が確定されたものによって、ということであり、しかし、熱狂等によってではない。クリシュナ [神] にとは、純質を制約条件とする (sattvopādhau) ブラフマンに、ということである。集中させるべきであるとは、固定すべきである、ということである。願望法の指示は意図されていないので、バクティとは、手段を前提として、主 (bhagavat) に対して思考器官を固定させることである、というのが定義の意味である。

この KD の記述に依れば、BhP 7.1.31cd における「それ故」(tasmāt) という語には、二つの意味があるとされている。第一の意味は、「クリシュナ神のみが独存状態、すなわち解脱<sup>31)</sup>を与えるものであるから」クリシュナ神に思考器官 (心) を集中させるべきである、ということである。第二の意味は、「特定の手段が意図されていないから」何れの手段によってもクリシュナ神に思考器官を集中させるべきである、ということである。

さらに KD では、BhP 7.1.31cd における「何れの手段によっても」(kenāpy upāyena) という語句のうちの「手段によって」(upāyena) という語に関して、手段とは、達成対象の実現に対して適性が確定されたものと記述されている。このことは、あること (A) を遂行すれば、特定の事象 (B) が実現することが定まっている場合、そのあること (A) が特定の事象 (B) の手段であるということを意味している。この BhP 7.1.31cd の文脈では、達成対象 (sādhya) とは「思考器官をクリシュナ神に集中させること」つまりバクティのことであり、「手段」とはバクティの手段のことを意味していると考えられる。また、「何れによっても」(kenāpi) とは、規定された手段によっても、規定されていない手段に

よっても、という意味であるとされている。この記述は、後に検討する「規定された」バクティと「規定されていない」バクティが予想されるものであり、バクティの定義のなかに「規定されたもの」と「規定されていないもの」のどちらも含めることを意図したものである。

さらに、以上のように、バクティの手段は、規定された手段であっても、規定されていない手段であっても、何れの手段であってもよい、ということではあるが、ヘーマードリは続けて「しかし、熱狂等によってではない」(na tūnmādādinā) と述べている。このことから、何れの手段でもよいということとは、あくまでも「バクティの」手段であれば何れでもよいということであることと、ヘーマードリが、クリシュナ神に対する熱狂等は、達成対象 (バクティ) の実現に対して適性が確定されていないもの、つまりバクティの手段ではない、と考えていたことが理解できる。

また、BhP 7.1.31cd における「クリシュナ [神] に」(kṛṣṇe) とは、純質 (sattva) を制約条件 (upādhī) とするブラフマン (brahman) に、ということであると述べられている。このことに関して、MPH の第一章において、ヴィシュヌ神が無形相なものとは有形相なものに分類されており、そのうちの有形相なヴィシュヌ神は「純質に限定された精神性」(sattvāvacchinnaṃ caitaniyam) であると述べられている<sup>32)</sup>。精神性 (caitanya) とは、ヴェーダーンタ学派においてブラフマンの本質であるため、ここでのクリシュナ神とは、純質に限定された精神性、すなわち有形相なヴィシュヌ神を意図していると考えられる。

またヘーマードリは、「(クリシュナ神に思考器官を) 集中させるべきである」(niveśayet) ということに関しては、クリシュナ神に思考器官 (心) を「固定すべきである」つまり心をクリシュナ神に固定させて動かさないようにすることと解釈している。しかしヘーマードリは、「集中させるべきである」(niveśayet)、「固定すべきである」(sthīrīkuryāt) と、願望法の動詞が使用されているが、ここではその願望法の指示である「～すべき」ということは意図さ

31) 独存状態 (kaivalya) は、BhP 11.20.34 では「再び生まれないこと」(apunarbhava) と述べられており、これは輪廻からの解脱を意味している。BhP 11.20.34: na kimcit sādhaḥ dhīrā bhaktā hy ekāntino mama / vāñchanty api mayā dattaṃ kaivalyam apunarbhavam // (実に、正しく確固たる者で専一な私のバクタ達は、私によって与えられたとしても、独存状態である解脱 (apunarbhava) を決して望まない)。



れておらず、単に主クリシュナに対して「思考器官を固定すること」が述べられていると解釈している。

以上のKDの記述を総合してKDにおけるバクティ一般の定義をまとめてみると、次のようになるだろう。すなわち、バクティとは「規定された手段であれ規定されていない手段であれ、それ（バクティ）の手段に基づいて、クリシュナ神、つまり純質に制約されたブラフマンに対して思考器官を固定すること」である。そしてこの定義から、「規定されたバクティ」と「規定されていないバクティ」とは何か、という問題に関して想定できることは、「規定されているもの」と「規定されていないもの」とは、バクティそのものではなく、その手段であるということである。

#### 4. 「規定されたバクティ」の一般的定義

##### 4.1. 神々が諸の属性（美質）を諸徴表とするとはどういう意味か

MPhでは、上記のようにBhP 7.1.31cdによってバクティ一般の定義を示した後に、そのバクティ一般を「規定されたもの」と「規定されていないもの」に分類する<sup>33</sup>。そのうちの「規定された」バクティの一般的定義を以下で検討したい。ヴォーパデー

ヴァは、「規定された」バクティの一般的定義として、BhP 3.25.32-33を提示する<sup>34</sup>。

MPh 83,19-21, 84,17f.: tatra vihitā –

devānām<sup>35</sup> guṇalingānām ānuśravikakarmanām<sup>36</sup> /  
sattva evaikamanaso vṛttiḥ svābhāvikī tu yā //  
1 // (= BhP 3.25.32)  
animittā bhāgavatī bhaktiḥ siddher garīyasī /  
jarayat āśu yā kośam<sup>37</sup> nigīrṇam analo yathā  
// 2 // (= BhP 3.25.33)

その（規定されたバクティと規定されていないバクティの）うち規定されたものは「以下のようである」。

専一な思考器官を持つ者にとっての、諸属性（guṇa, 美質）を諸徴表とし、天啓聖典に基づくものを行為とする神々の、有性のみに対する活動であり、自性上のものであるもの、[また、腹中の]火が飲み込まれたものを[素早く消失させる]ように、覆いを素早く消失させるもの、[その]動機のない、主の（bhāgavatī）バクティは、成就（独存状態、解脱）よりも非常に重要である。

<sup>32</sup> MPh 7.1f.: sa dvedhā nirākārah śākārah ca. anavacchinnacaitanyam nirākārah. sattvāvacchinnam caitanyam śākārah (彼（ヴィシュヌ神）は無形相な「ヴィシュヌ神」と有形相な「ヴィシュヌ神」との二様である。限定されていない精神性が無形相な「ヴィシュヌ神」である。純質に限定された精神性が有形相な「ヴィシュヌ神」である）。また、本来限定されない精神性であるヴィシュヌ神が、純質に限定されて有形相になる理由に関して、MPh 2.9と当該箇所に対するKDに次のような記述がある。MPh 28,21-24: sattvam viśuddham śrayate bhavān sthitau śārīrīnām śreyaupāyanam vapuḥ / vedakriyāyogatapaḥsamādhībhis tavārhaṇam yena janah samīhate // 2.9 (= BhP 10.2.34) // (貴方は、[世界の]存続のために、身体を持つもの達（生類達）にとって幸福の手段であり、純粋な純質である身体に依存する。生類が、それ（身体）を通じて、ヴェーダ・行為のヨーガ・苦行・三昧によって、貴方を崇拝することを望むような）。このMPh 2.9=BhP 10.2.34の“tavārhaṇam yena janah samīhate”の箇所に対してKDは以下のように註釈を付している。KD 29,1-3: yena sattvavapuṣāsritena janas tavārhaṇam pūjām samīhate samyak karoti. śuddhasyāviśayatvāt sattvopahitam bhajati bhāvah (それによって、すなわち依存された純質である身体によって、生類は、貴方を崇拝すること、すなわち供養することを望む、すなわち喜んで行う (samyak karoti)。純粋なものは対象とならないので、純質に制約されたものに仕える、ということである)。このKDから、無形相なヴィシュヌ神は生類の崇拝の対象となり得ないので、生類が崇拝できるように、無形相なヴィシュヌ神は純質に制約された有形相なヴィシュヌ神となることが理解できよう。

<sup>33</sup> MPh 83,18: sā dvedhā, vihitāvihitā ca (それ（バクティ）は二種である。規定されたものと規定されていないものとである)。このMPhに対するKDの記述は以下のようである。KD 84,1-2: evam (D<sub>1</sub>, G, P, T] om. D<sub>2</sub>; eva E.) sāmānyabhaktim (D<sub>1</sub>, G, P, T] om. D<sub>2</sub>; sāmānyabhakti E.) lakṣayitvedānīm upāyabhedāt tadviśeṣān āha – seti. sā sāmānyarūpā (以上のように一般的なバクティを定義づけてから、続いて手段の違いに基づいて、諸のそれ（バクティ）の分類を述べる。それは、と。それとは一般性をあり方とする [バクティ]である)。

<sup>34</sup> MPhにおいてもKDにおいても、BhP 3.25.32-33は規定されたバクティの一般的定義とは述べられていない。しかし、本稿第2節で示した混ざったバクティ13種と純粋なバクティ1種はこの規定されたバクティの下位分類である。混ざったバクティ13種と純粋なバクティ1種を個別のバクティ（bhaktivīśeṣa）として捉えた場合、規定されたバクティがどういったものであるかを示すBhP 3.25.32-33はその一般的定義と捉えることができると考える。

<sup>35</sup> devānām D<sub>1</sub>, G, P] devānā E.

<sup>36</sup> °karmanām D<sub>1</sub>, G, P] °karmanā E.

<sup>37</sup> kośam D<sub>1</sub>, G, P] kośa E.

この BhP 3.25.32-33 がどうして「規定された」バクティの一般的定義になるのか、BhP の記述だけを見ても理解は困難であろう。そこで、この BhP 3.25.32-33 に対する KD の検討に移りたい。

KD 84,2-4: **vihitā**<sup>(38)</sup> vedoktā.

**devānām**<sup>(39)</sup> iti. **devānām** cakṣurādiṣv<sup>(40)</sup>  
adhiṣṭhātṛṇām<sup>(41)</sup> sūryādīnām.<sup>(42)</sup> **guṇā** eva **līṅgāni**<sup>(43)</sup>  
grāhyatvāt<sup>(44)</sup> jñāpakāni<sup>(45)</sup> yeṣām<sup>(46)</sup> te tathā.<sup>(47)</sup>  
tadyathā rūpapratipattiḥ karaṇapūrvikā<sup>(48)</sup>  
kriyātvāc chidikriyāvat.<sup>(49)</sup>

規定されたものとは、ヴェーダに説かれたものである。

神々の [以下を註釈する]。神々とは、視覚器官等の支配者であるスーリヤ等の、ということである。[諸属性は] 把握されるものである。[諸属性のみを] 諸の知らしめるもの (jñāpakāni) とする者達があるように [言われる]。例えば、色形の認識は [知覚] 手段 (karaṇa, 知覚器官) に基づくものである。行為作用であるから、切断という行為作用 [は斧という道具 (karaṇa) に基づく] ように。

ヘーマードリは、冒頭でバクティが「規定されている」(vihitā) ということは、バクティが「ヴェーダに説かれている」ことであると明示する。従って彼は、何によってバクティが「規定されている」のかというと、ヴェーダによってである、と考えているのである。

続いてヘーマードリは BhP 3.25.32-33 の註釈に着手するが、まず「諸属性を諸徴表とし、天啓聖典に基づくものを行為とする神々の」(devānām

guṇalīṅgānām ānuśravikakarmaṇām) という BhP 3.25.32ab に関して、神々が諸属性を諸徴表とするとはどういうことを説明する。

ヘーマードリは、BhP 3.25.32 における神々を、視覚器官等の支配者であるスーリヤ神等のことであると解釈する。視覚器官等の諸器官 (indriya) を神々が司るということは広くヴェーダーンタ学派にも見られる考え方である<sup>(50)</sup>。ヘーマードリによれば、その神々が諸属性のみを諸徴表とするということは、諸属性のみをそれら神々の存在を知らしめるものとする、つまり神々は諸属性を通じてのみ知られるということである。では、この「神々は諸属性を通じてのみ知られる」ということは具体的にどういうことであるのか、KD に続いて示された色形の認識 (rūpapratipatti) の例によって考察してみたい。

この色形の認識の例は、推論 (anumāna) によって提示されている。その推論式は以下のようである。

#### 推論式

主張：色形の認識は [知覚] 手段に基づく  
(rūpapratipattiḥ karaṇapūrvikā)

理由：[色形の認識は] 行為作用だから  
(kriyātvāt)

実例：切断という行為作用 [は斧という道具に基づく] ように (chidikriyāvat)

ここでは、切断という行為作用が斧という道具 (karaṇa) に基づいて行われる、すなわち斧という道具が必要のように、色形の認識も行為作用なので、知覚手段 (karaṇa) に基づくこと、すなわち知覚器官が必要であることが推理されている。そしてこの推論は、認識の結果 (色形の認識) からその認

(38) vihitā D<sub>1</sub>, D<sub>2</sub>, G, P, T] vihitā E.

(39) devānām D<sub>1</sub>, D<sub>2</sub>, E, G, T] devān P.

(40) cakṣurādiṣv D<sub>1</sub>, E, T] cakṣurādiṣv D<sub>2</sub>; cakṣurādy- G, P.

(41) adhiṣṭhātṛṇām D<sub>1</sub>, D<sub>2</sub>, G, P, T] adhiṣṭhātṛṇa E.

(42) sūryādīnām D<sub>1</sub>, D<sub>2</sub>, G, P, T] sūryādīnā E.

(43) līṅgāni D<sub>1</sub>, G, T] līgāni D<sub>2</sub>, E; līṅgāni jñāpakāni P.

(44) grāhyatvāt D<sub>1</sub>, D<sub>2</sub>, E, G, T] om. P.

(45) jñāpakāni D<sub>1</sub>, D<sub>2</sub>, E, T] om. G, P.

(46) yeṣām D<sub>1</sub>, D<sub>2</sub>, P, T] yeṣā E; om. G.

(47) te tathā D<sub>1</sub>, D<sub>2</sub>, E, T] te tathā grāhyatvāt P; om. G.

(48) karaṇapūrvikā D<sub>1</sub>, D<sub>2</sub>, E, T] karaṇapūrvikā G, P.

(49) chidikriyāvat D<sub>1</sub><sup>pc</sup>, D<sub>2</sub>, G, P, T] om. D<sub>1</sub><sup>ac</sup>, E.

(50) 金倉 [1976: 210-212], 中村 [1989: 515-517], [1990: 203-206], [1996: 255, 321] 参照。

識の原因（知覚器官の存在）を導き出す結果因（kāryahetu）によるものである。ではこの推論による実例は、当該の神々の議論とどのように対応しているのであろうか。

BhP 3.25.32における「属性」は、シュリーダラの BhP に対する註釈 *Bhāvārthadīpikā* (BhAD) によれば知覚器官の対象のことであり<sup>51)</sup>、KD においても、スーリヤ神等の神々が視覚器官等の支配者として論じられているため、文脈上同様であると考えられる。すると、神々が諸の属性のみを諸徴表とすること、すなわち、神々が諸属性を通じてのみ知られるということは、神々が諸対象を通じてのみ知られるということになる。そして、このことと色形の認識の例とを対応させると、色形の認識は諸対象〔の認識〕に対応することとなる。また、その色形の認識が基づくところの知覚手段は、視覚器官等という知覚手段の支配者である神々に対応することとなる。ここで、色形の認識の例は、色形の認識という結果から、その認識の原因である知覚手段の存在を導き出す推論を構成していた。そのため、神々が諸属性を通じてのみ知られるということも、諸属性、すなわち諸対象の認識という結果から、その認識の原因である知覚手段、すなわち視覚器官等という知覚手段の支配者である神々の存在が知られる、ということの意味していると考えられる。ところで、ヘーマードリは神々のことを視覚器官等の支配者であるスーリヤ神等のことであると解釈していたが、ここまでの議論の流れを考慮すると、それらは視覚器官等という知覚器官そのもの、あるいは知覚器官の見る等の能力のことを指していると考えられよ

う<sup>52)</sup>。

そして、諸属性が諸徴表、すなわち知らしめるものであることに関して、ヘーマードリは以下のような議論を展開する。

KD 84,5f.: *guṇā eva liṅgāni na tu guṇavantaḥ*,<sup>53)</sup>  
*teṣāṃ*<sup>54)</sup> *nāśe duḥkhāpatteḥ. guṇasya na*<sup>55)</sup> *nāśaḥ,*  
*tato 'nyatra*<sup>56)</sup> *bhāvāt. evaṃ*<sup>57)</sup> *ca tadviśeṣatyāgād*<sup>58)</sup>  
*mahāsāmānye sattva eva vṛttiḥ.*

諸徴表とは諸属性に他ならず、一方、諸の属性を持つもの（*guṇavat*）なのではない。〔諸徴表が諸の属性を持つものであるとすると〕それら（諸徴表としての諸の属性を持つもの）が消滅した場合〔視覚器官等が諸徴表すなわち対象を享受できなくなり〕苦がもたらされてしまうから。〔諸属性である〕諸徴表には消滅はない。それ（属性を持つ或るもの）とは別のところ（別の属性を持つもの）に存在するから。そしてその場合<sup>59)</sup>、〔神々は〕特定（*viśeṣa*）のそれら（諸属性）を捨てているので、〔神々に〕最大の一般性（*sāmānya*）である有性（*sattva*）のみに対して活動がある。

ここでは、諸徴表であるものが属性であるのか、属性を持つもの（*guṇavat*）であるのか、ということが問題とされている。ヘーマードリは、諸徴表とは属性であって、属性を持つものではないと述べる。その理由は、諸徴表が属性を持つもの、すなわち何らかの事物であるとする、その事物が消滅した場合には諸徴表も消滅することになるので、神々と呼

51) BhAD 292,16: *guṇā viśayā liṅgyante jñāyante yais teṣāṃ devānām* ... (その者達によって、諸属性、即ち諸対象（*viśayāḥ*）が描き出される（*liṅgyante*）、即ち知られる（*jñāyante*）、そういう神々の……）。

52) 「神々」が諸器官あるいは視覚器官等の知覚器官の支配者を意味している点に関しては、シュリーダラの BhP 3.25.32 に対する解釈も同様である。BhAD 292,16f.: *guṇā viśayā liṅgyante jñāyante yais teṣāṃ devānām dyotanātmakānām indriyānām tadadhiṣṭāṭīnām vā sattve sattvabhūtau harāv eva yā vṛttiḥ sā bhaktiḥ* (その者達によって、諸属性、即ち諸対象が描き出される、即ち知られる、そういう神々の、即ち輝くこと（*dyotana*、認識）を本性とする諸器官の、あるいはそれら（諸器官）の支配者達の、純質に対する、即ち純質であるハリ〔神〕のみに対する活動がバクティである）。しかし、ヘーマードリが、諸属性が神々の存在を知らしめるものと解釈しているのに対して、シュリーダラは、神々が諸属性を認識するものであると解釈している。このように、ヘーマードリとシュリーダラで複合語解釈は異なっている。

53) *guṇavantaḥ* D<sub>1</sub>, G, P, T] *guṇavantaḥ. tedyathā. rūpapratiṣṭāṭīḥ karaṇapūrvikā kriyātvāt chidikriyāvat. guṇā eva liṅgāni na tu guṇavantaḥ* D<sub>2</sub>; *guṇavataḥ* E.

54) *teṣāṃ* D<sub>1</sub>, G, P] *teṣo* D<sub>2</sub>; *teṣā* E; *eteṣāṃ* T.

55) *na* D<sub>1</sub>, E, G, P, T] *nā* D<sub>2</sub>.

56) *tato 'nyatra* D<sub>1</sub>, E, G, P, T] *tatānyatra* D<sub>2</sub>.

57) *evaṃ* D<sub>1</sub>, G, P, T] *evam* D<sub>2</sub>; *eva* E.

58) *tadviśeṣatyāgād* D<sub>1</sub>, E] *tadvidviśeṣatyāgād* D<sub>2</sub>; *tattadviśeṣatyāgād* G, P, T.

59) 文脈上、"evaṃ" を "evaṃ sati" の意味で訳した。

ばれる視覚器官等がその対象である諸徴表を享受できなくなり、苦がもたらされてしまうからである。

一方、諸徴表が諸の属性である場合、属性を持つものである事物が消滅したとしても、諸の属性はその消滅した事物とは異なる事物に存在するので、諸属性である諸徴表は消滅することはない。そして、神々と呼ばれる視覚器官等が、消滅し得る事物ではなく消滅しない諸属性を諸徴表としてしていると、神々と呼ばれる視覚器官等は、特定の属性、すなわち特殊性としての諸属性を捨て、最上位の一般性である有性のみに対して活動することとなる<sup>(60)</sup>。BhP 3.25.32-33 全体の趣旨としては、その活動がバクティであるというのである。視覚器官等が特定の属性を捨てて有性のみを対象とするのは、最上位の一般性である有性は、如何なる事物にも必ず存在し、捨て去られることがないからであると考えられる<sup>(61)</sup>。

#### 4.2. 神々が天啓聖典に基づくものを諸行為とするとはどういう意味か

続いてヘーマードリは、BhP 3.25.32ab に関して、神々が天啓聖典に基づくものを諸行為とする、ということを以下のように説明する。

KD 84,7-13: ānuśravikāṇi vedoktāny eva<sup>(62)</sup>  
karmāṇi<sup>(63)</sup> yeṣāṃ<sup>(64)</sup> devānām<sup>(65)</sup> tadyathā

cakṣurādibhir vihitā eva rūpādayo grāhyāḥ<sup>(66)</sup> na  
tu<sup>(67)</sup> sarve. ānuśravikāṇy eva<sup>(68)</sup> karmāṇi<sup>(69)</sup> na tu  
dṛṣṭāni. teṣāṃ phalābhāve<sup>(70)</sup> duḥkhāpatteḥ.  
itareṣāṃ<sup>(71)</sup> na phalārthatvam<sup>(72)</sup> tannivṛttyarthatvāt.  
yathoktam<sup>(73)</sup> –

parokṣavādo vedo<sup>(74)</sup> 'yam<sup>(75)</sup> bālānām anuśāsanam<sup>(76)</sup> /  
karmamokṣāya karmāṇi vidhatte<sup>(77)</sup> hy agadam<sup>(78)</sup>  
yathā // BhP 11.3.44 //

iti.

神々にとって、天啓聖典に基づくもの、即ちヴェーダに説かれたものだけが諸の行為である。例えば、視覚器官等によって伝えられた色形等だけが把握されるものであり、一方、全ての「色形が把握されるものなのではない」ように、諸の行為とは諸の天啓聖典に基づくものであり、諸の経験される「行為」ではない。それら（諸の経験される行為）は果報がなくなってしまうと、苦がもたらされてしまうから。他の諸のもの（天啓聖典に基づく諸の行為）は果報を目的とするものではない。それ（果報）の止滅を目的としているから。以下のように述べられている。

このヴェーダは、経験されないことを語るものであり、業からの解放のために諸の祭祀行為を規定している。子供達に対する教訓 [のように]。[子供達に対する教訓とは、] 実に、

(60) シュリーダラの BhAD における解釈によれば、この BhP 3.25.32 における "sattva" は「有性」ではなく「純質」であり、その点ヘーマードリの KD における解釈とは異なる。BhAD に関しては fn. 52 参照。

(61) 視覚器官等は、属性を持つものを対象とすることはなく属性を対象とするものではあるが、その属性は属性を持つものである事物に存在していることが、以上の議論の前提とされていると考えられる。以上のことを前提としないと、視覚器官等が特定の属性を捨てて有性のみを対象とするという根拠が理解できないと考える。

(62) vedoktāny eva D<sub>1</sub>, D<sub>2</sub>, E, G, P] om. T.

(63) karmāṇi D<sub>1</sub>, D<sub>2</sub>, E, G, P] om. T.

(64) yeṣāṃ D<sub>1</sub>, D<sub>2</sub>, G, P] yeṣā E; om. T.

(65) devānām D<sub>1</sub>, D<sub>2</sub>, G, P] devānā E; om. T.

(66) tadyathā cakṣurādibhir vihitā eva rūpādayo grāhyāḥ D<sub>1</sub>, D<sub>2</sub>, E, G, P] om. T.

(67) na tu D<sub>1</sub>, D<sub>2</sub>, E<sup>pc</sup>, G, P] na {nu}tu E<sup>ac</sup>; om. T.

(68) sarve. ānuśravikāṇy eva D<sub>1</sub>, D<sub>2</sub>, E, G, P] om. T.

(69) karmāṇi D<sub>1</sub>, E, G, P] karmmaṇi D<sub>2</sub>; om. T.

(70) na tu dṛṣṭāni. teṣāṃ phalābhāve D<sub>1</sub>, D<sub>2</sub>, E, G, P] vobhāve T.

(71) itareṣāṃ D<sub>1</sub>, G, P, T] etareṣāṃ D<sub>2</sub>; itaraṣāṃ E.

(72) phalārthatvam D<sub>1</sub>, D<sub>2</sub>, G, P, T] phalārthatva E.

(73) yathoktam D<sub>1</sub>, D<sub>2</sub>, G, P, T] yathokta E.

(74) vedo D<sub>1</sub>, E, G, P, T] vedo vedo D<sub>2</sub>.

(75) 'yam D<sub>1</sub>, D<sub>2</sub>, G, P] 'ya E; yat T.

(76) bālānām anuśāsanam D<sub>1</sub>, D<sub>2</sub>, G, P] bālānām anuśāsanam E; bolānuśāsanam T.

(77) vidhatte D<sub>1</sub>, D<sub>2</sub>, E, G, P, T<sup>pc</sup>] {na tu dṛṣṭāni} vidhatte T<sup>ac</sup>.

(78) agadam D<sub>1</sub>, D<sub>2</sub>, G, P, T] agada E.



例えば「父親が子供にお菓子と一緒に」菓を  
「与える」よう「なものである」<sup>(79)</sup>。

と。

視覚器官等によって伝えられた、すなわち認識された色形等だけが把握されるもの、すなわち認識対象であって、全ての色形が認識対象であるのではないように、神々にとっては、天啓聖典に基づいたもの、すなわちヴェーダに説かれたものだけが諸の行為であり、諸の経験されるものが諸の行為と言われているのではない。先に確認したように、KDにおいて神々は視覚器官等の支配者と解釈されていた。諸の属性の議論においては、神々は諸知覚器官あるいはそれらの見ること等の能力を指すと考えられるのに対して、ここでは神々は諸行為器官あるいはそれらの行為遂行能力を意味していると考えられる。

そして、それら神々と呼ばれる諸行為器官としての諸行為が経験される行為ではないのは、それら日常的に経験される行為の果報は永続しない無常なものであるのもので、苦がもたらされてしまうからである。一方、神々と呼ばれる諸行為器官としての行為である天啓聖典に基づく行為は、果報を目的とす

るものではなく、果報の止滅を目的としているものであるとヘーマードリは述べる。その根拠は、BhP 11.3.44において、ヴェーダは経験されないことを語るものであり、また業からの解放のために諸行為を規定していると述べられているからである。そして、ヴェーダに規定される諸行為とは、諸の祭祀行為に他ならない<sup>(80)</sup>。従って、天啓聖典に基づくヴェーダに説かれた諸行為とは、行為の果報（業）を止滅させる諸の祭祀行為であることが理解される<sup>(81)</sup>。

ところで、諸属性に関する議論においては、神々とは諸知覚器官あるいはそれらの能力であり、ここでの議論では諸行為器官あるいはそれらの行為遂行能力と考えられるため、それら両方を考え合わせると、神々とは諸器官（indriya）あるいはそれらの能力のこととなる。

#### 4.3. 「専一な思考器官を持つもの」に関する解釈

続いてヘーマードリは、BhP 3.25.32cにおける「専一な思考器官を持つものの」（ekamanasaḥ）ということに関して議論を進める。

KD 84,13-16: *sattva*<sup>(82)</sup> *eva na rūpādāv ekamanasaḥ*<sup>(83)</sup>

(79) BhP 11.3.44 の訳に関しては、Tagare [1955c] と以下の BhAD を参照した。BhAD 1283,15-19 (on BhP 11.3.44): *durjñeyam vedatātparyam āha – parokṣavāda iti. yatrānyathāsthitho 'rthaḥ saṃgopayitum anyathā kṛtvocyate sa parokṣavādaḥ. tathā ca śrutiḥ "taṃ vā etaṃ caturhūtaṃ santam. caturhotety ācakṣate parokṣeṇa. parokṣapriyā iva hi devāḥ" (Taittirīyabrāhmaṇa 2.3.11.4) iti. parokṣavādatvam evāha. karmamokṣāyeti. nanu svargādyaṛtham karmāṇi vidhatte na karmamokṣārtham. tatrāha. bālānām anuśāsanam yathā bhavati tathā. atra dṛṣṭāntaḥ. agadam auśadham. yahtā pitā bālam agadam pāyayan khaṇḍalaḍḍukāḍibhiḥ pralobhayan pāyayati dadāti ca tāni. naitāvatāgadapānasya tallābhaḥ prayojanam, api tv ārogyam. tathā vedo 'py avāntaraphalaiḥ pralobhayan karmamokṣāyaiva karmāṇi vidhatte* (理解しがたいヴェーダの趣意を述べる。間接的に語るものと。或るものに関して、或る状態にある対象が、うまく隠蔽されるために別の状態に為されてから述べられる場合、それが間接的に語るものである。そしてそのように天啓聖典が「述べている」。「そういうこの者を、四度呼ばれた者であるので、チャトルホートリと「人々は」間接的に呼んでいる。神々は間接的なことを好むかのようであるから」と。同じ間接的に語るものであることを述べる。業からの解放のために、と。【反論】天界等のために、諸の祭祀行為を規定しているのであって、業からの解放のためではない。【答】その点に答える。子供達の教訓があるように、そのようにである。この点に対する実例は「以下のようである」。菓とは医薬である。父が息子に菓を飲ませようとして、一片のお菓子等によってそそのかしつつ、[菓を] 飲ませ、それら（お菓子等）を与える。この限りで、菓を飲むことにとって、目的はその（お菓子等の）摂取ではなく、むしろ健康状態である。同様に、ヴェーダも、従属的な諸の果報によってそそのかしつつ、業からの解放のためだけに、諸の祭祀行為を規定している。しかし、諸の祭祀行為は諸の経験されるものではない（na dṛṣṭāni），という文脈から、KDにおいては「parokṣavāda」を「adṛṣṭavāda」という意味で理解して「経験されないことを語るもの」と訳し、BhAD のように「間接的に語るもの」と解釈しなかった。

(80) 針貝 [1990: 2-5] 参照。

(81) BhAD においては、諸器官が祭祀行為のみを行為とすることは、諸器官の純質に対する活動、すなわちバクティが動機のない、自性上のものであることの原因とされているようである。BhAD 292,17f: *teṣām evaṃvidhavr̥ttau hetum āha. guror uccāraṇam anuśrūyata ity anuśravo vedas tadvihitam ānuśravikaṃ tad eva karma yeṣām*（それら（神々、すなわち諸器官）の以上のような活動に対する原因を述べる。師の発話が繰り返し聞かれるので、ヴェーダは繰り返し聞かれたもの（天啓聖典）であり、天啓聖典に基づくものはそれ（ヴェーダ、天啓聖典）によって規定されたものであり、それらにとって（yeṣām），諸行為がそれ（天啓聖典に基づくもの）だけである、ということである）。

(82) *sattva* D<sub>1</sub>, D<sub>2</sub>, E, G, P] sa T.

(83) *ekamanasaḥ* D<sub>1</sub>, E, G, P, T] *ekamanasya* D<sub>2</sub>.

puruṣasya devānām,<sup>(84)</sup> ekatraiva mano yasya nobhayatra. ayam arthaḥ. yady api devānām<sup>(85)</sup> sattve sattvavyāṅgye<sup>(86)</sup> ca viṣṇau vṛttis tathāpi manaso viṣṇāv eva. sā ca svābhāvīkī svabhāvena jātā nonmādādinā vikāreṇa.

専一した思考器官を持つ人の神々（諸器官）に、有性のみに対して「活動があり」、色形等に対して「活動があるの」ではない、ということである。「専一した思考器官を持つものの、とは」一つのもののみに対する思考器官を持つものの、であり、二つのものに対する「思考器官を持つもの」ということではない。以下のような意味である。もしも、神々〔と呼ばれる諸器官〕に、有性に対して、また有性によって暗示される（sattvavyāṅgya）ヴィシュヌ〔神〕に対して活動があるとしても、そのようであっても、思考器官には、ヴィシュヌ〔神〕に対してのみ「活動が」ある。そしてそれは自性上のものである、即ち自性上生じたものであり、熱狂等という「思考器官の」変容によって「生じたものではない」。

専一な思考器官を持つ人の神々、すなわち諸器官には、色形等に対してではなく、最上位の一般性である有性に対する活動があり、BhP 3.25.32-33 全体の趣旨として、その活動がバクティである、ということである。「専一な思考器官を持つ人の神々に」（ekamanasaḥ puruṣasya devānām）という表現から、専一な思考器官を持つ人々の持つ神々とは、やはりその人の諸器官あるいは諸器官の能力のことであることが理解されよう。

そして、その「専一な思考器官を持つ人」とは、一つのもののみに対する思考器官を持つ人のことである。そのような人にとっては、たとえ諸器官に、有性と、有性という語によって暗示されるヴィシュヌ神という二つのものに対する活動があるとして

も、思考器官にはヴィシュヌ神に対してのみ活動があるのである<sup>(87)</sup>。

また、その専一な思考器官を持つものの諸器官の活動、すなわちバクティは、自性上生じたものであって、彼の思考器官が変容したものである熱狂等によって生じたものではない。先にバクティ一般の定義を確認した際、熱狂等によって思考器官をクリシュナ神に集中させることはバクティではない、と述べられていた。ここでの KD における記述によって、熱狂等によって思考器官をクリシュナ神に集中させることがバクティではないのは、それが専一な思考器官を持つものに自然と生じた活動ではなく、自然のままではない、思考器官の変容によって生じた活動であるからである、ということが理解される<sup>(88)</sup>。

#### 4.4. 「有性によって暗示されるヴィシュヌ」とは どういう意味か

ところで、「有性と、有性によって暗示されるヴィシュヌ神」ということに関して、有性という語によってヴィシュヌ神が暗示されるとはどういうことであろうか。この点に関して、以下の KD の記述が参考になる。MPh の第一章冒頭において、ヴィシュヌ神の一般的定義として BhP 2.9.32 が提示される<sup>(89)</sup>が、KD はその BhP 2.9.32 に対する註釈において、ヴィシュヌ神の一般的定義を以下のように述べる。

KD 6,16-22: yathā kaṭakādiṣv avasthātraye 'pi suvarṇatvam eva satyaṁ tathā jagadādimadhyānteṣv anusyūtaṁ sattāmātraṁ bhagavatsvarūpam iti lakṣaṇārtha ity uktam ... nāpi sākāreṣu caturṣv avyāptiḥ. teṣāṁ ākāratirohitatvāt.

以上のことによって、[黄金の] 腕輪等が三つの状態にあるとしても、黄金性こそが真理であるように、主の本質（bhagavatsvarūpa）とは、世界の始まり・中間・終わりに織り込まれた単

(84) devānām D<sub>1</sub>, D<sub>2</sub>, E, G, P] devānā T.

(85) devānām D<sub>1</sub>, G, P, T] denām D<sub>2</sub>; devānā E.

(86) sattvavyāṅgye D<sub>1</sub>, E, G, P, T] sātavyāṅgye D<sub>2</sub>; sattvavyagyē E.

(87) シュリーダラは、「ekamanasaḥ」という語を「一つのあり方をする思考器官を持つ者」と解釈している。BhAD 292,18: ata evaikam ekarūpam avikṛtaṁ mano yasya puṁsaḥ śuddhasattvasyety arthaḥ（同じ理由で、一つの、即ち一つのあり方を持ち、変容していない思考器官が、その者に（yasya）、すなわち純粋な純質（心）を持つ者にある、という意味である）。

(88) シュリーダラに依れば、この「自性上のもの」（svābhāvīkī）とは、「努力によらず成立するもの」（āyatnasiddhā）のことであり、KD とは少しニュアンスの違いがあるように思われる。BhAD 292,17: svābhāvīky āyatnasiddhā（自性上のもの、即ち努力によらず成立するものである）。

なる有性 (sattāmātra) である、というのが定義の意味である、と述べられた。……また、四つの有形相なもの (有形相なヴィシュヌ神)<sup>90)</sup> に対して過小遍充 (avyāpti) にもならない。彼等に関して、形相は隠没するから。

黄金製の腕輪等が、造られる・維持されている・破壊される、という三つの状態をとっていたとしても<sup>91)</sup>、いずれの状態においても黄金であることこそが真理であるように、主 (bhagavat) の本質は、世界の始まり・中間・終わりに織り込まれた単なる有性 (sattāmātra) である、ということがヴィシュヌ神の一般的定義である、というのである。また、このヴィシュヌ神の定義は、四種の有形相なヴィシュヌ神に対しても適用される。何故なら、有形相なヴィシュヌ神の形相 (ākāra) は隠没 (tirohita) するものであり、常住なものではないからである。

以上のヴィシュヌ神の一般的定義である「単なる有性」(sattāmātra) といううちの「有性」は、"sattā" と "sattva" と原語は違うけれども、同じく動詞√as の現在分詞から作られる抽象名詞であり、意味も同じである。そのため、「有性」(sattā = sattva) はヴィシュヌ神の一般的定義であり、BhP

3.25.32 において、ヘーマードリはその「有性」という語によってヴィシュヌ神が暗示されている、と解釈したのだと考えられる。

しかし、ここで以下の疑問が生じてくる。「有性」(sattā = sattva) がヴィシュヌ神の一般的定義だとすると、有性という語がそのままヴィシュヌ神のことを表示するのではないのだろうか。しかし、神々と呼ばれる諸器官は、有性と、有性という語によって暗示されるヴィシュヌ神という二つのものに対する活動を持つと KD において述べられている。そうだとすると、有性が直接表示するヴィシュヌ神と、有性という語によって暗示されるヴィシュヌ神とは区別されていることになる。では、この二種のヴィシュヌ神はどのように区別されているのであろうか。

以上の二種のヴィシュヌ神は、MPh において区別されている、無形相なヴィシュヌ神と有形相なヴィシュヌ神に対応している、と考えられる。それは、専一な思考器官を持つ人の思考器官が、有性ではなく、有性という語によって暗示されるヴィシュヌ神のみに対する活動を持つとされていることから推理される。すなわち、先に「バクティ」一般の定義を検討した際、バクティの対象、すなわち思考器官が集中する対象は純質 (sattva) を制約条件とす

<sup>89)</sup> MPh 6,3f.: aham evāsam evāgre nānyad yat sad asat param / paścād aham yad etac ca yo 'vaśiṣyeta so 'smy aham // 1.6 (= BhP 2.9.32) // (太初において、私のみが単に存在していた。有、非有、高位のものは「私と」異なるものではない。[マーヤーとの分離] 後でも、私 [のみが存在している]。この「現象世界は私であり、迷乱が消失した際に」残されるものも私である)。この MPh 1.6 (= BhP 2.9.32) に対する KD の語義解釈は以下のようなものである。KD 6,9-16: **aham** ityādi. **aham** eveti kartrantarasya vyāvṛttiḥ. **āsam** eveti kriyāntarasya. **agre** māyāsaṃbandhāt prāk. māyāsaṃbandhe 'pi **yat sat** kāryam, **asat** kāraṇam, **yac ca param** tābhyāṃ param pradhānam, tan **na madanyat**. māyāsaṃbandhād asty eva tridhā vibhakta ity arthaḥ. **paścān** māyāvīyogād anantaram apy **aham** eva. prapañcasyādimadhyāvasāneṣv aham ity arthaḥ. **yac caitat** prapañcarūpaṃ tad apy **aham**. anyatra siddham mayi aropitam. yathānyatra siddhaḥ sarpo rajjau. evaṃ vivecanād bhrame nivṛtte **yo 'vaśiṣyeta so 'ham asmi**. idantayā svarūpasya nirdeṣṭum aśakyatvād evaṃ ucyate. (私は「以下を註釈する」。私のみが、とは他の行為主体を排除している。単に存在していた、とは他の行為作用を「排除している」。太初においてとは、マーヤー (幻力) と結合する前にということである。マーヤー (幻力) と結合した時にも、有、すなわち結果であり、非有、すなわち原因であるもの、また高位のもの、すなわちそれら (結果と原因) よりも高位の根本物質であるもの、それは私と異なるものではない、幻力と結合しているので「それ (tat) は、有・非有・高位のもの」と必ず三様に分かれている、という意味である。後で、すなわちマーヤー (幻力) と分離した後でも、私のみが「存在する」。現象世界の始まり・中間・終わりににおいて私が「存在する」という意味である。また、これ、すなわち現象世界をあり方とするもの、それも私である。別のものにおいて成立したものは私に対して仮託されたものである。例えば、別のものにおいて成立した蛇が縄に対して「仮託されたものである」ように。同様に、識別 [知] によって迷乱が消失したとき残されるもの、それは私である。「これ」として (客体として) 本質を指示することはできないので、以上の様に述べられる)。

<sup>90)</sup> MPh 7,2f.: sa ca caturdhā. rajastamobhyāṃ yুক্তe sattve puruṣaḥ. rajasā brahmā. tamasā rudraḥ. śuddhe viṣṇur eva (そして彼 (有形相なヴィシュヌ神) は四様である。激質と暗質と結合した純質に「映った精神性が」ブルシャである。激質と「結合した純質に映った精神性が」ブラフマン [神] である。暗質と「結合した純質に映った精神性が」ルドラ [神] である。清浄な場合 (精神性が純質のみに限定されている場合) ヴィシュヌ [神] に他ならない)。

<sup>91)</sup> "katakādiṣv avasthātraye 'pi" ということがどのようなことを表しているのかと関する、他の文献における類似の例を見つけられなかった。ヴェーダーンタ文献においては、「三つの状態」(avasthātraya) は生類の覚醒状態 (jāgarita) ・夢眠状態 (svapna) ・熟睡状態 (susupti) の三つを指すか、世界の創出 (sr̥ṣṭi) ・維持 (sthiti) ・破壊 (pralaya) の三つを指すことが多いように思われる。ここでは、「世界の始まり・中間・終わり」(\*jagadādimadhyānta) という語が見られ、世界の創出・維持・破壊のことを指している。腕輪等の例も、この創出・維持・破壊に対応していると解釈した。



るブラフマンであることを確認した。そして、この純質を制約条件とするブラフマンは有形相のヴィシュヌ神のことであった。ということは、規定された「バクティ」における、専一な思考器官を持つものの思考器官の活動の対象である「有性という語によって暗示されるヴィシュヌ神」も、有形相のヴィシュヌ神であると考えるのが妥当であろう<sup>92)</sup>。そして一方、有性という語がヴィシュヌ神を直接表示するとすれば、そのヴィシュヌ神は、「有性」というヴィシュヌ神の一般的定義が一義的に指し示す<sup>93)</sup>、無形相のヴィシュヌ神のことである。そして、この「有性」(sattā = sattva, あるいは単なる有性 sattāmātra) とは、アドヴァイタ学派においては無形相のヴィシュヌ神に対応する無属性ブラフマン (nirguṇabrahman) のことを指す<sup>94)</sup>ものである。

#### 4.5. BhP 3.25.33 に対する註釈

以上の BhP 3.25.32 に対する KD と BhP 3.25.33 との文脈によれば、簡潔に述べると、専一な思考器官を持つ人における、諸器官の有性に対する自性上の活動がバクティであることになる。しかしこれ以外にも、規定されたバクティの定義が BhP 3.25.33 において述べられている。続いて、BhP 3.25.33 に述べられている規定されたバクティの定義要素をヘーマードリがどのように解釈しているかを検討していきたい。

KD 84,19-85,1: **animittā**<sup>95)</sup> nimittena<sup>96)</sup> khyātīlābhapūjādīnā<sup>97)</sup> hīnā. **bhāgavatī** bhagavata<sup>98)</sup> iyaṃ<sup>99)</sup> bhajamānabhajyamānāyor<sup>100)</sup> bhagavattvāt.<sup>101)</sup> yathoktam<sup>102)</sup> –

sarvabhūteṣu yaḥ paśyet // BhP 11.2.45a // ityādīnā.<sup>103)</sup>

動機のないとは、名声・利益・供養等という動機を欠いた、ということである。主の (bhāgavatī) とは、主 (bhagavat) にこれ (動機のないバクティ) がある、ということである。信愛している者と信愛されている者の [両者] が主であるから。以下のように述べられた。

[アートマンが] 全ての生類における [主であると] 見るであろう者等によって。

先ずヘーマードリは、BhP 3.25.33 においてバクティを形容する「動機のない」(animittā) ということに関して、その「動機」とは名声・利益・供養等であり、それらの動機を欠いていることであると解釈する<sup>104)</sup>。また、同じくバクティを形容する「主の」(bhāgavatī) とは、主ヴィシュヌにバクティがある、つまりバクティとは主ヴィシュヌの持つものであると解釈する。

しかし、バクティはバクタ、すなわち専一な思考器官を持つ者にあるものであると考えられるのにも

<sup>92)</sup> KD において、BhP 3.25.32 における "sattva" は "mahāsāmānya" と言われているように、「有性」の意味であるが、しかし同時に「純質」を意味することも示唆的である。シュリーダラは、この "sattva" を「純質であるハリ神」と言い換えており、「純質」の意味で使用している。fn. 52 参照。

<sup>93)</sup> 前掲の MPh 1.6 (= BhP 2.9.32) に対する KD において、ヴィシュヌ神の一般的定義は四種の有形相のヴィシュヌ神にも過小遍充ではないと述べられていたことから、この一般的定義は一義的には無形相のヴィシュヌ神の定義であることが理解される。

<sup>94)</sup> シャンカラにとってのブラフマンと「有性」の関係に関しては中村 [1989: 232-236] 参照。マンドナミシュラ (Maṇḍana Miśra, ca. 7th-8th CE) にとってのブラフマンと「有性」の関係に関しては Thrasher [1993: 77-85], 藤井 [2015] を参照。また、「有性」は必ずしも無属性ブラフマンのみを指すとは限らないが、無属性・有属性ブラフマン双方が「有性」という語で表される場合、一義的に「有性」は無属性ブラフマンを表すと考えてよいであろう。

<sup>95)</sup> animittā D<sub>1</sub>, D<sub>2</sub>, E, T] animitteti G, P.

<sup>96)</sup> nimittena D<sub>1</sub>, E, G, P] nimittena D<sub>2</sub>; ninimittena T.

<sup>97)</sup> khyātīlābhapūjādīnā D<sub>2</sub>, G, P, T] khyātīlābhapūjādī D<sub>1</sub>, E.

<sup>98)</sup> hīnā. bhāgavatī bhagavata D<sub>1</sub>, E, G, P, T] om. D<sub>2</sub>.

<sup>99)</sup> iyaṃ D<sub>1</sub>, G, P, T] om. D<sub>2</sub>; iya E.

<sup>100)</sup> bhajamānabhajyamānāyor D<sub>1</sub><sup>pc</sup>, E, G, P] bhajamāna{ma}bhajyamānāyor D<sub>1</sub><sup>ac</sup>; om. D<sub>2</sub>; bhajamānamajyamānāyor T.

<sup>101)</sup> bhagavattvāt D<sub>1</sub>, E, G, P] om. D<sub>2</sub>; bhāgavatvāt T.

<sup>102)</sup> yathoktam D<sub>1</sub>, G, P, T] om. D<sub>2</sub>; yathokta E.

<sup>103)</sup> sarvabhūteṣu yaḥ paśyet // ityādīnā D<sub>1</sub>, E, G, P, T] om. D<sub>2</sub>.

<sup>104)</sup> シュリーダラはバクティが「動機のないもの」(animittā) であることに対して、「欲望を欠いたもの」(niṣkāma) と解釈している。BhAD 292,17: kathambhūta, **animittā** niṣkāma ([そのバクティとは] どのようなものか。動機のないもの、即ち欲望を欠いたものである)。



関わらず、主がバクティを持つとはどういうことであろうか。それは、信愛している者 (bhajamāna) すなわちバクティを行うバクタと、信愛されている者 (bhajyamāna) すなわちバクティの対象がともに主であるから、というのである。そしてこのことの根拠として BhP 11.2.45a が提示されている。この BhP 11.2.45 は、規定されたバクティの下位分類である「行為と知と混ざった」(karmajñānamisrā) バクティのうち、「最上のもの」(uttamā) の定義として挙げられるものであり<sup>(105)</sup>、ヘーマードリは、BhP 11.2.45 が行為と知と混ざったバクティのうちの最上のものである理由に関して、そのバクティが「[全ての生類と] 全ての生類のうちにいるもの (主ヴィシュヌ) との同一性を対象とする知と混ざっているから」<sup>(106)</sup>と述べる。このように、ヘーマードリは最高神ヴィシュヌと全ての生類とが同一存在であるという、アドヴァイタ (一元論) 思想を持っていることが理解できる。この一元論の立場からヘーマードリは、「主の」という語を、バクティはバクタ達の活動であるにも関わらず、主ヴィシュヌは彼等バクタ達と同一存在であるので、それは主ヴィシュヌの持つものでもある、と解釈しているのである<sup>(107)</sup>。

引き続き、KD の議論を検討していく。

KD 85,1f.: *siddher garīyasī* kaivalyād adhikā.

kaivalye<sup>(108)</sup> sukhatvam.<sup>(109)</sup> bhaktau tu sukhasyānubhavaḥ.<sup>(110)</sup>  
jarayati nāśayati. kośaṃ<sup>(111)</sup> māvāvaraṇam.<sup>(112)</sup> nigīrṇaṃ<sup>(113)</sup>  
bhuktam annam.<sup>(114)</sup>

成就 (siddhi) よりも非常に重要である、とは独存状態 (kaivalya) よりも卓越していることである。独存状態において楽であることがある。しかし、バクティにおいては楽の直接経験がある。消失させる、とは消滅させることである。覆いとはマヤー (幻力) という覆障である。飲み込まれたものとは、食べられた食物である。

ヘーマードリは、BhP 3.25.33 において「バクティが成就よりも非常に重要である」と述べられていることに関して、この「成就」(siddhi) を「独存状態」(kaivalya)、つまり解脱と捉え、バクティは解脱よりも非常に重要であることが述べられていると解釈している<sup>(115)</sup>。それは何故かという、独存状態、つまり解脱においては楽であること (sukhatva, 楽性) があるのに対して、バクティにおいては楽の直接経験があるからであると説明されている。

しかし、独存状態においては楽であることがある、とはどういうことであろうか。独存状態である解脱においても、バクティと同様に楽の直接経験があるのではないであろうか。詳しく説明されていないため、この点に関して詳細は不明であるが、おそ

<sup>(105)</sup> MPh 86,15-17: karmajñānamisrā tredhā (A, D<sub>1</sub>, G] tredhā E; tridhā P.), uttamā madhyamādhama ca sattvatāratamyāt. tatrottamā (A, D<sub>1</sub>, E, G] tatrottamā (uttamā) P.) – sarvabhūteṣu yaḥ paśyed bhagavadbhāvam ātmanaḥ / bhūtāni bhagavatya ātmany eṣa bhāgatottamaḥ // 6 (= BhP 11.2.45) // (行為と知と混ざった [バクティ] は三種である。純質の度合いに基づいて、最上のものと、中位のものと、低位のものとしてある。その (三つの) なかで最上のものは [以下のような]。アートマンが全ての生類における主であり、主であるアートマンのなかに [全ての] 生類がある、と見る者は最上のパーガヴァタである)。

<sup>(106)</sup> KD 87,5f.: uttamatvam (A, D<sub>1</sub>, D<sub>2</sub>, G, P, T] uttamatva E.) cāsyāḥ (A, D<sub>1</sub>, E, G, P] cāḥ D<sub>2</sub>; cāsyām T.) sarvabhūtaśhitaikātmaviśayeṇa (sarvabhūta- A, D<sub>1</sub>, E, G, P] sarvabhū- D<sub>2</sub>; sarvabhūteṣu T.: °sthitaikātmā- D<sub>1</sub>, D<sub>2</sub>, E, T] °sthitaikātmā- A G, P.) jñānena mīśratvāt (また、その [バクティ] は最上である。[全ての生類と] 全ての生類のうちにいるもの (主) との同一性を対象とする知と混ざっているから)。ここでの「同一性を対象とする知」とは、fn. 105 によれば、主 (最高神)、アートマン、全ての生類が同一であるとする一元性の知である。また、このような知と混ざったバクティが最上のものであるということから、「全ての生類のうちにいるもの」とは、アートマンと同一視され、バクティの対象とされる主ヴィシュヌのことと考えられる。

<sup>(107)</sup> BhAD では、"bhāgavati" に対して解釈が付されていない。

<sup>(108)</sup> kaivalye D<sub>1</sub>, E, G, P, T] kaikaivalye D<sub>2</sub>.

<sup>(109)</sup> sukhatvam D<sub>1</sub>, D<sub>2</sub>, G, P, T] sukhatva E.

<sup>(110)</sup> sukhasyānubhavaḥ D<sub>1</sub>, D<sub>2</sub>, E] sukhānubhavaḥ G, P; sukhasyānubhavaḥ T.

<sup>(111)</sup> kośaṃ D<sub>1</sub>, D<sub>2</sub>, G, P] kośa E, T.

<sup>(112)</sup> māvāvaraṇam D<sub>1</sub>, D<sub>2</sub>, G, P, T] māvāvaraṇa E.

<sup>(113)</sup> nigīrṇaṃ D<sub>1</sub>, D<sub>2</sub>, E, G, P] nikīrṇat T.

<sup>(114)</sup> annam D<sub>1</sub>, D<sub>2</sub>, G, P, T] anna E.

<sup>(115)</sup> シュリーダラも同様の解釈を採っている。BhAD 292,17: sā bhaktiḥ *siddher* mukter api *garīyasī* uttareṇānvayaḥ (バクティであり、達成、即ち解脱よりも非常に重要である、と後の [頌] と結びつく)。

らく次のようなことを述べていると考えられる。シャンカラ以来の伝統的なアドヴァイタ学派の一元論思想に依拠すると、解脱の境地においては個的存在であるアートマンは、歓喜 (ānanda) すなわち楽を本性とするブラフマンと全く同一のものとなっており、ただアートマン＝ブラフマンである楽一般があるだけである。そうするとその状態は、その楽性を享受する主体が欠如している状態であると考えられなくもない<sup>116)</sup>。おそらくヘーマードリは、その点を指して「独存状態においては楽であることがある」と述べているのであろう。一方バクティにおいては楽を享受する主体が残されているため、ヘーマードリは「バクティにおいては楽の直接経験がある」と述べているのであると考えられる。そして、楽性のみがある状態より、楽の直接経験がある状態の方がより優れているとヘーマードリは考えている<sup>117)</sup>ため、このことをもって、バクティが解脱よりも非常に重要であることの理由としているのである。

さらにヘーマードリは、BhP 3.25.33 におけるバクティが「[腹中の] 火が飲み込まれたものを [素早く消失させる] ように、覆いを素早く消失させる」ものであることに関して、「飲み込まれたもの」(nigīrṇa) とは「食べられた食物」(\*bhukta-anna) であり、また「覆い」(kośa) とは「マヤーという覆障」(māyāvaraṇa) であると解釈している。従って、「規定された」バクティは、マヤーという、生類を惑わせる覆障を消滅させる解脱の手段でもあるが、先に確認した通り、それは解脱よりも重要なものであるというのである<sup>118)</sup>。

## 5. バクティがヴェーダに「規定された」(vihitā) というのはどういうことか

以上の KD の記述によると、ヴェーダ聖典に「規定された」バクティの一般的定義は以下のようになるだろう。

- ・有形相のヴィシュヌ神のみを対象とする思考器官 (心) を持つ人の、最上位の一般性である有性 (無形相のヴィシュヌ神) または有形相のヴィシュヌ神を対象とする諸器官の自性上の活動である
- ・そのような人の諸行為器官は、ヴェーダ聖典に規定された諸祭祀行為だけを諸行為とする
- ・マヤーという覆障を素早く消滅させるものである
- ・名声・利益・供養等という動機を欠いたものである
- ・信愛する者は主ヴィシュヌと同一存在であるので、信愛する者の活動であるだけでなく主ヴィシュヌに属するものでもある
- ・解脱よりも重要なものである

では以上の定義項目のうち、バクティがヴェーダ聖典に「規定された」ということはどういうことであるのか、という本稿における主題に関して、その答えになるものはどの項目であろうか。それは、諸行為器官は「ヴェーダに規定された」諸祭祀行為だけを諸行為とする、という定義項目であろう。このこ

<sup>116)</sup> 例えば、ヴァイシェシカ学派の思想家シュリーダラ (Śrīdhara, ca. the late half of 10th CE) の著作 *Nyāyakandalī* (NK) において、アドヴァイタ学派と考えられる者の想定する解脱においては、歓喜を享受する身体や器官等が止滅しているの、享受主体が存在しない点が批判されている。NK 636,5-8: kim punar ātmanah svarūpaṁ yenāvasthitir muktir ucyate. ānandātmateki kecit. tad ayuktam. vikalpāsahatvāt. sa kim ānando muktāv anubhūyate vā, na vā. yadi nānubhūyate. sthito 'py asthitān na viśeṣyate, anupabhogyatvāt. anubhūyate cet, anubhavasya kāraṇaṁ vācyam. na ca kāyakaraṇādivigame tadutpattikāraṇaṁ paśyāmaḥ (【問】さらに、そのようなものとしての状態が解脱と言われるような、アートマンの本性とはどのようなものであるのか。【答】歓喜を本性とすることであると、或る者達は【答える】。【反論】それは理に合わない。考察に耐えないから。【すなわち】その歓喜は、解脱において直接経験されるのか、あるいは【直接経験され】ないのか。もし直接経験されないのであれば、【その歓喜は】あるとしても、ないものと区別されない。享受され得ないから。もし直接経験されるのであれば、直接経験の原因が述べられるべきである。しかし、身体や器官等が止滅した時に、それ (直接経験) が起こる原因を【我々は】見ない)。

<sup>117)</sup> 「楽性のみがある状態より、楽の直接経験がある状態の方がより優れているとヘーマードリは考えている」ということに関して、傍証となるような KD の箇所は未だ見いだせておらず、あくまで文脈上執筆者が読み取ったことである。

<sup>118)</sup> シュリーダラは、この BhP 3.25.33cd は、解脱がバクティに付随して起こることを述べた箇所と解釈している。また、火の喩えの箇所は、バクティが努力なく成就することの喩えであると解釈している。BhAD 292,18f.: muktis ca prāsaṅgikī bhavaty evety āha. yā bhaktiḥ kośaṁ liṅgaśarīraṁ jarayati kṣapayati. svaprayatnaṁ vinaiva siddhau dṛṣṭāntaḥ. nigīrṇaṁ bhuktaṁ annam analo jātharo yathā jarayati (そして、解脱は必ず付随的なものであるということ述べる。それ (yā), 即ちバクティが覆いを、即ち微細身を消失させる、即ち消滅させる、と。全く自身の努力なくして成就することに対して実例がある。飲み込まれたものを、即ち食べられた食物を、腹中の火が消失させるように)。

とを裏付けるように、ヘーマードリは以下のように述べている。

KD 85,2f: asyās ca vihitatva ānuśravikakarmanām<sup>(119)</sup>  
iti liṅgam.<sup>(120)</sup>

また、これ（バクティ）が「ヴェーダに」規定されていることに対して、天啓聖典に基づくものの「だけ」を諸行為とする「神々」の、ということが徴表である。

このように、バクティがヴェーダ聖典に規定されているということに関しては、神々と呼ばれる諸行為器官が、天啓聖典にもとづくもの、すなわちヴェーダ聖典に規定された諸祭祀行為だけを諸行為とすることが徴表である、とヘーマードリは述べる。またKDにおいて明示されていないが、さらに敷衍して考えると、諸知覚器官が有性、すなわち無形相のヴィシュヌ神や有形相のヴィシュヌ神を対象としているということは、アドヴァイタ学派の観点からすると、諸知覚器官が無属性ブラフマンや制約されたブラフマン、すなわち有属性ブラフマン (saguṇabrahman) を対象とすることである。そうすると、諸知覚器官の対象も、アドヴァイタ学派の立場におけるヴェーダ聖典の所説<sup>(121)</sup>であり、専一な思考器官を持つ人の諸器官の活動は全てヴェーダ聖典に由来するものとなる。しかし以上のことは、専一な思考器官を持つ人であるバクタの諸行為がヴェーダ聖典に規定された諸祭祀行為だけであり、かつそのバクタの知覚対象がヴェーダ聖典の所説であるということであり、どうしてバクティそのものがヴェーダ聖典に規定されているということになるのであろうか。以下ではこの点について考察したい。

確かに、専一な思考器官を持つ人の諸器官の活動、すなわち彼の諸行為や知覚作用がバクティであると言われており、このことはバクティがヴェーダ聖典に規定されているということを意味しよう。し

かし、本稿第三節で確認したバクティの一般的定義を考慮すると、バクティそのものがヴェーダ聖典に規定されているとは言えないのではないかと考えられる。すなわち、バクティの一般的定義は「規定された手段であれ規定されていない手段であれ、バクティの手段に基づいて、純質に制約されたブラフマンに対して思考器官を固定すること」であった。この定義によれば、バクティの中心的要素は、「純質に制約されたブラフマンに対して思考器官を固定すること」であり、「規定された」バクティの一般的定義における「専一な思考器官を持つこと」、つまり有形相なヴィシュヌ神のみに対する思考器官の活動を持つことに相当する。また、バクティの一般的定義においては、ヴェーダ聖典に規定されているのはバクティの手段である。したがって、ヴェーダ聖典に由来するバクタの諸行為や知覚作用は、バクティそのものではなくバクティの手段に相当するものであると考えられる。

このことは、「規定された」バクティの下位分類である「混ざった」(miśrā) バクティが、行為 (karman) や知 (jñāna) と「混ざった」バクティであり、その行為が祭祀行為、また知が究極的にはブラフマンと同一存在であるアートマン (ātman) を対象とする間接的な知であること<sup>(122)</sup>からも推定される。「混ざった」バクティにおける行為や知は、「混ざった」と言われているように、バクティそのものからは区別されており、なおかつヴェーダ聖典に由来するものである。そのため、バクティの一般的定義に当てはめると、行為や知は、やはりバクティの手段に相当すると考えられる。そして、「混ざった」バクティが「規定された」バクティの下位分類である以上、「規定された」バクティの一般的定義におけるバクタの行為や知覚作用も、バクティそのものではなく、バクティの手段に相当するもの<sup>(123)</sup>であらう。したがって、「規定された」バクティがヴェーダ聖典に規定されたものと言う場合、その実、バク

(119) ānuśravikakarmanām G, P, T] ānuśravikarmanām D<sub>1</sub>, D<sub>2</sub>, E.

(120) liṅgam D<sub>1</sub>, D<sub>2</sub>, G, P, T] liga E.

(121) アドヴァイタ学派を含むヴェーダーンタ学派の根本経典 *Brahmasūtra* の 1.1.2-3 では、ヴェーダ聖典がブラフマンを知る根拠であり、ヴェーダ聖典の趣意がブラフマンを教えることで一致していることが述べられている。中村 [1951: 119-120] 参照。

(122) MPhにおいて「混ざった」バクティに関して「行為と混ざったもの」(karmamiśrā) と「行為と知と混ざったもの」(karmajñānamiśrā) と「知と混ざったもの」(jñānamiśrā) との三分類を示す際に、KDにおいてはその場合の「知」(jñāna) に対して以下のような説明がなされている。KD 85,12: jñānam ātmaviśayaḥ parokṣo bodhaḥ (D<sub>1</sub>, D<sub>2</sub>, E, P, T] bodhaḥ. tāmasi tredhā, himsārthā dambhārthā mātṣaryārthā ca G.) (知とは、アートマンを対象とする間接的な覚知である)。



ティそのものがヴェーダ聖典に規定されているのではなく、そのバクティの手段がヴェーダ聖典に規定されているのである。

では、KD において、バクタの諸行為や知覚作用がバクティとされていることはどのように考えられるであろうか。それはおそらく、「規定された」バクティの一般的定義として提示された BhP 3.25.32-33 がそのように記述しており、この記述がバクティ一般の定義として提示された BhP 7.1.31cd の記述とうまく噛み合っていないからであると考えられる。

## 6. 結論

以上、MPh が「規定された」バクティの一般的定義として引用する BhP 3.25.32-33 に対する KD の解釈を分析し、バクティがヴェーダ聖典に「規定された」とは、一体どういうことを意味しているのかということを考察してきた。バクティがヴェーダ聖典に「規定された」ということは、バクティそのものがヴェーダ聖典に規定されていることではなく、そのバクティの手段である諸行為や知覚作用がヴェーダ聖典によって規定されているということである。

また、BhP 3.25.32-33 に対する KD の解釈を分析することによって、ヴォーパデーヴァとヘーマードリのアドヴァイタ思想の一端も伺うことができた。彼等の思想基盤は、多くの点でアドヴァイタ学派と共通していると考えられる。特に、ブラフマンをヴィシュヌ神と呼んではいるものの、彼等のヴィシュヌ教学における無形相のヴィシュヌ神と有形相のヴィシュヌ神という二種のヴィシュヌ神が、アドヴァイタ教学における無属性ブラフマンと有属性ブラフマンという二種のブラフマンに対応することは、彼等のバクティ思想とアドヴァイタ学派のバクティ思想との関係を考察するうえで重要である<sup>(124)</sup>。

しかし、バクティを解脱よりも重要とする点、またバクティが解脱よりも重要である根拠を述べるに際してアドヴァイタ学派の解脱観に批判的である

点、さらにバクティの対象が、アドヴァイタ学派の最高原理である無属性ブラフマンに対応する無形相のヴィシュヌ神ではなく、一段低次の有属性ブラフマンに対応する有形相のヴィシュヌ神である点など、アドヴァイタ教学と相違する点も存在している。

北海道大学大学院文学研究院准教授  
早稲田大学高等研究所招聘研究員

(本稿は、JSPS 科研費 21K12843 による研究成果の一部である)

## 参考文献

### 一次資料

- BhP *Bhāgavatapurāṇa* (Vyāsa): See BhAD.  
 BhAD *Bhāvarthadīpikā* (Śrīdhara Svāmī): *Śrīmadbhāgavata-Mahāpurāṇa: "Śrīdhara"īkōpetam*. Ed. Paṇḍita Rāma teja Pāṇḍeya. Dillī: Chaukhambha Sanskrit Pratishthan 2011.  
 KD *Kaivalyadīpikā* (Hemādri): See MPh, D<sub>2</sub>, T.  
 D<sub>2</sub> Manuscripts of Dharmartha Trust at Raghunath Temple, Jammu, J & K, "Muktaphala Tika Kaivalya Deepika – Vopadeva and Hemadri, Dev\_277\_Gha\_Alm\_2\_Shlf\_2\_Devanagari – Kavya," Devanāgarī script. Complete. <https://archive.org/details/MuktaphalaTikaKaivalyaDeepikaVopadevaAndHemadriDev277GhaAlm2Shlf2DevanagariKavya> (最終閲覧日: 2021 年 8 月 10 日)  
 T *Kaivalyadīpikā*, Manuscript of the Library of the Vada-kke Madham Brahmaswam (Vedic Research Centre) in Thrissur, EAP 1039/1/12, Malayalam script. <https://eap.bl.uk/archive-file/EAP1039-1-12> (最終閲覧日: 2021 年 8 月 10 日)  
 MPh *Muktāphala* (Vopadeva): See A, D<sub>1</sub>, E, G, P.  
 A *Muktāphala*, Manuscripts of The Nepal-German Manuscript Cataloguing Project (NGMCP), Reel No. A 92-26, Acc No. NAK 4-2349, Devanāgarī script. Complete.  
 D<sub>1</sub> Manuscripts of Dharmartha Trust at Raghunath Temple, Jammu, J & K, "Muktaphal Tika Kaivalya Deepika – Vopadeva and Hemadri, Dev\_273\_Gha\_Alm\_2\_Shlf\_3\_Devanagari – Kavya," Devanāgarī script. Incomplete. <https://archive.org/details/MuktaphalTikaKaivalyaDeepikaVopadevaAndHemadriDev273GhaAlm2Shlf3DevanagariKavya> (最終閲覧日 2021 年 8 月 10 日)  
 E *Muktāphala*, Manuscripts of NGMCP, Reel No. E 556-11, Devanāgarī script. Incomplete.

(123) 「混ざった」バクティにおける知は、諸知覚器官の対象とはなり得ないアートマンに関する知であるため、一見、諸知覚器官の活動と対応しないように考えられる。しかし、「規定された」バクティの一般的定義における諸知覚器官の対象は、通常諸知覚器官では把握し得ない最上位の一般性である有性であり、これはアートマンと本質的に同一存在である。そのため、「混ざった」バクティにおける知と「規定された」バクティにおける知覚作用は対応していると考えられる。

(124) 執筆者は、マドゥスーダナの主宰神 (īśvara) 観におけるヴォーパデーヴァ、ヘーマードリからの影響に関して言及したことがある。真鍋 [2016] 参照。



- G *Muktāphala of Vopadeva with Kaivalyadīpikā of Hemādri (Revised Edition)*. Ed. Durgamohan Bhat-tacharya. (Calcutta Oriental Series No. 5) Calcutta: Calcutta Oriental Press 1944.
- P *Mukta-Phalam by Vopadeva with the Commentary of Hemadri Part I-II*. Ed., Pandit Shasti and Pandit Hari-das Vidyabagish. (Calcutta Oriental Series No. 5) Calcutta: Sanskrit Press and New Arya Mission Press 1920.
- NK *Nyāyakandalī (Śrīdhara): Nyāyakandalī being a Com-mentary on Praśastapādabhāṣya, with three Sub-Commentaries*. Ed. J. S. Jetly and G. Parikh. Vadodara: The Oriental Institute 1991.
- 二次資料
- Buchta, David and Graham Schweig. 2010. "Rasa Theory" in *Brill's Encyclopedia of Hinduism 2*. eds., by Knut A. Jacobsen. Leiden: Brill, pp. 623-629.
- Edelman, Jonathan. 2021. "Bhakti, Rasa, and Organizing Char-acter Experience: Vopadeva, Śrīdhara, and Sanātana on *Bhāgavata Purāṇa* X.43.17," *Journal of Dharma Studies* 4: 223-239.
- Gupta, Ravi M. 2007. *The Caitanya Vaiṣṇava Vedānta of Jīva Gosvāmī: When knowledge meets devotion*. London and New York: Routledge.
- Gupta, Sanjukta. 2006. *Advaita Vedānta and Vaiṣṇavism: The Philosophy of Madhusūdana Sarasvatī*. London and New York: Routledge.
- Gupta, Santosh. 1998. *The Conception of Bhakti in the Gauḍīya Vaiṣṇava Philosophy*. Vrindavan: Sri Radha Madhva Prakashan.
- Lutjeharms, Rembert. 2014. "An Ocean of Emotion: Rasa and Religious Experience in Early Caitanya Vaiṣṇava Thought" in *Caitanya Vaiṣṇava Philosophy: Tradition, Reason and Devotion*. eds., by Ravi M. Gupta. Burlington: Ashgate, pp. 175-216.
- Nelson, Lance E. 1986. *Bhakti in Advaita Vedanta: A transla-tion and study of Madhusudana Sarasvatī's Bhaktirasayana*. Hamilton: McMaster University (Doctoral Thesis, Unpublished). Downloaded from: <https://macsphere.mcmaster.ca/handle/11375/14225> on the 15th June 2015.
- . 1989. "Bhakti Rasa for the Advaitin Renunciate: Mad-husudana Sarasvatī's Theory of Devotional Sentiment," *Religious Traditions* 12: 1-16.
- . 2004. "The Ontology of Bhakti: Devotion as Paramapurūsārtha in Gauḍīya Vaisnavism and Madhusūdana Sarasvatī," *Journal of Indian Philosophy* 32: 345-349.
- Okita, Kiyokazu. 2017. "From Rasa to Bhaktirasa: The Devel-opment of a Devotional Aesthetic Theory in Early Modern South Asia," *Journal of Indian and Buddhist Studies* Vol. 65-3: (28)-(34).
- . 2020a. "Rejection Monism: Dvaita Vedānta's Engage-ment with the *Bhāgavatapurāṇa*," *Journal of Indian Philosophy* 48: 447-465.
- . 2020b. "The Authorship of the Cometary on Vopade-va's *Harilīlā*," *Journal of Indian and Buddhist Studies* Vol. 68-3: (1)-(7).
- Pollock, Sheldon. 2016. *A Rasa Reader: Classical Indian Aes-thetics*. New York: Columbia University Press.
- Raghavan, V. 1940. *The Number of Rasa-s*. Chennai: The Adyar Library and Research Centre.
- . 1978. "Bopadeva," in *Ramayana, Mahabharata and Bhagavata writers*. eds., by Maneesh Singha/ Nitima Shiv Charan. New Delhi: Publications Division, pp. 122-135.
- Sharma, Raghu Nath. 1996. *Bhakti in The Vaiṣṇava Rasa-Śāstra*. Delhi: Pratibha Prakashan.
- Tagare, G. V. 1950. *The Bhāgavata Purāṇa Part I*. Tr. (Ancient Indian Tradition and Mythology Series) [Purāṇas in Trans-lation] Delhi: Motilal Banarsidass Publishers.
- . 1955a. *The Bhāgavata Purāṇa Part III*. Tr. (Ancient Indian Tradition and Mythology Series) [Purāṇas in Trans-lation] Delhi: Motilal Banarsidass Publishers.
- . 1955b. *The Bhāgavata Purāṇa Part IV*. Tr. (Ancient Indian Tradition and Mythology Series) [Purāṇas in Trans-lation] Delhi: Motilal Banarsidass Publishers.
- . 1955c. *The Bhāgavata Purāṇa Part V*. Tr. (Ancient Indian Tradition and Mythology Series) [Purāṇas in Trans-lation] Delhi: Motilal Banarsidass Publishers.
- Thrasher, Allen Wright. 1993. *The Advaita Vedānta of Brahma-Siddhi*. Delhi: Motilal Banarsidass Publishers.
- Tongū, Masaru. 2011. "Analytical Study of Bhaktirasa as a Religious Sentiment Established by the Gauḍīya Vaiṣṇava School," in *The Historical Development of the Bhakti Movement in India*. eds., by Iwao Shima, Teiji Sakata and Katsuyuki Ida. New Delhi: Manohar, pp. 223-249.
- Upādhyāya, Ācāryaśrī Baladeva. 1998. "Bhūmikā" in *Śāṇḍilyabhaktisūtra with Bhakticandrikā by Śrī Nārāyaṇa Tīrtha (With Svapneśvara-Bhāṣya, Nārada-Bhakti-Sūtra-Bhaktimūlamsā etc in appendix)*, eds. Ācāryaśrī Baladeva Upādhyāya (Sarasvatībhavana-Granthamālā vol. 9) Vara-nasi: Sampurnanand Sanskrit University 1998: pp. (2)-(23).
- Venkatkrishnan, Anand. 2015. *Mīmāṃsā, Vedānta, and the Bhakti Movement*, Columbia: Columbia University. (Doc-toral Thesis, Unpublished). Downloaded from: <https://academiccommons.columbia.edu/doi/10.7916/D8KS6QWV> on the 9th October 2016.
- 金倉円照. 1976. 「シャンカラの小作品 その二 パンチーカラナとそのヴァールッティカ」『インド哲学仏教学研究 III インド哲学篇 2』春秋社, pp. 205-260.
- 中村元. 1951. 『ブラフマ・スートラの哲学〔インド哲学思想第2巻〕』岩波書店.
- . 1989. 『シャンカラの思想〔インド哲学思想第五巻〕』岩波書店.
- . 1990. 『中村元選集〔決定版〕第9巻 ウパニシャッドの思想』春秋社.
- . 1996. 『中村元選集〔決定版〕第27巻 ヴェーダーンタ思想の展開』春秋社.
- 徳永宗雄. 1989. 「7 バクティ——神への信愛と帰依」長尾雅人等編『岩波講座東洋思想第7巻: インド思想3』岩波書店, pp. 203-235.
- 藤井隆道. 2015. 「存在するとはいかなることか— sattā の実

- 在をめぐる論争とその背景」『インド哲学仏教学研究』  
22: 105-120.
- 針貝邦生. 1990. 『古典インド聖典解釈学研究—ミーマーン  
サー学派の釈義・マントラ論』九州大学出版会.
- 本多恵. 1990. 『ヴァイシェシカ哲学大系』国書刊行会.
- 眞鍋智裕. 2016. 「マドゥスーダナ・サラスヴァティーの主  
宰神論形成に関する一考察」『南アジア古典学』11:  
147-168.
- . 2017. 「*Paramahamsapriyā* における諸典籍の分類に  
ついて—on *Bhāgavatapurāṇa* 1.1.2」『南アジア古典学』  
12: 215-234.
- . 2019. 「マドゥスーダナ・サラスヴァティーの  
*Bhāgavata Purāṇa* 1.1.3 の解釈——何故 *Bhāgavata  
Purāṇa* が最高の〈人間の目的〉なのか」『論集』46:  
105-125.
- . 2021a. 「バクティの実践における śāstra の必要性—  
*Bhaktirasāyanaṭīkā* on *Bhaktirasāyana* 1.32 の分析」『早  
稲田大学高等研究所紀要』第 13 号: 59-75.
- . 2021b. 「後期アドヴァイタ学派における知識の神学  
から感情の神学への転換—*Bhaktirasāyanan* における先  
行文献の感情論的再解釈」『南アジア古典学』16: 283-  
297.

# Does Social Capital Moderate the Impact of Disaster on Health and Quality of Life? Causal Mediation/Sensitivity Analysis and Instrumental Variable Estimation

SANNABE, Atsushi<sup>(1)\*</sup> · WADA, Yuri<sup>\*\*</sup> · ICHIDA, Yukinobu<sup>\*\*</sup> ·  
KAWACHI, Ichiro<sup>\*\*\*</sup> · INABA, Yoji<sup>\*\*\*\*</sup>

## Abstract

We estimated the impact of both the Great East Japan Earthquake in 2011 and the Great Kanto Earthquake in the 1920s—both of which had the highest casualties in Japan—on social capital accumulation and their relationship to self-rated health (SRH) and life satisfaction using causal mediation/sensitivity analysis and instrumental variable estimation techniques on nationwide surveys conducted in Japan.

While residents' social capital increased in the areas most devastated by the Great East Japan Earthquake, there were no significant effects on life satisfaction. However, the increase in social capital buffered the adverse impact of the quake on self-rated health.

We also examined the causal relationships between social capital and SRH and life satisfaction, using the Great Kanto Earthquake as an instrumental variable. In the first stage, the long-term impact of the Great Kanto Earthquake reduced social capital, while in the second stage, a positive causal effect of social capital on SRH and life satisfaction was observed. Based on the results of the IV estimation, it was found that the mitigating effect of SC almost eliminates the direct adverse effect of the Great East Japan Earthquake on SRH.

**Keywords:** Japan; Social capital; Great East Japan Earthquake; Kanto earthquake; Natural disasters; Self-rated health; Causal mediation analysis; Instrumental variable estimation

## 1. Introduction

The Great East Japan Earthquake in 2011 was devastating, claiming 15,848 lives with an additional 3,305 missing people. Surprisingly, however, despite the magnitude and extent of damage, some studies reported that the Great East Japan Earthquake improved life satisfaction in Japan (Yamamura et al., 2015; Ishino et al., 2011), or found no statistically significant nationwide decline in life satisfaction after the disaster (Tiefenbach and Kohlbacher, 2015).

Why is it that severe earthquake damage often does not impair the subjective health and well-being

of the victims? Few papers have answered this question. In this paper, we provide an answer to this question by using the analysis method of mediation analysis. In other words, earthquakes can have a direct negative impact on subjective health, but on the other hand, earthquakes cause the accumulation of social capital, which in turn has a positive impact on subjective health, thus offsetting the direct negative impact.

Of course, this logic is based on the assumption that the accumulation of social capital leads to improved health.

The impact of social factors as well as genetic and other factors in determining health status has been

---

\* Ryutsu Keizai University and Doctoral Institute for Evidence Based Policy

\*\* Doctoral Institute for Evidence Based Policy

\*\*\* Harvard T. H. Chan School of Public Health. Department of Social and Behavioral Sciences

\*\*\*\* Nihon University

(1) Corresponding author: 3-2-1 Shin-Matsudo, Matsudo, Chiba, Japan.

E-Mail address: sannabe@rku.ac.jp

pointed out; according to McGinnis et al. (2002), about 20% of early deaths can be explained by these environmental and social factors. Among the environmental and social factors, one of the factors that has received the most attention in recent years is social capital.

The level of social capital (SC) was found to increase in areas damaged by the Great East Japan Earthquake. During the disaster recovery phase, residents held more meetings than before the earthquake to mutually provide for survival needs and cope psychologically, and to promote interpersonal interaction. Our first aim is to perform a causal mediation/sensitivity analysis of the relationships between disaster, social capital, and happiness/self-rated health (Imai et al., 2010; Hicks and Tingly, 2011).

We show that SC increases self-reported health (SRH) and life satisfaction, but that disasters adversely affect SRH. It also shows that following the earthquake, SC levels rose; therefore, SC may have mitigated the earthquake's adverse impact on SRH.

Additionally, this paper examines the causal influence of SC on current residents' SRH and life satisfaction using data from the Kanto earthquake that occurred 80–90 years ago as instrumental variables. We argue that the areas most devastated by the 1929 Kanto Earthquake led to population decline and economic stagnation – both factors which are thought to lead to a decrease in social capital in the long run. We use this “exogenous” shock to social capital as an instrument to identify a causal effect of SC on self-rated health and happiness. Our IV analysis suggests that the relationship between SC and SRH and life satisfaction is causal and positive.

## 1.1 Literature Review

Social capital is defined as trust, norms of reciprocity, and networks with externalities through the minds of actors (Inaba, 2005). Although the meaning of SC varies by author, the importance of SC for both disaster preparedness and recovery has been frequently cited (Aida et al., 2013; Aghabakhshi and Gregor, 2007; Aldrich and Sawada, 2014; Aldrich, 2012; Allen, 2006; Baker and Refsgaard, 2007; Buckland and Rahman, 1999; Chen et al., 2013; Flores et al., 2014; Hurlbert et al., 2001; Islam and Walkerdén, 2014; Klinenberg, 2002; Koh et al., 2008; Levac et al., 2012; Nakagawa and Shaw, 2004; Reininger et al.,

2013; Shimada, 2015; Weil et al., 2011; Wind and Komproe, 2011; Yamamura, 2010; Yamamura et al., 2015). Harada (2012) summarizes the relationship between the Great East Japan Earthquake and social capital. Also, Hikichi et al. (2017) summarize existing studies on the relationship between the Great East Japan Earthquake and social capital.

Despite this extensive research on the impact of SC on disaster preparedness and recovery from disasters, few studies have examined the impact of disasters on SC (one of the few examples is Hikichi et al. (2017)); most of them examine one component, trust. This paper attempts to bridge this gap by clarifying how the 2011 Great East Japan Earthquake affected some aspects of SC and two QOL indices (i.e., SRH and life satisfaction) based on data from two nationwide mail surveys in 2010 and 2013.

Aida et al. (2011) showed that mortality is higher in people with poor friendships.

Matsubayashi, Sawada and Ueda (2013) show that prefectures with more blood donors have lower suicide rates after a natural disaster. Also, Mohan et al. (2005) showed that regions with more social participation have significantly lower mortality rates for all causes of death.

A systematic review of the relationship between mental wellbeing and social capital (Murayama, Fujiwara and Kawachi (2012)) confirmed the positive impact of social capital in all 11 papers examined.

The lower the level of social capital (trust, social participation), the lower the health perspective. In a study using panel data (Giordano, Bjork and Lindstrom (2012)), it was observed that higher social capital was associated with a higher subsequent subjective sense of well-being.

Riumallo-Herl et al. (2014) and d'Hombres et al. (2010) show that social capital has a causal impact on subjective health perceptions in individual-level data, using a community-level social capital variable as the instrumental variables. However, it must be said that the instrumental variables used in these studies are not likely to satisfy the exclusion restriction. In this paper, we use earthquake damage from a long time ago (the Great Kanto Earthquake) as the instrumental variable, and it is highly likely that the exclusion restriction is satisfied. In addition, the inclusion of many control variables in the estimation further enhances the possibility. This paper also contributes to the context of



studies that have shown that high social capital has a positive impact on subjective health perceptions using instrumental variables.

## 2. Materials and Methods

### 2.1 Data

We examined changes in SC based on data gathered through two nationwide mail surveys on SC—defined as trust, norms of reciprocity, and networks with latent externalities (Inaba, 2005)—conducted in 2010 and 2013. These surveys clarify the level of SC in Japan, focusing on two different aspects: cognitive and structural SC. The former includes generalized trust (i.e., trust in the general public) and particularized trust (i.e., trust among particular groups of people), while the latter includes networks in terms of group participation as well as daily contact with neighbors, family members/relatives, friends/acquaintances, and colleagues. Additionally, the surveys obtained QOL indices including SRH, depression level, anxiety regarding isolation, and self-rated life satisfaction. Both surveys used two-stage stratified random sampling. In the first stage, we stratified municipalities into three categories according to population size, and one was randomly chosen from each category. In the second stage, we visited each municipality to randomly collect residents' names and addresses from resident registries of the local governments. They included residents in Japan aged 20–79 years. Survey questionnaires were sent and returned by mail. In 2010, we mailed 4,000 questionnaires across 50 municipalities, of which 1,599 were returned, and 10,000 questionnaires across 100 municipalities in 2013, of which 3,575 were returned. The response rates are about 40% and 36%, respectively. In keeping with ethical protocols, the questionnaire in the 2013 survey was checked and approved by the ethical committee of the College of Medicine of Nihon University.

### 2.2 Dependent variables

The dependent variables are two QOL indices, SRH and life satisfaction.

Life satisfaction was assessed by the item “Are you satisfied with your present life?” scored on a five-point scale: 1 = very satisfied, 2 = satisfied, 3 = neither, 4 = unsatisfied, and 5 = very unsatisfied. The analysis used reversed values. For SRH, respondents

were asked to rate their health in general using four answer categories: 1 = very good, 2 = good, 3 = fair, and 4 = poor. Similarly, reversed values were used for the analysis.

### 2.3 Mediation variable

Mediation variables comprised four indexes related to SC: particularized trust, network of daily contacts, (network of) group participation, and SC (the total of the first three indexes). For more information on these social capital measures, see Inaba (2013).

Contact with neighbors was assessed by responses to the item “Please pick the most suitable answer on how you interact with your neighbors: 1 = cooperate with each other, 2 = have daily chats, 3 = have minimal contact, such as exchanging greetings, and 4 = no contact.” Contacts with friends/acquaintances and colleagues were categorized by frequency of contact (1 = several times a week, 2 = at least several times a month, 3 = several times a year, 4 = once a year at most, and 5 = no contact). Each numerical value was inverted, summed, and standardized to represent “network of daily contacts.”

Questions on group participation have seven answer choices (1 = more than 4 days a week, 2 = 2 or 3 days a week, 3 = once a week, 4 = 2 or 3 days a month, 5 = once a month, 6 = several times a year, and 7 = no participation). Each numerical value was inverted, summed, and standardized to represent “network as group participation.”

“Social capital” comprised the standardized sum of the above three indexes.

### 2.4 Independent variables: Treatment variable

The treatment variable is a binary variable: 1 was assigned to an area if the Japanese government designated it as a severely damaged municipality “*Tokutei Hisai Tihou Kokyo Dantai*”; otherwise, 0 was assigned.

The criteria for this status are as follows:

- (1) A municipality hit by an earthquake with an intensity of over “lower 6” on the Japanese scale.
- (2) There is more than a certain number of destroyed houses.
- (3) Maximum tsunami observation value is at least 2.4 meters, and flooding damage has been confirmed.

- (4) Local burden on disaster restoration project cost and disaster waste disposal, etc., exceeds 5% of standard tax-revenue ratio.

That is, it is necessary to ascertain that the magnitude of the earthquake, damage of the tsunami, and the cost of damage is enormous.

Regarding the Great Kanto Earthquake, we use the total number of earthquakes in 1923 and the after-shocks that occurred between 1923 and 1939 for each municipality. Earthquake data were obtained from the Japan Meteorological Agency website. We use both the Big and Small Earthquake Index: “Big earthquakes” refer to areas hit by a huge earthquake with a seismic intensity of at least 6 and “small earthquakes” are those with a seismic intensity of 5. However, the seismic intensity scale has been altered over the last century; these changes in the definition of seismic intensity scale in Japan are shown in Table 1.

Table 1. Changes in Definitions of the Seismic Intensity Scale in Japan

| 1898-1936 | 1996-Present            |
|-----------|-------------------------|
| 0         | 0                       |
| 1         | 1                       |
| 2         | 2                       |
| 3         | 3                       |
| 4         | 4                       |
| 5         | Lower 5<br>Upper 5      |
| 6         | Lower 6<br>Upper 6<br>7 |

The Great Kanto Earthquake that occurred in 1923 caused severe damage, particularly in Tokyo and Kanagawa prefectures and resulted in more than 100,000 deaths. The epicenter was in the west of Tokyo with a hypocenter in Sagami Bay, west of Kanagawa Prefecture (National Research Institute for Earth Science and Disaster Resilience<sup>(2)</sup>).

## 2.5 Analytic strategy

In order to conduct the causal mediation analysis, we assumed the relationships between variables as shown in Figure 1.

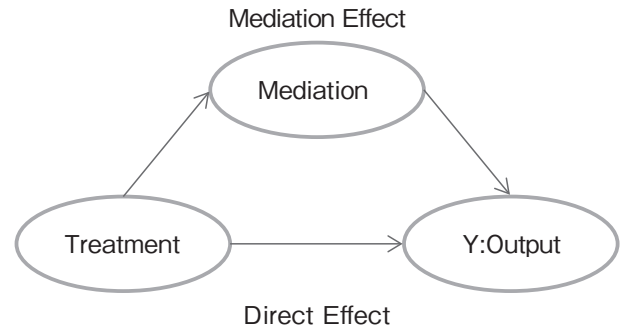


Figure 1. The relationship between variables in a causal mediation analysis.

More concretely, we estimated the following equations as a system:

$$M = \alpha_1 + \alpha_2 T + \alpha_3 X + \varepsilon_1 \quad (1)$$

$$Y = \beta_1 + \beta_2 M + \beta_3 T + \beta_4 X + \varepsilon_2 \quad (2)$$

Y is output, that is, SRH and life satisfaction. M is the mediation variable, which is social capital. T is treatment, that is, whether the municipality is designated as a severely damaged or not. If the municipality where the respondent lives in is designated *Tokutei Hisai Tihou Kokyo Dantai*, T is 1. If not, T is 0. X refers to age, gender, education, household income, marriage, occupation, duration of residence, housing, and year dummy.

Causal mediation analysis can effectively independently estimate direct and mediation effects using a quasi-Baysian Monte Carlo approximation (Imai et al., 2010; Hicks and Tingly, 2011). In order to identify the mediation effect and the direct effect, the following assumption must be satisfied:

Assumption 1: Sequential Ignorability (Imai et al., 2010)

$$(a) \quad \{Y(t,m), M(t)\} \perp T | X=x$$

$$(b) \quad Y(t,m) \perp M(t) | T=t, X=x$$

Where X is a vector of the observed pretreatment confounders,  $0 < \Pr(T=t|X=x)$  and  $0 < p(M=m|T=t, X=x)$  for  $t=0$  and 1, and all x and m in support of X and M, respectively.

Assumption 1a is satisfied because earthquakes are natural incidents (natural experiments), but Assumption 1b is problematic. It requires that the correlation between  $\varepsilon_1$  and  $\varepsilon_2$  be 0. However, we cannot test this directly through observational data. Conse-

(2) <https://dil.bosai.go.jp/disaster/1923kantocq/kaisetsu.html>

quently, the validity of the outcome by sensitivity analysis needs to be tested.

### 3. Results

#### 3.1 Descriptive statistics

Table 2 presents the descriptive statistics of data used in this study.

In this study, we limited our analysis to individuals who lived at their current residence for more than three years, in order to match respondents' residence at the time of the Great East Japan Earthquake. In this section, all estimation was made using STATA 14, specifically "medeff," a program written by Hicks and Tingley (2011). Further, the estimation equation in this study includes the above-mentioned control variable *X*.

#### 3.2 Impact of the quake on SC

Table 3 shows the impact of earthquake damage on each indicator of SC, the mediation variable. All estimates are from OLS. Numbers in parentheses are cluster-robust standard errors with municipalities (150) as clusters. Except for particularized trust, earthquake damage had a significant positive impact on three indexes of SC. Basic survival after the disaster required cooperation with neighboring residents. Residents collaborated to begin reconstruction plans and actively interacted with each other. It can be interpreted that such active exchanges are reflected in these indexes.

Solnit (2009) found that natural disasters could enhance SC, "two things matter most about these ephemeral moments—they demonstrate how deeply most of us desire connection, participation, altruism, and purposefulness" (pp. 305–306). Toya's (2014) multiple regressions based on a cross-country data set for 1970–2000 found a strong positive relationship between the frequency of natural disasters and SC in terms of trust and the quality of government, especially in OECD countries. As for the Great East Japan Earthquake, Hommerich (2012) found high levels of social trust, based on data from a mail survey in Tohoku and Kanto regions in September 2011, six months after the disaster.

#### 3.3 Impact of earthquake damage and SC on SRH

Table 4 examines the impact of both the Great

East Japan Earthquake and SC indices on SRH. All estimates are from OLS. Numbers in parentheses are cluster-robust standard errors with municipalities (150) as clusters. In Tables 4, 5, 8, 9, 10, and 11, in model 1, we use "particularized trust" as a variable for social capital, as explained in 1.4 Mediation variable. In model 2, we use "network of daily contacts" as a variable for social capital, and in model 3, we use "(network of) group participation" as a variable for social capital. Finally, in model 4, we use "SC (the total of the first three indexes)" as a variable for social capital. All four indices of SC were positively associated with SRH. Despite this, residents of severely damaged areas had lowered SRH levels. Lowered SRH from earthquake damage was relieved by 50% due to increased social capital as shown in Model 4.

#### 3.4 Impact of earthquake damage and SC on life satisfaction

Table 5 shows the impact of earthquake damage and SC on residents' life satisfaction. All estimates are from OLS. Numbers in parentheses are cluster-robust standard errors with municipalities (150) as clusters. Earthquake damage did not directly affect life satisfaction. Simultaneously, SC improved residents' level of life satisfaction. Yamamura et al. (2015) found that the influence of SC on happiness after the earthquake increased with time. However, the earthquake damage did not directly lower the degree of happiness.

It is not clear as to why earthquake damage had no influence or even a positive influence on the degree of happiness. According to Ishino (2011), the increase in happiness is a result of people's altruistic approach after the disaster. Alternatively, the criteria for assessing SRH were not influenced by the earthquake: as the reference level for judging the degree of life satisfaction and happiness may have been lowered, self-reported life satisfaction and happiness increased. People may have appreciated simple and common aspects of life more than they did before the earthquake, lowering the reference point for judging happiness. However, this interpretation is merely inference and needs to be tested. Further, if an individual's health condition history is considered an important criterion, its reference level is to remain stable regardless of earthquake damage, providing a more objective indicator of SRH.

Table 2. Descriptive Statistics of Data from 2010 and 2013 Surveys on Social Capital

| Variable                           | N     | Mean or % | SD    | Minimum | Maximum |
|------------------------------------|-------|-----------|-------|---------|---------|
| Particularized trust               | 4,447 | 13.31     | 3.63  | 1       | 21      |
| Network : daily contacts           | 3,815 | 10.88     | 2.87  | 1       | 19      |
| Network : group participation      | 5,174 | 4.54      | 3.74  | 1       | 25      |
| Social capital                     | 3,547 | 28.46     | 7.35  | 7       | 56      |
| Self-Rated Health                  | 5,003 | 2.80      | 0.67  | 1       | 4       |
| Happiness                          | 4,929 | 3.31      | 1.02  | 1       | 5       |
| Big earthquakes during 1923-1939   | 5,172 | 0.01      | 0.08  | 0       | 1       |
| Small earthquakes during 1923-1939 | 5,172 | 0.14      | 0.74  | 0       | 7       |
| Extent of damage of area           | 5,172 |           |       |         |         |
| severely damaged                   |       | 4.2%      |       |         |         |
| not severely damaged               |       | 95.8%     |       |         |         |
| Age                                | 5,174 | 52.84     | 15.90 | 20      | 80      |
| Gender                             | 5,174 |           |       |         |         |
| Male                               |       | 45.5%     |       |         |         |
| Female                             |       | 54.5%     |       |         |         |
| Education                          | 5,134 |           |       |         |         |
| Junior High                        |       | 10.9%     |       |         |         |
| High School                        |       | 40.2%     |       |         |         |
| Tech. School                       |       | 11.3%     |       |         |         |
| Tech. College                      |       | 10.9%     |       |         |         |
| Univ.                              |       | 23.8%     |       |         |         |
| Graduate School                    |       | 2.3%      |       |         |         |
| Others                             |       | 0.7%      |       |         |         |
| Household Income                   | 5,001 |           |       |         |         |
| <2M                                |       | 9.7%      |       |         |         |
| 2-4                                |       | 28.1%     |       |         |         |
| 4-6                                |       | 22.7%     |       |         |         |
| 6-8                                |       | 14.3%     |       |         |         |
| 8-10                               |       | 9.8%      |       |         |         |
| 10-12                              |       | 4.5%      |       |         |         |
| 12 ≤                               |       | 4.9%      |       |         |         |
| Marriage                           | 4,770 |           |       |         |         |
| Married                            |       | 78.0%     |       |         |         |
| Unmarried                          |       | 22.0%     |       |         |         |
| Occupation                         | 5,061 |           |       |         |         |
| Self-Employed                      |       | 10.7%     |       |         |         |
| Private executive                  |       | 2.6%      |       |         |         |
| Private worker                     |       | 28.8%     |       |         |         |
| Public Servant                     |       | 4.8%      |       |         |         |
| Part-time worker                   |       | 15.5%     |       |         |         |
| Student                            |       | 1.9%      |       |         |         |
| Unemployed                         |       | 15.9%     |       |         |         |
| Housewife/husband                  |       | 17.4%     |       |         |         |
| Others                             |       | 2.5%      |       |         |         |
| Duration of Residence              | 5,048 | 25.22     | 18.67 | 0       | 79      |
| Housing                            | 5,082 |           |       |         |         |
| owned house                        |       | 67.2%     |       |         |         |
| condominium                        |       | 11.8%     |       |         |         |
| rented house                       |       | 12.6%     |       |         |         |
| company-owned house                |       | 1.6%      |       |         |         |
| public housing                     |       | 4.5%      |       |         |         |
| rented room                        |       | 1.1%      |       |         |         |
| boarding house                     |       | 0.3%      |       |         |         |
| others                             |       | 0.8%      |       |         |         |
| Year Dummy                         | 5,174 |           |       |         |         |
| 2013                               |       | 69.1%     |       |         |         |
| 2010                               |       | 30.9%     |       |         |         |
| Districts                          | 150   | 34.48     | 6.31  | 18      | 49      |



Table 3. Impact of the Earthquake on Social Capital

|                       | Particularized Trust | Network :<br>Daily Contacts | Network :<br>Group Participation | Social Capital   |
|-----------------------|----------------------|-----------------------------|----------------------------------|------------------|
| Severely Damaged Area | 0.173 (0.116)        | 0.367 (0.145)**             | 0.187 (0.081)**                  | 0.377 (0.122)*** |

Note. \*  $p < 0.1$ , \*\*  $p < 0.01$ , \*\*\*  $p < 0.001$ . For reasons of space, the coefficient values of the other explanatory variables are omitted.

The other explanatory variables are : age, gender, education, household income, marriage, occupation, duration of residence, housing, year dummy.

Table 4. Impact of the Great East Japan Earthquake and Social-Capital Indices on Self-rated Health

|                                       | Model 1        | Model 2           | Model 3         | Model 4          |
|---------------------------------------|----------------|-------------------|-----------------|------------------|
| Severely damaged area                 | -0.035 (0.031) | -0.109 (0.042)*** | -0.07 (0.03)**  | -0.09 (0.041)**  |
| Particularized trust                  | 0.1 (0.012)*** |                   |                 |                  |
| Network : daily contacts              |                | 0.081 (0.012)***  |                 |                  |
| Network : group participation         |                |                   | 0.091 (0.01)*** |                  |
| Social capital                        |                |                   |                 | 0.098 (0.012)*** |
| Observations                          | 3,614          | 2,992             | 4,100           | 2,853            |
| R-squared                             | 0.083          | 0.066             | 0.082           | 0.071            |
| Average Causal Mediated Effect (ACME) | 0.016          | 0.029             | 0.019           | 0.035            |
| Direct Effect                         | -0.035         | -0.109            | -0.070          | -0.090           |
| Total Effect                          | -0.019         | -0.080            | -0.051          | -0.055           |
| % of total effect mediated            | -0.348         | -0.356            | -0.358          | -0.536           |

Note. \*  $p < 0.1$ , \*\*  $p < 0.01$ , \*\*\*  $p < 0.001$ . For reasons of space, the coefficient values of the other explanatory variables are omitted.

The other explanatory variables are : age, gender, education, household income, marriage, occupation, duration of residence, housing, year dummy.

Table 5. Impact of the Great East Japan Earthquake and Social-Capital Indices on the Degree of Life Satisfaction

|                                       | Model 1          | Model 2         | Model 3         | Model 4          |
|---------------------------------------|------------------|-----------------|-----------------|------------------|
| Severely damaged area                 | 0.043 (0.038)    | -0.011 (0.051)  | 0.023 (0.056)   | 0.009 (0.051)    |
| Particularized trust                  | 0.254 (0.018)*** |                 |                 |                  |
| Network : daily contacts              |                  | 0.204 (0.02)*** |                 |                  |
| Network : group participation         |                  |                 | 0.17 (0.015)*** |                  |
| Social capital                        |                  |                 |                 | 0.284 (0.018)*** |
| Observations                          | 3,527            | 2,941           | 4,052           | 2,779            |
| R-squared                             | 0.155            | 0.130           | 0.123           | 0.166            |
| Average Causal Mediated Effect (ACME) | 0.043            | 0.073           | 0.028           | 0.102            |
| Direct Effect                         | 0.043            | -0.011          | 0.023           | 0.009            |
| Total Effect                          | 0.086            | 0.063           | 0.051           | 0.111            |
| % of total effect mediated            | 0.475            | 0.839           | 0.361           | 0.860            |

Note. \*  $p < 0.1$ , \*\*  $p < 0.01$ , \*\*\*  $p < 0.001$ . For reasons of space, the coefficient values of the other explanatory variables are omitted.

The other explanatory variables are : age, gender, education, household income, marriage, occupation, duration of residence, housing, year dummy.

### 3.5 Sensitivity analysis

Figure 2 shows the results of checking the robustness of the effect of treatment (earthquake) through SC on SRH (indirect effect, Average Causal Mediated Effect, [ACME])<sup>(3)</sup>. This sensitivity analysis is performed based on Model 4, the base model in Table 4. If the correlation ( $\rho$ ) of the error terms for SC and SRH is less than 0.14, the mediation effect is positive. On the other hand, if it exceeds 0.15, that mediation

effect is negative. The result that the life satisfaction is the output in sensitivity analysis performed based on Model 4, the base model in Table 5, is more robust than SRH, and mediation effect is positive if  $\rho$  is 0.27 or less. The results indicate that we cannot claim that the threshold of  $\rho$  is so high. It is therefore necessary to examine the causal influence of SC on QOL: SRH and life satisfaction.

(3) This estimate was made using STATA 14, in particular “medsens,” a program written by Hicks and Tingley (2011).

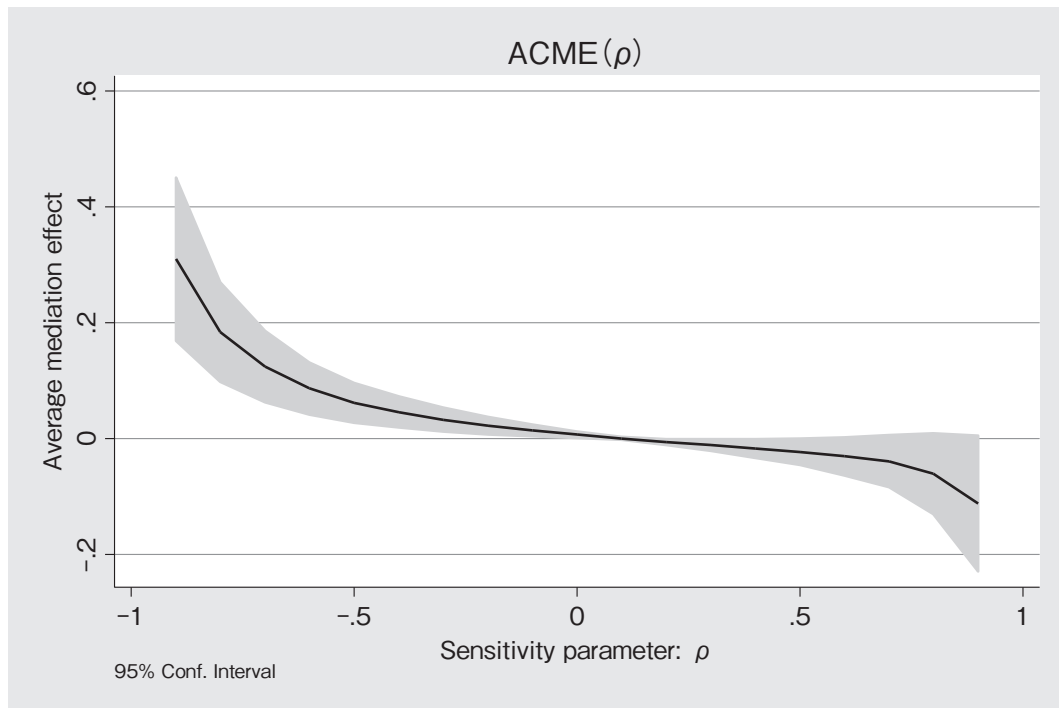


Figure 2. Sensitivity analysis for the causal effect of social capital on self-rated health.

\*Rho at which ACME = 0 was 0.15. This sensitivity analysis is performed based on Model 4 in Table 4.

### 3.6 Instrumental variables estimation: The causal effect of SC on QOL

In our analysis, each social-capital indicator significantly influenced SRH and life satisfaction at the .01 level. However, this does not reflect a causal effect. For example, unaccounted factors may have implications for both social-capital indicators and QOL variables. Moreover, since both SC and QOL are subjective variables, a common method bias may occur.

The representative estimation method used to address such confounding problems is instrumental variable estimation. Several studies verify causal links between SC and health using instrumental variable estimation (Folland, 2007; Schultz et al., 2008; D'Hombres et al., 2010; Kim et al., 2011; Ronconi et al., 2012; Ichida et al., 2013). Kawachi et al. (2013), presents their results; Chapter 4 on causal inference in SC research is of particular interest.

In this paper, we analyze the impact of the Great Kanto Earthquake and its aftershocks that occurred in the 1920s and 1930s and in addition to the impact of the 2011 Great East Japan Earthquake to compare the role of SC in these periods. Since SC can be considered “capital” and past events influence present circumstances, though not directly, we assume that

although the present generations would not have experienced direct effects of the Great Kanto Earthquake, the area would still show its effects.

Therefore, we used the Kanto Earthquake as an instrumental variable and examined the causal relationship between SC and SRH and life satisfaction. The results demonstrated a causal effect of social capital on both SRH and life satisfaction, even though the sensitivity analysis only identified an unstable causal effect.

We estimated the causal influence of SC on QOL by a two-step generalized method of moments (GMM). If the assumption of homoscedasticity in the error term holds and there is no serial correlation between samples, the GMM estimator coincides with the two-stage least squares (2SLS) estimator. However, it is impossible to assume that there is no serial correlation among individuals and there is no rational basis to assume homoscedasticity. Therefore, the two-step GMM estimation yields a more efficient and consistent estimator than the 2SLS would.

In the following estimates, we limit the age of the subjects to, at most, 70 years. This is to exclude those who directly experienced the Great Kanto Earthquake, or those who may have experienced its direct influence in early childhood.

### 3.6.1 First stage

There are about 2000 active faults all over Japan. After the Great East Japan Earthquake, the number of people sensitive to the risk of earthquakes has increased in Japan.

There is a huge active fault near Numazu City, and earthquakes have occurred many times in the past. For other cities that have experienced weak earthquakes, many continue to suffer population decline. While the outflow of population continues, influx does not occur, and population decline continues. These facts hinder social unity. Consequently, social capital is considered to decline as depopulation progresses.

Table 6 shows the estimation result of the first stage: Only “big earthquakes” is used as an instrumental variable, while Table 7 also includes small earthquakes as an instrumental variable. All estimates are from OLS. Numbers in parentheses are cluster-robust standard errors with municipalities (150) as clusters. The results show that the Great East Japan Earthquake had a significant positive influence, while the Great Kanto Earthquake had a significant negative influence.

The conditions immediately following earthquakes necessitate mutual assistance among residents

to ensure survival. Reconstruction involves local residents to develop and execute plans, which increase opportunities for interpersonal interaction and exchange that benefits society. This raises the level of SC, specifically peoples’ networks (daily contact and group participation).

However, as the reconstruction progresses, the high percentage of unfamiliar people may result in lowered indexes of trust and network density. For example, in the newly formed town, the proportion of those participating in public meetings was reported to be low (Williamson, 2002). In addition, Hanibuchi (2012) reported that as the number residents of the newly formed town grew, the more likely they were to have negative responses for SC indicators. Furthermore, with reconstruction, sections of the town are likely to be partitioned for construction, reducing walkability. Therefore, although the initial impact of the earthquake on SC will be positive, it is expected to become a negative influence.

The results of the first stage suggest that the problem of a weak correlation (Bound et al., 1995) does not occur for network involving group participation. However, the values of F-statistics were low for the others, although the coefficients of instruments were

Table 6. First Stage Analysis with Big Earthquakes Data

|                                            | Particularized Trust | Network :<br>Daily Contacts | Network :<br>Group Participation | Social Capital   |
|--------------------------------------------|----------------------|-----------------------------|----------------------------------|------------------|
| Severely damaged area                      | 0.206 (0.112)*       | 0.369 (0.146)**             | 0.224 (0.111)**                  | 0.385 (0.127)*** |
| Big earthquakes during 1923-1939           | -0.057 (0.032)*      | -0.091 (0.038)**            | -0.157 (0.029)***                | -0.07 (0.042)*   |
| Robust F statistic (Big earthquake)        | 3.378                | 5.763                       | 27.940                           | 2.982            |
| Robust F statistic (Severely damaged area) | 1.660                | 8.040                       | 4.580                            | 10.960           |
| observation                                | 3,176                | 2,739                       | 3,413                            | 2,656            |

Note. \*  $p < 0.1$ , \*\*  $p < 0.01$ , \*\*\*  $p < 0.001$ . For reasons of space, the coefficient values of the other explanatory variables are omitted. The other explanatory variables are : age, gender, education, household income, marriage, occupation, duration of residence, housing, year dummy.

Table 7. First Stage Analysis with Big and Small Earthquakes Data

|                                                | Particularized Trust | Network :<br>Daily Contacts | Network :<br>Group Participation | Social Capital   |
|------------------------------------------------|----------------------|-----------------------------|----------------------------------|------------------|
| Severely damaged area                          | 0.196 (0.113)*       | 0.362 (0.146)**             | 0.224 (0.111)**                  | 0.376 (0.127)*** |
| Big earthquakes during 1923-1939               | -0.065 (0.033)**     | -0.098 (0.038)**            | -0.156 (0.03)***                 | -0.078 (0.043)*  |
| Small earthquakes during 1923-1939             | -0.047 (0.014)***    | -0.035 (0.015)**            | 0.003 (0.016)                    | -0.038 (0.016)** |
| Robust F statistic (Big and small earthquakes) | 7.995                | 5.007                       | 14.120                           | 3.834            |
| Robust F statistic (Severely damaged area)     | 1.480                | 7.660                       | 4.590                            | 10.410           |
| observation                                    | 3,176                | 2,739                       | 3,413                            | 2,656            |

Note. \*  $p < 0.1$ , \*\*  $p < 0.01$ , \*\*\*  $p < 0.001$ . For reasons of space, the coefficient values of the other explanatory variables are omitted. The other explanatory variables are : age, gender, education, household income, marriage, occupation, duration of residence, housing, year dummy.

statistically significant. Therefore, the reliability of the results of particularized trust, network of daily contacts, and SC in the second stage is important.

### 3.6.2 Second Stage

We would like to briefly confirm the appropriateness of the instrumental variables used in this paper once again here. The Great Kanto Earthquake that occurred about 90 years ago has been affecting social capital. On the other hand, it does not affect the subjective sense of well-being and satisfaction of the present residents. This is because there is a possibility that a huge earthquake will occur anywhere in Japan. If it had an influence it would be through an economic route. We control the household income and the educational level about the economic aspect, and the result of Hansen J statistic has no problem, and it can

be judged from these facts that the condition of exclusion restriction is satisfied.

Table 8 shows the estimation results at the second stage: social-capital indicators had a significant positive influence. Table 9 shows the results of including small earthquakes as an instrumental variable in addition to big earthquakes. Table 8, Table 9, Table 10, and Table 11 are estimated by two-step GMM. Hansen's (1982) J statistic can be calculated as the addition of small earthquakes as an instrumental variable that implies multiple instrumental variables. Hansen's J statistic is more than 0.2, which is satisfactory, demonstrating no issues regarding exclusion restriction.

Based on the results of table 8 - table 11, table 12 posts a recalculation of both the direct negative influence brought by the damage of the Great East Japan Earthquake and the positive mediation effect through

Table 8. Second Stage Analysis on Self-rated Health Using Big Earthquakes Data

|                               | Model 1        | Model 2         | Model 3          | Model 4        |
|-------------------------------|----------------|-----------------|------------------|----------------|
| Severely damaged area         | -0.516 (0.424) | -0.708 (0.374)* | -0.309 (0.144)** | -0.884 (0.587) |
| Particularized trust          | 2.536 (1.375)* |                 |                  |                |
| Network : daily contacts      |                | 1.737 (0.754)** |                  |                |
| Network : group participation |                |                 | 1.087 (0.239)*** |                |
| Social capital                |                |                 |                  | 2.26 (1.314)*  |

Note. \*  $p < 0.1$ , \*\*  $p < 0.01$ , \*\*\*  $p < 0.001$ . For reasons of space, the coefficient values of the other explanatory variables are omitted.

The other explanatory variables are : age, gender, education, household income, marriage, occupation, duration of residence, housing, year dummy.

Table 9. Second Stage Analysis on Life Satisfaction using Big Earthquakes Data

|                               | Model 1          | Model 2          | Model 3          | Model 4          |
|-------------------------------|------------------|------------------|------------------|------------------|
| Severely damaged area         | -0.174 (0.202)   | -0.408 (0.234)*  | -0.058 (0.104)   | -0.345 (0.221)   |
| Particularized trust          | 1.587 (0.487)*** |                  |                  |                  |
| Network : daily contacts      |                  | 1.395 (0.452)*** |                  |                  |
| Network : group participation |                  |                  | 0.859 (0.164)*** |                  |
| Social capital                |                  |                  |                  | 1.338 (0.441)*** |

Note. \*  $p < 0.1$ , \*\*  $p < 0.01$ , \*\*\*  $p < 0.001$ . For reasons of space, the coefficient values of the other explanatory variables are omitted.

The other explanatory variables are : age, gender, education, household income, marriage, occupation, duration of residence, housing, year dummy.

Table 10. Second Stage Analysis on Self-rated Health Using Big and Small Earthquake Data

|                               | Model 1        | Model 2         | Model 3          | Model 4         |
|-------------------------------|----------------|-----------------|------------------|-----------------|
| Severely damaged area         | -0.088 (0.064) | -0.188 (0.096)* | -0.269 (0.126)** | -0.175 (0.089)* |
| Particularized Trust          | 0.398 (0.16)** |                 |                  |                 |
| Network : Daily Contacts      |                | 0.325 (0.229)   |                  |                 |
| Network : Group Participation |                |                 | 0.989 (0.24)***  |                 |
| Social Capital                |                |                 |                  | 0.344 (0.198)*  |
| Observations                  | 3,176          | 2,739           | 3,413            | 2,656           |
| Hansen J Statistic            | 0.2927         | 0.2573          | 0.1989           | 0.2709          |

Note. \*  $p < 0.1$ , \*\*  $p < 0.01$ , \*\*\*  $p < 0.001$ . For reasons of space, the coefficient values of the other explanatory variables are omitted.

The other explanatory variables are : age, gender, education, household income, marriage, occupation, duration of residence, housing, year dummy.



Table 11. Second Stage Analysis on Life Satisfaction Using Big and Small Earthquake Data

|                               | Model 1        | Model 2         | Model 3          | Model 4        |
|-------------------------------|----------------|-----------------|------------------|----------------|
| Severely damaged area         | 0.048 (0.096)  | -0.287 (0.178)  | -0.044 (0.097)   | -0.146 (0.146) |
| Particularized Trust          | 0.574 (0.29)** |                 |                  |                |
| Network : Daily Contacts      |                | 1.074 (0.429)** |                  |                |
| Network : Group Participation |                |                 | 0.817 (0.204)*** |                |
| Social Capital                |                |                 |                  | 0.801 (0.353)  |
| Observations                  | 3,099          | 2,701           | 3,367            | 2,594          |
| Hansen J Statistic            | 0.3170         | 0.4473          | 0.2277           | 0.3542         |

Note. \*  $p < 0.1$ , \*\*  $p < 0.01$ , \*\*\*  $p < 0.001$ . For reasons of space, the coefficient values of the other explanatory variables are omitted.

The other explanatory variables are : age, gender, education, household income, marriage, occupation, duration of residence, housing, year dummy.

Table 12. The Direct and Mediation Effects of the Great East Japan Earthquake on SRH and Life satisfaction : based on Table 6. – Table 11.

|                                |                  | Particularized Trust | Network :<br>Daily Contacts | Network :<br>Group Participation | Social Capital |
|--------------------------------|------------------|----------------------|-----------------------------|----------------------------------|----------------|
| Table8<br>(SRH)                | Direct Effect    | -0.516               | -0.708                      | -0.309                           | -0.884         |
|                                | Mediation Effect | 0.522                | 0.641                       | 0.243                            | 0.870          |
|                                | Total            | 0.006                | -0.067                      | -0.066                           | -0.014         |
| Table9<br>(Life Satisfaction)  | Direct Effect    | -0.174               | -0.408                      | -0.058                           | -0.345         |
|                                | Mediation Effect | 0.327                | 0.515                       | 0.192                            | 0.515          |
|                                | Total            | 0.153                | 0.107                       | 0.134                            | 0.170          |
| Table10<br>(SRH)               | Direct Effect    | -0.088               | -0.188                      | -0.269                           | -0.175         |
|                                | Mediation Effect | 0.078                | 0.118                       | 0.222                            | 0.129          |
|                                | Total            | -0.010               | -0.070                      | -0.047                           | -0.046         |
| Table11<br>(Life Satisfaction) | Direct Effect    | 0.048                | -0.287                      | -0.044                           | -0.146         |
|                                | Mediation Effect | 0.113                | 0.389                       | 0.183                            | 0.301          |
|                                | Total            | 0.161                | 0.102                       | 0.139                            | 0.155          |

the rise of social capital, based on the most widely used, convenient method of Baron and Kenny (1986). As readers can see from Table12, the mediation effects are bigger than those of Direct Effects, possibly having enough influence to nearly eliminate negative effects on SRH away.

Regarding life satisfaction, the positive effect of mediation effect is very large. What this means is that if readers estimate the impact on the life satisfaction that an earthquake exerts without considering SC as an intermediate variable, the effect is likely to be biased considerably upwards.

It is empirically known that the coefficient values obtained by IV method are large in general, so these results may be observed with reservation. However, the results in Table 12 are very much strong evidence that the very powerful mediation effect does exist.

## Conclusions

The causal mediation/sensitivity analysis revealed three major points:

1. The earthquake did not affect residents' levels of trust, but influenced the frequency of daily contacts and group participation.
2. The earthquake improved SC levels and lowered SRH levels. However, SC improved SRH, thereby mitigating the negative effect of the earthquake on SRH by 50%.
3. The earthquake improved SC levels but did not affect life satisfaction. However, SC improved life satisfaction.

The instrumental variable estimation revealed the two major points:

1. Contrary to the results of the causal mediation/sensitivity analysis, the effects of Kanto Earthquake on SC were negative.
2. Regarding both SRH and life satisfaction, the effects of SC were positive and statistically significant. That is, we confirmed the causal relationship between SC and SRH and life satisfaction.

Our future studies will focus on the processes by

which the level of SC is determined in the short and long terms. However, further investigation on factors that affect the SC level and how it affects QOL is needed.

## References

- Aghabakhshi, H., Gregor, C., 2007. Learning the lessons of Bam: The role of social capital. *Int. Soc. Work.* 50(3), 347–356. DOI: 10.1177/0020872807076048
- Aida, J., Kondo, K., Hirai, H., Subramanian, S. V., Murata, C., Kondo, N., Osaka, K. 2011. Assessing the association between all-cause mortality and multiple aspects of individual social capital among the older Japanese. *BMC Public Health*, 11(1), 499.
- Aida, J., Kawachi, I., Subramanian, V. S., Kondo, K., 2013. Disaster, social capital, and health. In Kawachi, I., Takao, S., Subramanian S. V. (Eds.), *Global Perspectives on Social Capital and Health*. Springer, New York, pp. 167–187.
- Aldrich, D. P., 2012. *Building Resilience: Social Capital in Post-disaster Recovery*. The University of Chicago Press, Chicago.
- Aldrich, D. P., Sawada, Y., 2014. The physical and social determinants of mortality in the 3.11 tsunami. *Soc. Sci. Med.* 124, 66–75.
- Allen, K. M., 2006. Community-based disaster preparedness and climate adaptation: Local capacity-building in the Philippines. *Disasters*. 30(1), 81–101. DOI: 10.1111/j.1467-9523.2006.00308.x
- Baker, D., Refsgaard, K., 2007. Institutional development and scale matching in disaster response management. *Ecol. Econ.* 63(2–3), 331–343. DOI: 10.1016/j.ecolecon.2007.01.007
- Baron, R. M., Kenny, D. A., 1986. The moderator–mediator variable distinction in social psychological research: Conceptual, strategic, and statistical considerations. *Journal of personality and social psychology*, 51(6), 1173. DOI:10.1037/2F0022-3514.51.6.1173
- Bound, J., Jaeger, D. A., Baker, R. M., 1995. Problems with instrumental variables estimation when the correlation between the instruments and the endogenous explanatory variable is weak. *JASA*. 90(430), 443–450. DOI: 10.1080/01621459.1995.10476536
- Buckland, J., Rahman, M., 1999. Community-based disaster management during the 1997 red river flood in Canada. *Disasters*. 23(2), 174–191.
- Chen, H., Wang, J., Huang, J., 2013. Policy support, social capital, and farmers’ adaptation to drought in China. *Glob. Environ. Chang.* 24, 193–202. DOI: 10.1016/j.gloenvcha.2013.11.010
- D’Hombres, B., Rocco, L., Suhrcke, M., McKee, M., 2010. Does social capital determine health? Evidence from eight transition countries. *Health Econ.* 19(1), 56–74. DOI: 10.1002/hec.1445
- Flores, E., Carnero, A. M., Bayer, A. M., 2014. Social capital and chronic post-traumatic stress disorder among survivors of the 2007 earthquake in Pisco, Peru. *Soc. Sci. Med.* 101, 9–17. DOI: 10.1016/j.socscimed.2013.11.012
- Folland, S., 2007. Does “community social capital” contribute to population health? *Soc. Sci. Med.* 64(11), 2342–2354. DOI: 10.1016/j.socscimed.2007.03.003
- Giordano, G. N., Björk, J., Lindström, M. 2012. Social capital and self-rated health—a study of temporal (causal) relationships. *Social science & medicine*, 75(2), 340–348.
- Hanibuchi, T., Kondo, K., Nakaya, T., Shirai, K., Hirai, H., & Kawachi, I. 2012. Does walkable mean sociable? Neighborhood determinants of social capital among older adults in Japan. *Health & place*, 18(2), 229–239.
- Hansen, L. P., 1982. Large sample properties of generalized method of moments estimators. *Econometrica*. 50(4), 1029–1054. DOI: 10.2307/1912775
- Harada, Hiroo. 2012. The Great East Japan Earthquake and Social Capital (in Japanese). *The Senshu Social Capital Review*, 3, 5–20.
- Hicks, R. Tingley, D., 2011. Causal mediation analysis. *Stata J.* 11(4), 1–15.
- Hikichi, H., Sawada, Y., Tsuboya, T., Aida, J., Kondo, K., Koyama, S., Kawachi, I., 2017. Residential relocation and change in social capital: A natural experiment from the 2011 Great East Japan Earthquake and Tsunami. *Science Advances*, 3(7), e1700426.
- Hommerich, C., 2012. Trust and subjective well-being after the Great East Japan Earthquake, tsunami and nuclear meltdown: Preliminary results. *IJJS*. 21(1), 46–64.
- Hurlbert, S. J., Beggs, J. J., Haines, A. V., 2001. Social network and social capital in extreme environments. In Lin, N., Cook, K. Burt, R. S. (Eds.), *Social Capital: Theory and Research*. Aldine de Gruyter, Hawthorne, New York, pp. 209–231.
- Ichida, Y., Hirai, H., Kondo, K., Kawachi, I., Takeda, T., Endo, H., 2013. Does social participation improve self-rated health in the older population? A quasi-experimental intervention study. *Soc. Sci. Med.* 94, 83–90. DOI: 10.1016/j.socscimed.2013.05.006
- Imai, K., Keele, L., Yamamoto, T., 2010. Identification, inference and sensitivity analysis for causal mediation effects. *Stat. Sci.* 25(1), 51–71. DOI: 10.1214/10-STS321
- Inaba, Y., 2005. Economic implications of social capital: How should we deal with externalities through our minds? *Plan. Admin.* 28(4), 17–22. (In Japanese).
- Inaba, Y., 2013. Natural disasters and social capital. *ECO · FORUM*, 28(4), 4–17.
- Ishino, T., Ogaki, M., Kamesaka, A., Murai, S., 2011. Effect of the Great East Japan Earthquake on subjective well-being. *Kyoto: Keio/Kyoto Global COE Discussion Paper Series*. [http://rcer.econ.rochester.edu/RCERPAPERS/rcer\\_588.pdf](http://rcer.econ.rochester.edu/RCERPAPERS/rcer_588.pdf)
- Islam, R., Walkerdén, G., 2014. How bonding and bridging networks contribute to disaster resilience and recovery on the Bangladeshi coast. *Int. J. Disaster Risk Reduct.* 10, 281–291. DOI: 10.1016/j.ijdr.2014.09.016
- Kawachi, I., Takao, S., Subramanian, S. V., 2013. *Global Perspectives on Social Capital and Health*. Springer, New York.
- Kim, D., Baum, C. F., Ganz, M. L., Subramanian, S. V., Kawachi, I., 2011. The contextual effects of social capital on

- health: a cross-national instrumental variable analysis. *Soc. Sci. Med.* 73(12), 1689–1697. DOI: 10.1016/j.socscimed.2011.09.019
- Klinenberg, E., 2002. *Heat Wave: A Social Autopsy of Disaster in Chicago*. The University of Chicago Press, Chicago.
- Koh, H. K., Elqura, L. J., Judge, C. M., Stoto, M. A., 2008. Regionalization of local public health systems in the era of preparedness. *Annu. Rev. Public Health.* 29, 205–218. DOI: 10.1146/annurev.publhealth.29.020907.090907
- Levac, J., Toal-Sullivan, D., O’Sullivan, T. L., 2012. Household emergency preparedness: A literature review. *J. Commun. Health.* 37(3), 725–733. DOI: 10.1007/s10900-011-9488-x
- Matsubayashi, T., Sawada, Y., Ueda, M. 2013. Natural disasters and suicide: Evidence from Japan. *Social Science & Medicine*, 82, 126-133.
- McGinnis, J. M., Williams-Russo, P., Knickman, J. R. 2002. The case for more active policy attention to health promotion. *Health affairs*, 21(2), 78-93.
- Mohan, J., Twigg, L., Barnard, S., Jones, K. 2005. Social capital, geography and health: a small-area analysis for England. *Social science & medicine*, 60(6), 1267-1283.
- Murayama, H., Fujiwara, Y., Kawachi, I. 2012. Social capital and health: a review of prospective multilevel studies. *Journal of epidemiology*, 1203140304-1203140304.
- Nakagawa, Y., Shaw, R., 2004. Social capital: A missing link to disaster recovery. *Int. J. Mass Emerg. Disasters.* 22(1), 5–34.
- National Research Institute for Earth Science and Disaster Resilience.2012. Kanto Daishinsai no Gaiyo (Overview of the Great Kanto Earthquake). Retrieved November 8, 2021, from Web site : <https://dil.bosai.go.jp/disaster/1923/kantoeq/kaisetsu.html>
- Reininger, M. B., Rahbar, H. M., Lee, J. M., Chen, Z., Alam, R. S. Pope, J., Adams, B., 2013. Social capital and disaster preparedness among low income Mexican Americans in a disaster prone area. *Soc. Sci. Med.* 83, 50–60. DOI: 10.1016/j.socscimed.2013.01.037
- Riumallo-Herl, C. J., Kawachi, I., Avendano, M. 2014. Social capital, mental health and biomarkers in Chile: assessing the effects of social capital in a middle-income country. *Social science & medicine*, 105, 47-58.
- Ronconi, L., Brown, T. T., Scheffler, R. M., 2012. Social capital and self-rated health in Argentina. *Health Econ.* 21(2), 201–208.
- Schultz, J., O’Brien, A. M., Tadesse, B., 2008. Social capital and self-rated health: Results from the US 2006 social capital survey of one community. *Soc. Sci. Med.* 67(4), 606–617. DOI: 10.1016/j.socscimed.2008.05.002
- Shimada, G., 2015. The Role of Social capital after Disasters: An Empirical Study of Japan based on Time-Series-Cross-Section (TSCS) Data from 1981 to 2012. *Int. J. Disaster Risk Reduct.* DOI: 10.1016/j.ijdr.2015.09.004
- Solnit, R., 2009. *A Paradise Built in Hell: The Extraordinary Communities that Arise in Disaster*. Penguin Books, London.
- Tiefenbach, T., Kohlbacher, F., 2015. Happiness in Japan in times of upheaval: Empirical evidence from the national survey on lifestyle preferences. *J. Happiness Stud.* 16(2), 333–366. DOI: 10.1007/s10902-014-9512-9
- Toya, H., 2014. Long-term impacts on the macro economy of the natural disasters: Focusing on the influence of social capital. In Sawada Y. (Ed.), *Megadisasters, Risks, and Economy*. Nikkei Publishing, Tokyo, 79–102.
- Weil, F., Lee, R. M., Shihadeh, S. E., 2011. The burdens of social capital: How socially-involved people dealt with stress after Hurricane Katrina. *Soc. Sci. Res.* 41, 110–119. DOI: 10.1016/j.ssresearch.2011.06.006
- Williamson, T. 2002. Sprawl, politics, and participation: A preliminary analysis. *National Civic Review.* 91(3), 235-244.
- Wind, T. R., Komproe, I. H., 2011. The mechanisms that associate community social capital with post-disaster mental health: A multilevel model. *Soc. Sci. Med.* 75, 1715–1720. DOI: 10.1016/j.socscimed.2012.06.032
- Yamamura, E., 2010. Effects of interactions among social capital, income and learning from experiences of natural disasters: A Case Study from Japan. *Reg. Stud.* 44(8), 1019–1032. DOI: 10.1080/00343400903365144
- Yamamura, E., Tsutsui, Y., Yamane, C., Yamane, S., Powdthavee, N., 2015. Trust and happiness: Comparative study before and after the Great East Japan Earthquake. *Soc. Indic. Res.* 123(3), 919–935. DOI: 10.1007/s11205-014-0767-7

# Four Farmers' Expedition: A Review of the *Shell* Case

XU, Alison

## 1. Introduction

A Dutch court made history in January 2021 by rendering a judgment holding that the Nigerian subsidiary company of Shell, a global group of energy and petrochemical companies, was liable for several oil spillages polluting the arable land and water in the Niger delta, endangering the lives of more than 30 million residents. In the judgment, the court also ordered both Shell's parental and subsidiary companies to install a leak detection system to avoid future leakages. Again, in a related class action in May 2021, the court issued the first instance decision that ordered Royal Dutch Shell (RDS), the Dutch-English parental company, to cut its global CO<sub>2</sub> emissions by 45% at the end 2030, relative to 2019 levels, across both its own operations' emissions and end-users' emissions.<sup>(1)</sup> Hereinafter referred to as *Shell*, the cases include several different litigation stages which span over 10 years. Both decisions rendered in January and May are widely discussed and commented upon by environmentalists, international law scholars and practitioners.<sup>(2)</sup> They represent successful, even if only provisional at this stage, attempts that the parental companies could be held accountable for overseas subsidiary companies' wrongful acts causing environmental damages, thereby forcing multinationals, especially polluting

corporations, to make a full pledge to fight climate change.

What preceded the climate change litigation,<sup>(3)</sup> which was launched in 2018 and decided by the first-instance court in May 2021, was the tort litigation brought by four Nigerian farmers under environmental NGOs' support against Shell Nigeria over damages caused by oil spills that took place between 2004 and 2007. Litigation in the Netherlands was initiated in 2008. The lengthy court procedure took more than a decade to finally have the prospect of coming to an end, with a provisional decision rendered by The Hague Court of Appeal in January 2021 in favour of Nigerian victims. This is, however, not an easy victory. Many interesting legal aspects can be picked up from the storyline.

## 2. *Milieudefensie et al. v. Royal Dutch Shell plc.*<sup>(4)</sup>

### 2.1 The Origins

The Royal Dutch Shell (hereinafter RDS) is the parent company of the Shell group. Established in the UK, it is headquartered in The Hague, the Netherlands; thus, it is often referred to as a Dutch-Anglo company. Shell has long been conducting oil extraction activities in Nigeria, and its local operations are mainly managed by the Shell Petroleum Development

(1) *Milieudefensie et al. v. Royal Dutch Shell plc.* ECLI:NL:RBDHA:2021:5339, 5.3.

(2) The cases appeared in many international law blogs and gained wide media coverage, to name only a few, Daniel Boffey, 'Court orders Royal Dutch Shell to cut carbon emissions by 45% by 2030' *The Guardian* (Brussel, 26 May 2021); David Vetter, 'Monumental Victory: Shell Oil Ordered To Limit Emissions In Historic Climate Court Case' *The Forbes* (26 May 2021); Xandra Kramer & Ekaterina Pannebakker, 'Shell litigation in the Dutch courts – milestones for private international law and the fight against climate change' (*Conflict of Law.Net*, 26 May 2021) <<https://conflictoflaws.net/2021/shell-litigation-in-the-dutch-courts-milestones-for-private-international-law-and-the-fight-against-climate-change/>> accessed 25 Nov 2021; Wubeshet Tiruneh, 'Holding the Parent Company Liable for Human Rights Abuses Committed Abroad: The Case of the *Four Nigerian Farmers and Milieudefensie v. Shell*' (*EJIL:Talk!*, 19 Feb 2021) <<https://www.ejiltalk.org/holding-the-parent-company-liable-for-human-rights-abuses-committed-abroad-the-case-of-the-four-nigerian-farmers-and-milieudefensie-v-shell/>> accessed Oct 20, 2021.

(3) Milieudefensie, 'Overview of legal documents climatecase against Shell' (*Milieudefensie*, 12 May 2021) <<https://en.milieudefensie.nl/news/overview-of-legal-documents-climatecase-against-shell>> accessed 20 Oct 2021.



Company of Nigeria (hereinafter SPDC), a Nigerian subsidiary company fully owned by Shell parent companies through subsidiaries.<sup>(5)</sup>

From 2004 to 2007, there were several oil spills from oil pipelines and oil installation, allegedly caused by inadequate security measures and defective equipment installed by the SPDC. As a result, the leaking oil damaged the underground soil and water in the neighbouring villages, causing harm to the environment of three villages, Oruma, Goi and Ikot Ada Udo in Nigeria. As representatives of the local communities, four local farmers proceeded to bring the case to the Netherlands. They are Barizza Manson Tete Dooh (hereby Dooh), resident of Goi, Fidelis Ayoro Oguru (hereby Oguru) and Alali EFANGA (hereby Efanga) of Oruma, Friday Alfred Akpan (hereby Akpan) of Ikot Ada Udo.

A Dutch environmental organization, Milieudefensie (Friends of the Earth Netherlands), has also intervened since the early stage of the case, providing all-around support to the farmers, and it later became a claimant in the proceedings. Four farmers and Milieudefensie brought the case against Shell companies, including both SPDC and RDS, for their wrongful acts causing damages to the local Nigerian environment due to oil leakages before the court of the Hague in 2008.

## 2.2 Why a Dutch Court?

One may question why they have chosen a Dutch court. Consider the facts of the case: direct victims, the four farmers and the communities' interests that they represent, are of Nigerian origin; the wrongful acts alleged, e.g., undue maintenance of oil pipelines, also took place in the territory of Nigeria; one of the defendants, SPDC, is also Nigerian company incorpo-

rated under Nigerian law. It seems that all material facts of the case concern Nigeria rather than the Netherlands, apart from the Dutch nationality of Milieudefensie and RDS as joining claimant and defendant respectively. It is also self-evident that both the Milieudefensie becoming the joining claimant, and the nomination of RDS as the first defendant, are strategies made to assign a Dutch factor to the case.

This scenario is, to some extent, not unfamiliar in the context of international litigation as litigants, in particular victims, are likely to exploit the advantages of choosing a judicial system in favour of them. However, chances of success relying on this tactic are not as promising based on previous experiences. For example, victims allegedly suffered from the 2011 Fukushima Daiichi nuclear disaster had brought numerous civil and criminal litigations both in domestic and foreign courts.<sup>(6)</sup> Domestic courts, being Japanese courts in this case, are undoubtedly the natural venue of dispute resolution considering all the factual links.<sup>(7)</sup> However, a case is also brought before a U.S. court by American sailors claiming damages sustained from exposure to excessive radiation following the 2011 disaster.<sup>(8)</sup> Eventually, the U.S. court dismissed the case on the grounds of international comity,<sup>(9)</sup> the outcome of which is not surprising.

Therefore, what the claimants have pursued in this case is essentially risky, for it is likely that the court may not exercise jurisdiction due to the lack of substantial connection between the case and the forum. Several clues hint at possible reasons that might have helped mobilize the claimants to a Dutch court. First, it was mentioned in the first instance judgment delivered in 2013<sup>(10)</sup> that Milieudefensie had a sister organization founded in Nigeria, named Environmental Rights Action, who had intervened early in

(4) The case consists of six different litigations, which are referred to in 2021 judgement as cases a to f. Cases e and f, concerning Ikot Ada Udo, are still ongoing. The first stage of the proceeding is marked by the jurisdictional dispute which was decided in a judgment in 2009. The second stage includes the 2013 decision and the 2015 appeal decision focusing on the damages in Goi, while the 2021 decision concerns mainly Oruma.

(5) *Milieudefensie et al. v. Royal Dutch Shell plc*. ECLI:NL:RBDHA:2013:BY9845, 2.2.

(6) Fukushima on the globe, 'Plaintiffs suing over Fukushima nuclear disaster form nationwide network' (*Fukushima on the Globe*, 27 May 2015) <[http://fukushimaonthe globe.com/citizens\\_movement/litigation-movement/4402.html](http://fukushimaonthe globe.com/citizens_movement/litigation-movement/4402.html)> accessed 20 Oct 2021.

(7) For a recent paper documenting current progress, see Paul Jobin, 'The Fukushima Nuclear Disaster and Civil Actions as a Social Movement' (2020) 18 *The Asia-Pacific Journal* 1.

(8) Aaron Sheldrick, 'Japan's Tepco gets slapped with new U.S. lawsuit over Fukushima' *Reuters* (Tokyo, 24 August 2017).

(9) It is noted that a U.S. court was better not to exercise jurisdiction, see *Cooper v. Tokyo Elec. Power Co.* Case No: 12cv3032-JLS (JLB) 2019.

(10) *Milieudefensie et al. v. Royal Dutch Shell plc*. (n5), 2.9.

the investigation stage following the oil spill that occurred in Goi village before 2008.<sup>(11)</sup> It helped the Milieudefensie establish a close connection with the claimants for obtaining first-hand materials in relation to the leakages. Second, in recent decades, the Netherlands has gradually reformed its domestic law to facilitate the initiation of public interest litigations by empowering foundations to assume more roles as the protector of public interests<sup>(12)</sup> to the extent that the Hague receives a nickname of “legal capital of the world”. This time, it is not because the city is home to many international tribunals, including the International Court of Justice and International Criminal Court, but because of the pioneering approach undertaken by the court. Finally, the website of Milieudefensie refers briefly to the difficulties experienced by two of the claimant farmers who failed at attempting to bring their cases to a local court due to the lack of transparency in the Nigerian judicial process and the suspicion that powerful multinationals such as the Shell could in many ways delay the process.<sup>(13)</sup> Seeking a fair trial is perhaps what motivates the defendants to initiate a case before a Dutch court.

It is interesting to note in the Dutch proceedings that the reasons why a Dutch forum should be considered a suitable venue were not much argued or even brought up by the claimants; while the issue of jurisdiction was mainly disputed by the defendants.

### 2.3 The First Hurdle: Jurisdiction

The first issue facing the Hague court is whether it is competent to hear a dispute, and this amounts to the first legal issue debated heavily by the defendants. The ruling on jurisdiction was delivered in 2010, where the court rejected the defendants' claim.<sup>(14)</sup>

It was not much disputed whether a Dutch court can exercise jurisdiction over the first defendant, RDS, because it was considered domiciled in the Netherlands in which its head office located under Art. 2(1) and 60(1) of Brussels I Regulation.<sup>(15)</sup> However, SPDC, the Nigerian subsidiary company, claimed that the claimants had abused the civil procedure by bringing the litigation to a forum in which SPDC was not domiciled. For this purpose, Art. 7 of the Dutch Code of Civil Procedure was invoked as the rule for a court to derive international jurisdiction over a nondomiciled defendant. It states:

*“1. If legal proceedings are to be initiated by a writ of summons and a Dutch court has jurisdiction with respect to one of the defendants, then it has jurisdiction as well with respect to the other defendants who are called to the same proceedings, provided that the rights of action against the different defendants are connected with each other in such a way that a joint consideration is justified for reasons of efficiency.”*

There are two things worth noting concerning the court's reasoning on this matter. First, the court takes the general stance that abuse of procedural law can only be established in very exceptional circumstances, “in particular if a claim is based on facts and circumstances of which the claimants knew or should have known the (obvious) inaccuracy or on statements of which the claimants had to understand in advance. That these had no (any) chance of success and were therefore completely unsound”.<sup>(16)</sup> This perhaps explains at least in part the reason why both claimants did not explicitly present arguments concerning the jurisdiction issues<sup>(17)</sup> for any written statements could

(11) Reageer, ‘Godwin Ojo: “Why is Shell continuing their environmental racism?”’ (*Down To Earth Magazine*, 12 Dec 2015) <<https://downtoearthmagazine.nl/godwin-ojo-shell-environmental-racism/#respond>> accessed 25 Nov 2021.

(12) This is especially exemplified by Article 3:305a Dutch Civil Code, see Otto Spijkers, ‘Public Interest Litigation Before Domestic Courts in The Netherlands on the Basis of International Law - Article 3:305a Dutch Civil Code’ (*EJIL Talk!*, 6 Mar 2020) <<https://www.ejiltalk.org/public-interest-litigation-before-domestic-courts-in-the-netherlands-on-the-basis-of-international-law-article-3305a-dutch-civil-code/>> accessed 25 Nov 2021.

(13) Milieudefensie, ‘Frequently asked questions’ (*Milieudefensie*) <<https://en.milieudefensie.nl/shell-in-nigeria/frequently-asked-questions>> accessed 20 Oct 2020.

(14) *Milieudefensie et al. v. Royal Dutch Shell plc*. ECLI:NL:RBSGR:2009:BK8616.

(15) Council Regulation (EC) No 44/2001 on jurisdiction and the recognition and enforcement of judgments in civil and commercial matters on the law applicable to contractual obligations (Brussels I) [2001] OJ L12/1

(16) *Milieudefensie et al. v. Royal Dutch Shell plc*. (n14), 3.2.

(17) As mentioned, it is a risky move, but no claimants explicitly refer to this as a bold strategy.

be utilized by the defendants to support their invocation against the court's exercise of jurisdiction. Second, Art. 7 DCCP essentially requests a connection between the two defendants' actions so close that it justifies a joint treatment as a matter of efficiency.<sup>(18)</sup> The fact that the alleged acts took place outside the Netherlands "is not exceptional in Dutch case law and does not lead to a different opinion about sufficient coherence and effectiveness within the meaning of Art. 7 DCCP."<sup>(19)</sup> SPDC's claim was therefore dismissed.

Unsatisfied with the result, SPDC raised the point again in the appeal in which the same decision was upheld.<sup>(20)</sup> The question here is a crucial one that often poses difficulties when determining international jurisdiction in many cases of this kind. The Court of Appeal of The Hague's judgment in 2015 indeed allows such a possibility that a Dutch company can be targeted by claimants, who are usually victims to an environmental tort, as the "anchor defendant". It enables a local court to extend jurisdiction to a foreign entity that otherwise may not be subject to the forum's jurisdiction in the absence of such an anchor defendant. The link between the anchor defendant and the foreign entity needs to be proved to satisfy the efficiency consideration for applying this approach.<sup>(21)</sup>

Considering the prospective impact, this approach essentially gives rise to the promise that subsidiary companies to a multinational corporation are very likely to be exposed to the jurisdiction at the place where the parent company locates, a place that is usually from more economically advanced jurisdictions compared to the place where the subsidiary company is located. Furthermore, this is not a stand-alone case, but rather it, to some extent, has become an international trend in which courts tend to broadly interpret

the jurisdictional rules on joinder defendants for overseas environmental and human rights abuses.<sup>(22)</sup> Another recent example is the *Okpabi v Shell* case,<sup>(23)</sup> a class action Nigerian farmers instituted against both RDS and SPDC for causing oil pollution in the Niger Delta. The decision rendered in February 2021 by the UK Supreme Court also confirms that the English court has jurisdiction over overseas subsidiaries as a joinder defendant in the alleged claim.

A more nuanced issue is raised here and has been discussed in both key cases.<sup>(24)</sup> It asks whether a breach of duty of care owed by the parental company to its subsidiary company concerning the wrongful acts needs to be proved as a precondition for a court to exercise jurisdiction over the overseas joinders. This is preferred by the defendant groups in that it is invoked to avoid being subject to the jurisdiction at the place of the parental company. It is also worth noting that the arduous debate on the issue of duty of care at the stage of determining jurisdiction has been criticized by scholars because it makes the trial unnecessarily lengthy to even become a mini-trial on its own.<sup>(25)</sup> It needs to be clarified that a decision on jurisdiction, albeit referring to the doctrine of the duty of care is not equal to the finding of parental company's liability, for the latter is a matter of substantive law issue to be determined at a later stage.

## 2.4 The Question of Applicable Law: Why It Matters?

Once the first hurdle is cleared, the next question is to determine the substantive law applicable to the present dispute, i.e., the law governing the issue of liabilities of both RDS and SPDC. Section 4 of the 2013 first instance decision considers the question at length.<sup>(26)</sup> Potentially applicable laws in this case only

(18) *Milieudefensie et al. v. Royal Dutch Shell plc.* (n14), 3.5.

(19) *Ibid* (n14), 3.6.

(20) *Milieudefensie et al. v. Royal Dutch Shell plc.* ECLI:NL:GHDHA:2015:3586 (Gerechtshof Den Haag), in general 3.1-3.8.

(21) *Ibid*, 3.3-3.5.

(22) The *Shell* decision referred in many instances to relevant English authorities, see *ibid*, 3.2 & 3.6.

(23) *Okpabi and others v Royal Dutch Shell* [2021] UKSC 3.

(24) *Milieudefensie et al. v. Royal Dutch Shell plc.* (n20), 3.2.

(25) See Robert McCorquodale, 'Okpabi v Shell. The Supreme Court reverses the Court of Appeal and the High Court on jurisdictional hurdles in parent/subsidiaries cases' (*GAVC LAW*, 17 Feb 2021) <<https://gavclaw.com/2021/02/17/okpabi-v-shell-the-supreme-court-reverses-the-court-of-appeal-and-the-high-court-on-jurisdictional-hurdles-in-parent-subsidiaries-cases-guest-blog-by-professor-rob-ert-mccorquodale/>> accessed 25 Nov 2021; Ruth Cowley and others, 'UK Supreme Court clarifies issues on parent company liability in *Okpabi and others v Royal Dutch Shell Plc*' *Norton Rose Fulbright* (UK, Feb 2021).

(26) *Milieudefensie et al. v. Royal Dutch Shell plc.* (n5), 4.10-11.

include Dutch law and Nigerian law, with the former preferred by the claimants and the latter favoured by the defendants.

The general conflict of laws principle on tort choice of law would hinge on the place in which such damages have occurred, Nigeria in this case.<sup>(27)</sup> Thus, Nigerian law should be applied to determine the substantive responsibilities of the companies unless under exceptional circumstances where applying Nigerian law would be incompatible with the public policy of the Dutch law.<sup>(28)</sup> As a former colony of the UK, English common law is regarded as highly authoritative in the Nigerian legal system and needs to be assessed as a source of Nigerian law. Therefore, it becomes evident that both the court of the first instance and the appeal court conducted significant analysis on the common law duty of care doctrine to establish the tort of negligence in the present case.<sup>(29)</sup>

The application of Nigerian law here again triggers an old-fashioned predicament facing private international lawyers. On the one hand, the cosmopolitan view of private international law encourages domestic courts to consider the application of foreign law whenever possible, as it indicates the neutrality of the forum in handling disputes with foreign factors. On the other hand, the real-life application of foreign legal rules unfamiliar to local judges is not always a sweet experience. In this case, the Dutch judgment, albeit deserving celebration merely out of environmental consciousness, is also criticized by English law scholars for not properly construing the common law duty of care when establishing the parent company's liability.<sup>(30)</sup> Comparatively, the liability on the part of the subsidiary company, SPDC, is easier to determine as the court can rely on Nigerian statutory provi-

sions,<sup>(31)</sup> but the part on the parental company, RDS, proves to be difficult since it needs to engage in a detailed discussion of common law authorities. It is not simply a question of familiarity with an external legal system different from the forum or a matter of contesting a judiciary's competency, but rather it is difficult because of the specific characteristics of common law.

The legal doctrines in common law are ever-evolving. "It (common law) comes from a patchwork of overlapping decisions and legislative initiatives that transcend borders, both territorial and doctrinal."<sup>(32)</sup> It then raises the fundamental question of whether it is, in fact, possible to expect a high degree of accuracy when applying common law doctrine in a civil law court. In this case, Nigerian law is applied as the governing law, but the extent to which new English authorities after 1960<sup>(33)</sup> should be considered part of Nigerian legal sources is in doubt. It is even more problematic if the new English authorities are controversial, which is again not very rare. Would it be too much to ask civil law judges to keep up with all recent developments of relevant common law doctrines and, to understand the technicalities and intricacies of applying different approaches to construe relevant doctrine properly? Engaging a question as such may even discourage any future attempts to consider the application of common law in a non-common law jurisdiction.

Even if the Dutch court might have wrongfully construed a few common law authorities in this case, there would not be severe harm since the Netherlands is not a strictly precedent-based jurisdiction. Whatever analysis conducted by this court on a foreign legal system will unlikely, at least doctrinally, be binding on

<sup>(27)</sup> Since the tortious act, occurred in 2004, falls outside the temporal scope of relevant EU legal instrument, the Dutch domestic conflict of law rules apply to determine the choice of law issue, but there is no essential difference in the results applying different instruments, see Council Regulation (EC) No 864/2007 on the law applicable to non-contractual obligations (Rome II) [2007] OJ L199/40.

<sup>(28)</sup> Section 10:6 or 10:7 of the Dutch Civil Code.

<sup>(29)</sup> *Milieudefensie et al. v. Royal Dutch Shell plc.* (n5) 4.27-4.42; *Milieudefensie et al. v. Royal Dutch Shell plc.* ECLI:NL:GHDHA:2021:1825, 3.18-3.28.

<sup>(30)</sup> Specially, it is contended that the Dutch court misread *Lungowe v Vedanta*, *Caparo v Dickman*, in their reasoning, see Lucas Roorda, 'Broken English: a critique of the Dutch Court of Appeal decision in *Four Nigerian Farmers and Milieudefensie v Shell*' (2021) 12 *Transnational Legal Theory* 144.

<sup>(31)</sup> *Milieudefensie et al. v. Royal Dutch Shell plc.* (n29), Section 6.

<sup>(32)</sup> Roorda (n30), 150.

<sup>(33)</sup> After Nigeria gained independence in 1960, the reference to new English authorities would not be compulsory. Similar situations can also be found in other jurisdictions with common law tradition, e.g., Hong Kong SAR.



prospective cases. Therefore, it reserves room for any corrections and adjustments to be undertaken by the judiciary in the future. Nonetheless, an appreciation of recent international trends in the relevant area of law has certainly proven to be beneficial, especially when a domestic court is taking up a tough task such as this.

### 3. Takeaways

To conclude, there are certainly many lessons that can be learned from this high-profile case, and the following section only points to a few.

#### The question of delayed justice

The litigation in the Dutch court lasted for over 10 years, and by the time decisions concerning damages sustained by two out of three villages were delivered in January 2021, two out of the original four farmer claimants had already passed away. Their respective heirs superseded their roles in the litigation when the winning judgments were handed down. The sister-like class action on similar matters in the UK also has a lengthy procedure. It is encouraging to see a winning judgment at last, for this also opens a door for other victims facing similar situations to consider alternative judicial redress. However, as the saying goes, “justice delayed is justice denied”. Justice also needs to be delivered in time, while this appears to be an extremely complicated task, perhaps for all environment-related disputes. In addition, preventative measures rather than restorative measures truly make a long-term difference in advancing environmental awareness and protection. Given the significant impacts of this case, it is hopeful that multinational companies can commit to their responsibilities against environmental torts.

#### The role of environmental organizations

Milieudefensie has undoubtedly played a key role in supporting individual claimants throughout the arduous procedure and in seeing things taking a positive turn. They hailed for victory after obtaining the awards earlier this year, but it was even more striking to see that they went even further to challenge the Shell companies in the climate change litigation, which also seemed to produce some good provisional results. The role of environmental organizations of this sort is an underdeveloped topic on questions including how to strike a balance between the rights and respon-

sibilities of these organizations. They are certainly increasingly empowered, at least in some jurisdictions, as being the key actors in the public interest litigation regime. If, however, they were to assume a greater role in fighting global issues such as climate change, crucial questions such as business organization and governance structure need to be brought to the front stage and be critically assessed to ensure accountability.

#### Judicial activism

The Dutch court indeed exhibited great judicial activism in the present case. This raises concerns on whether the decision would open the floodgate of environmental litigations of a similar kind. It becomes even more impactful if we jointly consider the global communities’ attempts to build a recognition and enforcement mechanism for foreign judgments. The ideal is to enable judgments to flow across borders with fewer limitations. Under this scheme, a jurisdiction with active judicial practice can achieve a lot more on a wider scale than what one single jurisdiction can achieve, because judgments from more active jurisdictions could be recognised and enforced in a less active forum, achieving what could not have been done by the latter forum through a pure domestic procedure. Whether other jurisdictions will follow suit is not easy to speculate at this point, but the driving forces are there already. As discussed before, the judicial approach undertaken to achieve this effect is still open to question, e.g., whether a common-law analysis is sustainable in the future. However, to say the very least, this is a good example for those having difficulties finding a promising forum when their domestic judicial system may prevent the delivery of justice in any way. Undoubtedly, the Netherlands will see more similar cases of this kind in the coming future.

#### Endnote

1. Aaron Sheldrick, ‘Japan’s Tepco gets slapped with new U.S. lawsuit over Fukushima’ *Reuters* (Tokyo, 24 August 2017).
2. Council Regulation (EC) No 44/2001 on jurisdiction and the recognition and enforcement of judgments in civil and commercial matters on the law applicable to contractual obligations (Brussels I) [2001] OJ L12/1.
3. Council Regulation (EC) No 864/2007 on the law applicable to non-contractual obligations (Rome II) [2007] OJ L199/40.
4. *Cooper v. Tokyo Elec. Power Co.* Case No: 12cv3032-

- JLS (JLB) 2019.
5. Daniel Boffey, 'Court orders Royal Dutch Shell to cut carbon emissions by 45% by 2030' *The Guardian* (Brussel, 26 May 2021).
6. David Vetter, 'Monumental Victory: Shell Oil Ordered To Limit Emissions In Historic Climate Court Case' *The Forbes* (26 May 2021).
7. Fukushima on the globe, 'Plaintiffs suing over Fukushima nuclear disaster form nationwide network' (*Fukushima on the Globe*, 27 May 2015) <[http://fukushimaontheglobe.com/citizens\\_movement/litigation-movement/4402.html](http://fukushimaontheglobe.com/citizens_movement/litigation-movement/4402.html)> accessed 20 Oct 2021.
8. Lucas Roorda, 'Broken English: a critique of the Dutch Court of Appeal decision in *Four Nigerian Farmers and Milieudefensie v Shell*' (2021) 12 *Transnational Legal Theory* 144.
9. *Milieudefensie et al. v. Royal Dutch Shell plc*. ECLI:NL:RBSGR:2009:BK8616.
10. *Milieudefensie et al. v. Royal Dutch Shell plc*. ECLI:NL:RBDHA:2013:BY9845.
11. *Milieudefensie et al. v. Royal Dutch Shell plc*. ECLI:NL:GHDHA:2015:3586 (Gerechtshof Den Haag).
12. *Milieudefensie et al. v. Royal Dutch Shell plc*. ECLI:NL:RBDHA:2021:5339.
13. *Milieudefensie et al. v. Royal Dutch Shell plc*. ECLI:NL:GHDHA:2021:1825.
14. Milieudefensie, 'Frequently asked questions' (*Milieudefensie*) <<https://en.milieudefensie.nl/shell-in-nigeria/frequently-asked-questions>> accessed 20 Oct 2020.
15. *Okpabi and others v Royal Dutch Shell* [2021] UKSC 3.
16. Otto Spijkers, 'Public Interest Litigation Before Domestic Courts in The Netherlands on the Basis of International Law - Article 3.305a Dutch Civil Code' (*EJIL Talk!*, 6 Mar 2020) <<https://www.ejiltalk.org/public-interest-litigation-before-domestic-courts-in-the-netherlands-on-the-basis-of-international-law-article-3305a-dutch-civil-code/>> accessed 25 Nov 2021.
17. Paul Jobin, 'The Fukushima Nuclear Disaster and Civil Actions as a Social Movement' (2020) 18 *The Asia-Pacific Journal* 1.
18. Reageer, 'Godwin Ojo: "Why is Shell continuing their environmental racism?"' (*Down To Earth Magazine*, 12 Dec 2015) <<https://downtoearthmagazine.nl/godwin-ojo-shell-environmental-racism/#respond>> accessed 25 Nov 2021.
19. Robert McCorquodale, '*Okpabi v Shell*. The Supreme Court reverses the Court of Appeal and the High Court on jurisdictional hurdles in parent/subsidiaries cases' (*GAVC LAW*, 17 Feb 2021) <<https://gavclaw.com/2021/02/17/okpabi-v-shell-the-supreme-court-reverses-the-court-of-appeal-and-the-high-court-on-jurisdictional-hurdles-in-parent-subsubsidiaries-cases-guest-blog-by-professor-robert-mccorquodale/>> accessed 25 Nov 2021.
20. Ruth Cowley and others, 'UK Supreme Court clarifies issues on parent company liability in *Okpabi and others v Royal Dutch Shell Plc*' *Norton Rose Fulbright* (UK, Feb 2021).
21. Wubeshet Tiruneh, 'Holding the Parent Company Liable for Human Rights Abuses Committed Abroad: The Case of the *Four Nigerian Farmers and Milieudefensie v. Shell*' (*EJIL:Talk!*, 19 Feb 2021) <<https://www.ejiltalk.org/holding-the-parent-company-liable-for-human-rights-abuses-committed-abroad-the-case-of-the-four-nigerian-farmers-and-milieudefensie-v-shell/>> accessed Oct 20, 2021.
22. Xandra Kramer & Ekaterina Pannebakker, 'Shell litigation in the Dutch courts – milestones for private international law and the fight against climate change' (*Conflict of Law. Net*, 26 May 2021) <<https://conflictoflaws.net/2021/shell-litigation-in-the-dutch-courts-milestones-for-private-international-law-and-the-fight-against-climate-change/>> accessed 25 Nov 2021.

# 『選択要決』校註稿

## 付伝写過程考

### 緒言

鎌倉時代成立の『選択要決』一卷（以下、『要決』と略す）は、江戸中期以来の版本とそれを底本とした明治時代の浄土宗全書本によつて流布した。しかし、これらが改竄された悪本であることは学界周知の事実である。そのため研究では、古態を留めた『要決』写本を用いなければならない。

これまで存在が知られていた『要決』写本は神興本と養樂寺本、そして聖徳寺本の三つのみである。しかし、神興本は関東大震災で焼失したらしく、<sup>(1)</sup>養樂寺本は所在不明であり、<sup>(2)</sup>聖徳寺本は同寺に現存しているらしいものの容易に閲覧できない。そのため、稿者のような一般の研究者が閲覧できる『要決』写本は全くなかったと言つてよい。

また、幸いに神興本と養樂寺本は翻刻が公刊されているが、明らかな誤脱衍倒も散見され、何れも定本とし得ない。『要決』諸写本を校勘した校本は未だ嘗て公表されたことがなかった。

稿者は一昨年の夏、前稿「『選択要決』撰者弁証」（本誌前号、2021。以下、「前稿」と称す）の執筆過程で、仏教大学付属図書館浄教寺文庫に学界未知の『要決』写本があることを知った。その複写物を請求入手したところ、同本が改竄された版本の転写本などなく、しかも誤脱の少ない善本だと確信するに至った。同本の校註を作成公表することにした所以である。

（1）神興本は南条文雄の蔵本であった。そして「南条文雄先生年譜」（『大谷学報』九、一、1928）の大正十二年（1923）条に、「九月一日関東大地震、家屋書庫不<sub>レ</sub>余<sub>一</sub>」

一物「歸<sub>二</sub>于鳥有<sub>一</sub>」とある。

（2）養樂寺本は、昭和四十二年刊行の『国書総目録』第五卷（岩波書店）に同寺蔵として著録された。河住玄『古本選択要決／一枚起請文異文攷』（欣求庵、1977）によれば、同目録によつて養樂寺に写本のあることを知った河住が同寺に問い合わせたところ、同本はすでに同朋大学図書館に寄贈したとの回答があり、同寺住職の紹介により複写物を手に入れたという。そこで稿者が同朋大学に問い合わせたところ、図書館と仏教文化研究所に『要決』写本の架蔵は確認できないとのことであった。

森 新之介

### 『要決』体例

『要決』は内題尾題の間に六千字弱の本文があり、その本文の約九割を十箇条が占める。

各条はその条数一字と「者」の凡そ二字から始まる。二字の直後に難者の言を引き、「<sub>云</sub>」または「<sub>上</sub>」で難破引用の結びを示し、それを撰者が決択する。なお、冒頭二字の直後以外でも難者の言を引く条もある。冒頭二字を除いた各条は難破と決択から成るため、第某条を第某難と第某決に細分できる。そして、各条の末尾には「<sub>応知</sub>」二字がある。

十箇条の前後にも文章があり、本稿では前者を「序文」、後者を「結文」とそれぞれ仮称する。

### 浄教寺本解題

本項では、本校註で底本とする浄教寺本『要決』の書誌などについて整理する。なお同本は昨年八月卅日、仏教大学図書館デジタルコレクション（仏教大学図書館所蔵・貴重書等アーカイブ）で全画像が公開された（<https://uid.bukkyo-u.ac.jp>）

/collections/titles/senchakuyoketsu1kan/。

一、蔵者…多聞山燈籠堂浄教寺（京都府京都市、浄土宗）旧蔵、仏教大學付属図書館浄教寺文庫現蔵（請求記号「浄教寺二三」）。

一、員数…一卷一冊。

一、法量…天地廿八・三糲、左右十九・七糲。

一、表紙…表裏ともに朽葉色無地、原装。表表紙左上に双郭書き題簽「選擇集要決全」あり、本文と書体がやや異なるも恐らく同筆。<sup>①</sup>表表紙の下部四分の一ほどと題簽の下端は欠損。表表紙の右上に貼られた請求記号簽は古めかしく、降つても昭和中期のものか。欠損の大きい表表紙のみ、新しい白厚紙を挟ませて再線装するという補修が施されている。表表紙の右下に、白厚紙と跨らせて新しい請求記号簽と図書管理用ラベルが重ね貼りされている。

一、装訂…五針眼線装。白い綴じ糸は新しく、恐らく補修時のもの。

一、本文…料紙は楮紙、打ち紙あり。無辺無界。凡そ十六丁、丁付なし。半丁十二行、一行十六字。すべて一筆、墨書のみ。正字多く、略字少なし。書体は楷行。全文に返り点あり、ほぼ全文に送り仮名あり、稀に振り仮名あり、句読点なし。稀に校異訂正あり。虫損と上部欄外の水濡れもあるも、本文はすべて判読可能。大尾に同筆後補の撰号「源智」あり。

一、奥書…なし。同筆は浄教寺文庫蔵の写本に未だ発見できず。書写時期は状態や書体などから考えて江戸中後期か。

一、印記…第一丁表の右上に単郭正方形縦二行陽刻濃朱印「佛教大學／藏書之印」あり、同丁表の右下に単郭正円形陽刻薄朱印「浄教寺」あり。また、第十六丁裏の左下に単郭縦一行陽刻朱印「佛教大學所蔵」あり、その右下に横一行黒印「401824」あり。

前述の如く、同本の文字はすべて一筆である。ただし、画像では識別困難ながら、現物では墨色の濃淡に異同がある。すなわち、本文漢字はすべて墨色が濃く、淡いように見える箇所はただ掠れているだけである。他方、本文漢字の右傍や直下にある付訓返り点は、本文漢字と同じ濃さのものだけでなく明らかにそれより淡いものも混在している。

結論から言えば、淡墨箇所はすべて同筆後補であろう。例えば、第九決での『選択集』からの引文に「緯」があり、その右傍に付訓「コト、ス」があり左下に返り点「二」がある（二二ウ第四行）。これを細見すると、「緯」の糸偏と旁の「辛」は濃墨で、旁のウ冠と付訓「コト、ス」、返り点「二」は淡墨であり、濃墨「辛」の上端が淡墨ウ冠と重なっている。書写者は当初「緯」の旁を「宰」でなく「辛」に誤記してしまい、本文すべての書写を終えてからやや後、淡墨で付訓「コト、ス」と返り点「二」を加える時に「緯」のウ冠の欠落を知り、同じく淡墨でこれに加えて誤記を修正した、と考えられる。

これと関連して、大尾にある撰号「源智」二字はそれ以前の本文と完全に同筆ながら、それ以前の本文と異なり墨色が淡い。「源智」二字は同一書写者によるやや後の加筆であろう。そして「源智」二字だけがやや後に加筆されたのは、この二字が親本になかったことを示しているよう。

また、同本には十箇所の校異訂正がある。

①二才第七行

懸 述義<sup>云</sup>然此集中云惣集念仏要文剩述

②二ウ第六ノ第七行

文未云秘於義其旨出何段其義含何文言不明文智者所恥也<sup>。故</sup>。

③三才第七行

能令瓦礫<sup>下</sup>変金成<sup>上</sup>高才則為本願之機

④六才第二行

引經<sup>。釈</sup>之現文委細分明釈成其旨者文親

⑤七才第五行

相為自力為他<sup>。力</sup>。悲哉先德引諸仏誠言而

⑥九才第十一

笑。者每向嘆之粗尋漢家本朝先蹤道綽禪

⑦九ウ第七行

志恵心先徳勸外儀雖畢<sup>。興</sup>心念常存念々

⑧一一才第七行

裂<sup>サ</sup>。惟還自焼屢審察悔而取。至当世宗義者



⑨ 一三才第一行

幾多移浄土<sup>甲</sup>坐三々芙蓉利生定感悲喜

⑩ 一五ウ第四行

之跡探往生要集之趣念仏為諸行為傍<sup>正</sup>

これら十箇所の第三はただ倒文を修正しただけのものであり、第四と第五、第九、第十はただ脱字を補っただけのものであるため、怪しむに足りない。問題はそれら以外の第一と第二、第六、第七、第八の五つである。

例えば第一者は一見すると、正文の「慙」は誤りで欄外の「慙」が正しい、という註記かのようなのである。しかし、ここは『選択集』末尾からの引用であるため、明らかに「慙」が正しい。正文の「慙」は「慙」の俗字「慙」の誤字であろう。また、第二者でも意味が通るのは次行の「攸」より正文の「段」であるが、他方、第六者と第八者で意味が通るのは正文の「嘆」「取」でなく欄外の「笑」「裂」である。

これは恐らく、小圈点が左傍にあれば正文の字が正しく、右傍にあれば欄外の字が正しいということであろう。ただし、第七者は正文の「畢」の左傍に小圈点があり、右傍の「異」が明らかに正しいが、正文の字の左右に小圈点と異字がある箇所はここだけであるため、例外と見るべきである。

第一、第二者は親本にあった誤字を修正しつつ、親本の誤字を註記したということであろう。ただし、このような小圈点を左傍に施しての異字の註記は同本で他に見出されない。当初は親本の誤字を註記しつつ修正したが、煩わしく感じられて第三丁以降は註記なしで修正していったということであろうか。

第六者は「嘆」と誤写してしまったが草体で字形が近似する「咲」すなわち「笑」に修正すべきことを意味し、そして第八者は親本のサイらしき付訓に惑わされて「取」と誤写してしまったが「裂」に修正し「サク」と付訓すべきことを意味してしよう。

なお、稿者にとって最も理解し難いことの一つは、何故浄教寺本『要決』がこれまで知られず用いられずにきたのである。浄教寺文庫は「故小林円達師寄託図書」であり、小林円達は明治卅九年（1906）に浄教寺を董し昭和卅二年（1957）に没した<sup>③</sup>。また、前述の如く同本には仏教大学の蔵印があり、同大が仏教専門学校から改組設立されたのは昭和廿四年である。そのため、同

本が同大に寄託された時期は昭和廿四乃至卅二年であろう。同本表紙の右上に貼られた請求記号箋もこの時期のものと見て大過ない。

昭和八年に田中智肇が翻刻公刊した田版について、三年後の十一年に三田全信は「今幸に写本は刊本より古体を存して、比較的良本とすとも既に異流者の手によつて眼目とす可き箇所が改変されある以上他は推して知る可く、直ちに信を置き難し」と批判した。三田は仏教大学の前身である仏教専門学校を大正十四年（1925）に卒業しており、昭和四十四年に同大講師となっていた。五十九年に三田説を發展させて『要決』についての論文を発表した深貝慈孝も、当時同大助教教授であつた。三田深貝の二人が浄教寺本に言及していないことは不審である。

浄教寺本は、昭和四十二年刊行の『国書総目録』第五卷（岩波書店）に著録されていない。五十五年刊行の仏教大学仏教文化研究所編『仏教大学図書館所蔵和漢書中浄土宗学関係書籍目録稿』（仏教大学仏教文化研究所）は浄教寺文庫も対象としているものの、『要決』については版本八部を著録するのみで、その補遺である六十二年刊行の仏教大学図書館編『仏教大学図書館所蔵和漢書中浄土宗学関係書籍目録稿』（仏教大学図書館）に『要決』は著録されていない。

浄教寺文庫蔵の写本は他にも幾つかあるが、同本のように補修されたものや大きく破損したものは稀である。推測するに、同本は昭和廿四乃至卅二年に浄教寺から現蔵館へ寄託されたものの、大きく破損していたため死蔵され、近年になって白厚紙と白糸で補修され、はじめて利用に供されるようになったのかも知れない。

（1）題簽の「選」は「劣」「一」「八」と之繞から成っており、この字体は本文にも散見される。

（2）仏教大学史編纂委員会『仏教大学史』、仏教大学、1972、五六〇頁。

（3）大橋俊雄『浄土宗人名事典』、斎々坊、2001、一七五頁。

（4）三田全信『勢観房源智上人の史的考察』、『摩訶衍』一六、1936、一五四頁。後に同『浄土宗史の諸研究』（光念寺、1959）と同書改訂増補（山喜房仏書林、1980）所収。

（5）深貝慈孝「勢観房源智の著書についての一考察」、竹中信常・水谷幸正編『法然浄土教の総合的研究』、山喜房仏書林、1984。

## 諸本略解題

本項では、浄教寺本以外の諸本についての解題を略記する。なお、伝写過程などについては本稿付録「伝写過程考」参照。

一、古体本：真宗大谷派の恵空が元禄九年（1696）八月に入手したもの。

十五紙。外題は『選択集要決』か。その紙墨は甚だ古体で三、四百年も昔のものに見え、多くの字が紙魚により半ば失われていたという。恵空『選択集叢林記』追記と恵空奥書（養楽寺本所引）参照。

一、恵空本：恵空が元禄九年九月に古体本を書写させ、二度校合したもの。恵空奥書（養楽寺本所引）参照。

一、了祥本：西福寺（京都府京都市、真宗大谷派）蔵本を文化十年（1813）に同派の万徳寺了祥が了明雪光に書写させたもの。その写本である養楽寺本に明了了祥の書写奥書あり。

一、養楽寺本：養楽寺（愛知県岡崎市、真宗大谷派）旧蔵。卅紙（ただし、冒頭の「了祥師考」二紙と末尾の「三師一貫説」を合わせて凡そ四十紙）。書写奥書なく書写時期未詳、智照書写か。<sup>(1)</sup>了祥本の写本で、恵空と了明了祥の奥書、そして了祥本の袖書らしき「了祥師考」もあり貴重。所在不明だが、河記と広版によりほぼ復元可能。

一、聖徳寺本：七宝山聖徳寺（愛知県名古屋、真宗大谷派）現蔵か。卅二紙。広川堯敏が昭和六十一年（1986）に発見し、二年後に奥書などを翻刻紹介した。<sup>(2)</sup>奥書に延享四年（1747）四月十二日、永雅書写とあり。本文は田版とほぼ一致するという。書写奥書を信じれば了祥本より古いものとなるが、広川は実物調査の結果か、それとも『要決』写本を同地に将来したのが後世の了祥だからか、論文所載の系統図で養本神本とともに了祥本から派生したものと推定している。稿者未見。

一、神興本：写本。憶念寺神興の奥書あり。その奥書によれば、同本は師である了祥の住持していた万徳院の院主から授けられたものだという。田版参照。

一、田版：田中智肇<sup>(3)</sup>「選択要決は朝日山信寂房の撰歟」（『浄土学』五・六、1933）。田中が南条文雄蔵の神興本を借覧書写し、<sup>(4)</sup>廿余年後の昭和八年に全文と奥書を翻刻公刊したもの。全文に返り点あり、送り仮名と振り仮名なし、

読点あり句点なし。この翻刻は神興本とも称されるが、田中による誤写誤刻も有り得るため、田版と称すべきである。

一、河記：河住玄<sup>(5)</sup>「養楽寺旧蔵古本選択要決校勘記」（『古本選択要決／一枚起請文異文攷』、欣求庵、1977）。養楽寺本の複写物によつて田版との不同箇所を出校したもの。同記によれば、養楽寺本は「聖」（經）や「效」（教）などの「略字異体字多し」という。謄写版であるため、活字版では表現し難いそれら字体もよく伝えている。また、同本にあった傍註も転記しており貴重。僅かに遺漏があるらしいものの周密であり、広版の改変遺漏を補正するに足る。

一、広版：広川堯敏「伝源智述『選択要決』の成立をめぐる諸問題（二）——その書誌学的検討——」（『大正大学研究紀要仏教学部文学部』七三、1988）。養楽寺本の唯一の全文翻刻。全文に返り点あり、ほぼ全文に送り仮名あり、稀に振り仮名あり、句読点なし。「養楽寺本を翻刻するに当つて新・旧字体は原本のままとした」というが、原則として正字に作っており、字体については信憑し得ない。また、以註改正（本稿付録「伝写過程考」参照）も散見される。

一、享版：享保版（五年「1720」刊記、六年他序）。本稿緒言で述べた如く改竄された悪本であるが、恵空が発見した古体本を底本として改竄されたものであるため、百千に一は参照するに足る所がある。

（1）養楽寺本の書写者について、山田亮賢「妙音院了祥師並に其の学系調査報告」（『宗学研究』一四、1937、一八九頁）は「智照写」と断定し、広川堯敏「選択要決」の書誌学的研究」（『第二篇第一章、初出1988』、『鎌倉浄土教の研究』、文化書院、2014、一八五頁）は「あるいは智照であるかもしれない」と推測する。

（2）広川堯敏「伝源智述『選択要決』の成立をめぐる諸問題（二）——その書誌学的検討——」（『大正大学研究紀要仏教学部文学部』七三、1988、四頁。ただし、同本の発見そのものは同「伝源智述『選択要決』の成立をめぐる諸問題（一）——その思想的基盤を中心として——」（戸松啓真教授古稀記念論集刊行会編『浄土教論集』、大東出版社、1987、七八九頁）に追記されていた。

（3）田中智肇は浄土宗僧。井上泰岳編『現代仏教家人名辞典』（現代仏教家人名辞典刊行会、1917）とループル社出版部編『大日本人物名鑑』五・一（ループル社出版部、1922）に略伝あり。

（4）田中智肇によれば、「斯書を借覧の当時、非時に多忙を極めてゐたのと、一兩日間を限りて特に他出の御承諾を願つた関係もあり、写本の年代、紙質、筆者等の研究を遂ぐる暇なかつたことは、今日より之を追想するに実に遺憾の至りであるが、如何

とも致し方がない」という(四二〇頁)。

- (5) 河住玄は少時より漢学を修め漢文を教えてきた元高校教師で、晩年帰浄した在家篤信者だという。金子寛哉「欣求庵主、河住玄先生のこと(上)」(『浄土』五六・一一、一九九〇)、同「欣求庵主、河住玄先生のこと(下)」(同誌五六・一二、同年)参照。
- (6) 広川堯敏は廿六年後、同稿を著書『鎌倉浄土教の研究』(前掲)に再録したが、初出と対校すると誤脱が見えされる。例えば、初出の「嚴命」(第一決)は意通じ河記も出校しておらず浄教寺本と田版とも一致するが、再録では山冠を加えた「嚴命」に作っており誤刻と見ざるを得ない。また、初出の「能写之此本」(恵空本奥書)は山田亮賢「妙音院了祥師並に其の学系調査報告」(前掲、一八九頁)と石井教道『選択集の研究(註疏篇)』(誠文堂新光社、一九四五、七頁)、そして河記とも一致するが、再録では「能写之本」に作り「此」を脱している。このような類の誤脱が余りに多いだけでなく、初稿で翻刻していた付訓をすべて省いている。

## 校註凡例

一、正文は浄教寺本を底本とし、脚註で異本との異同を校記した。底本が是で異本が非であることが余りに明らかな不同などは出校しなかった。なお、脚註に所謂「諸本」は底本と田版、広版の三者のみを指し、河記を含まない。

一、底本に明らかな誤脱があっても原則として改めず、右傍に波線を施して脚註で存疑するのみとした。ただし、幾つかの字は例外として改め、右傍に直線を施して脚註で校記した。

一、字体は原則として通行のものに改めたが、「窺」と「闕」は区別した。「校」と「校」は前者で統一した。五つある「恵」はすべて底本ママ、四つある「弁」はすべて底本と田版で「辨」。なお、「燈」は「灯」に改めなかった。

一、正文での置語表記は、底本に従って二の字点を用いた。なお、底本は第二決に「文文」があり第十決に「処処」があるが、これら二箇所は上字が行末に位置しており、行頭の下字に二の字点を用いることを憚ったものと考えられる。底本と字詰めを異にしながらこれらの表記に従う意義はないため、それぞれ右傍に直線を施して「文々」「処々」に改めた。

一、底本に句読点はなく、私に施した。稿者は句点を頻用し、一文を短くすることを好む。ただし対句は句点で切らず、長くなろうとも一文とした。そのため、幾つもの読点で切られつつも句点で切られていない長い一文があれば、読者は対句でないかと疑うべきである。

一、各条冒頭の二字は、検索を便ならしめるため太字ゴチック体とした。

一、脚註所引の法然房源空『選択本願念仏集』は延応元年(一二三九)版(大正大学浄土宗宗典研究会編『選択集』諸本の研究——資料編——、文化書院)。字書には原則として昌住『新撰字鏡』十二卷(昌泰年間「八九八〇」成立)の天治元年(一一二四)書写本(京都大学文学部国語国文学研究室編『新撰字鏡天治本』増訂版、臨川書店、一九六七)を用い、同書にない字については空海『篆隸万象名義』卅卷(天長七年「八三〇」承和二年「三三」成立)の永久二年(一一一四)書写本(高山寺典籍文書綜合調査団編『高山寺古辞書資料』一「高山寺資料叢書」六、東京大学出版会、一九七七)を用いた。

一、書名は二重鉤括弧で、引用文は一重鉤括弧でそれぞれ括った。

一、脚註において、「此書」は『要決』を指し、「本書」は引用などの原典を指す。



## 浄教寺本校註

### 選択要決

夫窺<sup>①</sup>、積尊教勅者、所讚多在弥陀、眷衆生願望者、所求只帰極樂。幸逢源空上人化導、深信法藏比丘之誓願。是故依『選択本願念仏集』、以十六章段之料簡而配指南之車、以八種選択之教誡而備照胆之鏡。日本一州機縁純熟、朝野遠近同帰念仏<sup>②</sup>。然比日、見聞諸方道俗、解行不同、古今有異<sup>③</sup>。伝聞、一門學者窃加難、初心行者聞多煩。今扶其難、聊儲要決。為去迷情之疑、不顧賢心之譏。彼難破有十種、一々挙一々決云。

一者、「此集非先師作、弟子所造」云。然此集中云、「不図蒙仰、辞謝無地」<sup>①</sup>。若非先師製作者、何弟子蒙其仰哉。凡以師範口筆、留弟子手跡、此世常習也、何必弟子造。加之、先師在生之昔、「此書是我所造。予存命之間、努力莫流布」<sup>②</sup>云。仏子面受嚴命、于今無忘。何塞諸人耳目、云「非先師製作」。抑何弟子、明達聖道浄土之教法、始立凡夫往生之宗義。其門徒中、誰学八宗、誰窺九宗<sup>③</sup>。一教猶以闇、諸教云何曉。以其身可蒙彼仰乎、居其位可作此書乎。不知諸宗秘蹟、無立一宗教相。然者先師上人、顕教密教悉瑩、權教実教併明。然後尋入浄土真門、開出往生正業。依之、拳世称「智恵第一」、其言至誠哉。凡立教多少、非先師者不可弁、興行流布、非上人者不可鑑。若此弟子之所造者、其弟子何人、不知体名。応知。

二者、「此集為在家人、集要文計也。更不及述義」云。然此集中云、「懋集念仏要文、剩述念仏要義」<sup>②</sup>。加之、所引文中、多以道俗男女已為往生之機。何先師独嫌俗秘義。凡僧有賢愚、俗有浅深。就中禪定殿下、云内典云外典、才学優

### 序文

(1) 「窺」、諸本此くの如く、河記出校せず。『新撰字鏡』云く、「窺」は管を以て天を窺ひ、螺を用て海を酌むこれなり、小視なりと。案ずるに、意通ず。

(2) 『二乗要決』云く、「日本一州円機純一、朝野遠近同帰一乗」と。

(3) 『往生礼讃』云く、「余比日、自見聞諸方道俗、解行不同、専雜有異」と。『選択集』第二章これを引けり。

(4) 「扶」、諸本此くの如く、河記出校せず。底本に付訓「スケテ」あり、広版に付訓「スガテ」あり。『新撰字鏡』云く、「扶」は佐くなり、持つなりと。案ずるに、意通ぜず。当に「校」に作るべし。同書云く、「校」は孝なりと。孝は当に考ふの誤と為すべく、これ則ち意通ず。「扶」「校」二字の草体相近し。此書第七条に於いて一字を底本「校」に作り、田版広版「扶」に作り、河記出校せず。以て二字の誤られ易きを知るべし。

### 第一条

(1) 『選択集』末尾に出づ。

(2) 「二期物語」に見ゆ。

(3) 「窺」、田版「闕」に作り、河記広版「其門」より「諸教」に至るまでの十九字を脱す。『新撰字鏡』云く、「闕」は覲るなり、字加々不、また乃曾久なりと。「窺」の小視なること、序文脚註を



長、傍若無人。何師長、為上代甚深之機秘要義、何弟子、為末代薄淺之俗授深義。已拳法滅百歲之時機、広說法住三時之利益。於法滅僧者、雖說僧更不可及法住之俗。凡承國王勅宣、蒙一人命旨、偽述假說、不顯実義、前代未聞、其恐不少者歟。委尋段々、未見限于俗、慙闕文々、未云秘於義。其旨出何段、其義含何文。言不明文、智者所恥也。応知。

三者、「此集唯為淺機、且述淺義。至深義者、所不載也」云。然此集中云、「立聖道浄土二門意者、為令捨聖道入浄土門也」<sup>①</sup>。已以聖道為浄土機。所言聖道、何必淺機。先師勸誘之言、未出此集・意<sup>②</sup>。自昔至今、追其跡入此門、猶如流水不絶。其中、有洪才博覧之人、有淺智愚鈍之機<sup>③</sup>。敢不簡機量淺深、全無別衆生善惡。故引法照釈、示不簡機。「彼仏因中立弘誓、聞名念我総來迎」<sup>④</sup>。不簡貧窮將富貴、不簡下智与高才、不簡多聞持浄戒、不簡破戒罪根深。但使回心多念仏、能令瓦礫變成金」<sup>⑤</sup>。高才則為本願之機、多聞何非称名之機。況又撰淺機説深機、是聖教通説也。就中此集意者、殊無簡機。於当世流布之義者、雖称深義、智者塞耳。以何定淺深、縁底知実不。暫雖有理壁之禁、聊恐破法之罪計也。全非秘法、無簡人。凡分別聖道浄土、料簡雜行正行之外、残何深義、弁定安心起行、顕彰本願称名之外、漏何奥旨。若以此集為淺義者、未審。当世、談三諦相即之旨歟、論方法唯心之義歟。内無事、外驚人。淺識藉此迷、愚魯為是煩。乱聖教文、悩行者意。其禁不輕、云何不驚。迷道者必尋道而達、迷教者須尋教而行。守文靜心者、更無所迷、離教行道者、多有所錯。唯勸、守先師之遺言、為当今之正路。応知。

四者、「当世義理超過此集、例如善導勝于道綽」云。誠如和尚者、発得三昧、為師作訓。其驗嚴重、尤足為勝。然先師上人、初習学円宗法門來、探諸宗源底、

見るべし。案ずるに、意通ぜず。当に「闕」に作るべし。

## 第二条

- (1) 「慙」、底本「慙」に作り左傍に小圈点を施して上欄外に「慙」を書す。解題を見るべし。田版広版「慙」に作り、河記出校せず。案ずるに、「慙」の是なること明らかなり。疑ふらくは、書写者「慙」を以て「慙」の異体字と為すか。故に改む。
- (2) 『選択集』末尾に出づ。
- (3) 「雖説」、田版広版「設雖」に作り、河記「設」ヲ「説」ニ作り「設歟」ト小サク旁書ス」と云ふ。案ずるに、意通ぜず。これ誤かつ倒にして、当に「設雖」に作るべし。
- (4) 「闕」、諸本河記此くの如し。案ずるに、意通ず。
- (5) 「段」、底本左傍に小圈点を施し次行余白に「攸」を書す。解題を見るべし。田版広版「段」に作り、河記出校せず。

## 第三条

- (1) 『選択集』第一章に出づ。
- (2) 「先師勸誘之言、未出此集意」、田版「先師勸誘言、未出此集之意」に作りて上句に「之」なく、河記広版上下二句に「之」あり。案ずるに、底本田版は文対せず。当に底本下句に「之」を補ふべし。
- (3) 「機」、田版広版「族」に作り、河記出校せず。案ずるに、疑ふべし。
- (4) 「機量」、河記広版此くの如く、田版「器量」に作る。
- (5) 「來迎」、河記広版此くの如く、田版「迎來」に作る。本書云く、「迎來」と。案ずるに、倒か。

面々蒙許可、窺諸家元意、各々得歎譽。南京賢德、貴智惠深遠而多年展供養、北京長老、仰才芸広博而一向致恭敬。明師還問法門之蹟、碩德進受眼前之化。習学不為名利、勤修偏為出離。遂辭難行道、転入易行道。欲赴化導之刻、頗有  
 感得靈夢。其相何者、紫雲普聳覆日本国、自紫雲中多放光明。自光明中宝鳥飛散、其鳥充滿無所不至。于時昇高山之腰、忽然值奇特之僧。自腰下者皆金色、自腰上者如常人。高僧云、「我是善導也。弘專修念仏故、我来臨汝前」<sup>④</sup>抄略。自其已来、化導滿一天、無不至之国土、利物通四海、無不及之郷里。「信之者多、不信者少。当知、浄土之教、即時機而当行運也、念仏之行、感水月而得昇降也」<sup>⑤</sup>。只非化他之然、自行純熟、証利甚多。夫熾盛念仏之窓前、勢至来現、口称三昧之室内、弥陀影向<sup>⑥</sup>。闇夜無燈、常開聖教、墻壁有障、鎮見浄境。臨終瑞相、不可称計、若干道俗、悉以見聞。其旨<sup>⑦</sup>在別記、不能委述之。最後臨終、念仏不退、頭北面西、如眠而終。乃至滅後、重其恩恐如积尊、貴其德想非直人。教理日倍增、行証年威光。觀智歴然、有增無減。忽思付此事<sup>⑧</sup>、肝淚・難抑<sup>⑨</sup>。解行俱備、力堪師位、所為非凡、将是曉也<sup>⑩</sup>。況復、夢中告善導再誕、覚前示勢至化現。如此靈相、甚以雖多、恐繁不出。然者可謂、先師『選択集』、西方指南、行者目足也、西方行人、必須珍敬者也<sup>⑪</sup>。又可謂、善導和尚直説也<sup>⑫</sup>、勢至菩薩誠言也。仰討本地者、大唐導師也、三昧正受之語、無疑于往生、俯訪垂迹者、我朝先達也、一向專称之教、有憑于念仏<sup>⑬</sup>。知不、当世感応者、先師用力也。戴天不知天高、踏地不知地厚。云智德云行德、不可得而称、不可拳而論。有何道理、恣下此集。若末流之説者、必須加禁制、実自身之見者、如懷石入淵。賢者彈指、難遁者歟。応知。

五者、「此集為使人誘引本書也。於本書義者、只当世談之」<sup>云</sup>。若然者、十六

(6) 『選択集』第三章に出づ。『五会法事讃』の略抄なり。「成金」、底本「金成」に作り、右傍に「下上」を書いてその倒なるを示す。故に改む。

(7) 「縁底」、ナニ、ヨリテカと訓ず。

(8) 此に田版広版「更」あり、河記出校せず。案ずるに、此の字微せば上句と文對せず。当に補ふべし。

#### 第四条

(1) 「初習学円宗法門来」、底本「習学」に送り仮名「セシヨリ」あり、「来」に送り仮名「タ」あり、広版「習学」に送り仮名「セシ」あり、「来」に送り仮名「カタ」あり。初メ円宗ノ法門ヲ習学セシヨリコノカタと訓ず。

(2) 「窺」、田版広版「闕」に作り、河記出校せず。二字の意異なること、第一条脚註を見るべし。案ずるに、意通ぜず。当に「闕」に作るべし。

(3) 此に田版広版「汝」あり、河記出校せず。「一期物語」もまた此の字あり。

(4) 「一期物語」に見ゆ。

(5) 『選択集』末尾に出づ。

(6) 「向」、底本「嚮」に作り、田版広版「向」に作り、河記出校せず。今、通行の字体に改む。

(7) 「墻壁」、広版此くの如く、田版「墻壁」に作り、河記「墻ヲ「墻」ニ作ル」と云ふ。案ずるに、意同じ。

(8) 「忽思付此事」、河記此くの如く、田版広版「忽思惟此事」に作る。『観経疏』云く、「忽思付此事」と。

(9) 「肝」、田版広版「汗」に作り、河記「肝」ニ作り右旁ニ「汗」ト小書ス」と云ふ。『新撰字鏡』

章段之下、広引経釈之文、微々細々問答料簡、文々句々分別解釈、此指何文意、如此釈成。為立一旦之自義、出如此不忍之言。似貴而輕、似輕而貴。内外不調、心事相違。如塵積埋鏡、似霧下隱日。不知恩至、云何不畏。凡以未盡為指南、而探本書之奧旨、以本書為先達、須得経論之深意。然直料簡経意、還捧釈文、私披見本書、恣下末書。先師已引経釈之現文、委細分明釈成其旨者、文親理明、易取難忘、当世不依聖教之現文、所述義理全不明者、文疎義掠、難取易忘。設独計深義、碩学不許之。至此集者、多聞広学之人多用之、高才勇哲之類普翫之。然小聞弟子恣毀訾、下智末学妄隱蔽。「是即無慚無愧之甚也」。応知。

六者、「此集且明起行分際、未謂安心法門」<sup>已上</sup>。所言安心者、即三心是也。具引其三心云、「所引三心者、行者至要也。所以者何、経則云「具三心者、必生彼国」、明知具三必応得生、釈則云「若少一心、即不得生」、明知一少是更不可。因茲、欲生極樂之人、全可具足三心」<sup>已上</sup>。三心中已、信仏本願、立称名行。釈文分明者、私言不委細。然「以解仏智不思議而名安心、以捨本願及称名而為深旨」<sup>②</sup>。経即説「其仏本願力」<sup>③</sup>、釈即云「弥陀智願海」<sup>④</sup>。当知、仏智即本願。『略論』云、「疑不思議智者、疑一形罪人以十念不可得生。不思議智者、以輕為重、以重為輕。乃至等也。以有碍識疑無碍法」<sup>已上</sup>。文意者、『大経』不思議与『観経』下品往生、其意是一也。離本願称名、論不思議智、何師意哉、出在何文。凡於浄土教雖異義多、未聞廢弥陀本願而立浄土、未見捨称名念仏而判往生。智者捧聖教用為明札、愚者以仮説而如金言。一旦似有道理、再往論之悉非。其義、為有相為無相、為自力為他力<sup>⑥</sup>。悲哉、先德引諸仏誠言、而彰称名念仏之実、末学任一身愚意、而失口称三昧之徳。師子中虫、更非他人。彼三心中已、云「一心専念弥陀名号」、云「十声一声定得往生」<sup>⑦</sup>。信心之上、応備於行、起行之上、応

云く、「肝」は晩なり、晏なりと。案ずるに、「肝」「汗」「肝」三者意通ぜず、「肝」「汗」「肝」「汗」の如きの類も亦然り。疑ふらくは「感」の音通誤写か。

(10) 此に田版広版「尤」あり、河記出校せず。案ずるに、此の字微せば上句と文對せず。当に補ふべし。

(11) 『選択集』第十六章云く、「爰知、善導和尚者、行發三昧、力堪師位、解行非凡、將是晩矣」と。

(12) 『選択集』末尾云く、「靜以、善導『観経疏』者、西方指南、行者目足也。然則、西方行人必須珍敬矣」と。

(13) 『選択集』末尾云く、「可謂、又此文是弥陀直説」と。

(14) 『選択集』末尾云く、「仰討本地者、四十八願之法王也、十劫正覺之唱、有憑于念仏、俯訪垂迹者、専修念仏之導師也、三昧正受之語、無疑于往生」と。

#### 第五条

(1) 「句」、底本「勺」に作り、田版広版「句」に作り、河記出校せず。案ずるに、「勺」はこれ「句」の略字なり。故に改む。

(2) 「未盡」、底本「未盡」に作り、田版広版「末書」に作り、河記出校せず。案ずるに、意通ぜざるが如し。当に「末書」に作るべし。

(3) 「捧」、田版「咲」に作り、広版「噉」に作りて付訓「マケ」あり、河記出校せず。案ずるに、当に「捲」に作るべし。「捲」「捧」「噉」三字の行草体相近し。言ふところは、釈文を捲き収めて読まず。これ則ち下句「披見本書」と意對す。広版



具於信、尤以顯然也。若以起行為方便而捨称名、以安心為真実而廢本願者、於何仏係憑、於何行立信。先師云、「世人若樂觀仏等不修念仏、是遠・乖・弥陀本願、亦是近違・積尊付属」<sup>(8)</sup>。然於難行者、嫌疎難不行、於称名者、名方便無修。樂觀仏等不修念仏、猶乖仏意<sup>(9)</sup>、專難共捨正助悉廢、豈順聖教。前仏禁惡業者、後仏須同其教、師匠勸称名者、弟子盍追其跡。濁世衆生勸行尚猶預、能化導師遮勤誰精進。滅罪之計爰絶、生善之便已失者歟。抑何人作文、不顯本意。心無形者、以言顯之、言易忘者、染筆留之。先師上人、已遁二河艱難之波、雖移九品安養之岸、寄言・有縁同行、而作一卷之書、及志於無縁衆生、而教專念之行。若此非実語者、留無益言歟、染無利筆歟。歸此書人者、今昔皆念仏、背此書者、近遠懈称名。何為無益之言、何云無利之說。応知。

**七者**、「此集以行者之功為往生之行、未明正因正行法門」<sup>(10)</sup>云。所言正因正行者、撰去行於弥陀之体、而談能所一体、即修因於領解之心、而教解行不二。離理而云不二、在事而云一体。此非聖道所談、復非浄土所立。縱雖談不二法門、全無失而二道理、何況於事相教門乎。本願云、「設我得仏、十方衆生至心信樂欲生我國、乃至十念若不生者、不取正覺」、<sup>(11)</sup>云、「若我成仏、十方衆生称我名号、下至十声若不生者、不取正覺」。彼仏今現在世成仏。当知、本誓重願不虛、衆生称念必得往生<sup>(12)</sup>。上。窺此等文意、未見能所一体、未云解行不二。「至心信樂」是安心也、「乃至十念」是起行也。然者正因之上、十念之行也。爰「十念即安心、即領解、即去行、即体」<sup>(13)</sup>云。此則缺文之株、忘教大旨歟。經云「十念」、<sup>(14)</sup>云「十声」。先師引聖教來証、成念声一義。所言声、云何領解乎。凡師弟義相違、其例雖甚多、未曾聞破師義。聖道教法非一、浄土人師是多、其中誰人嘲先德義。然不引聖教文証、不依先師遺書、偏以人情、准義而立、此先

付訓「マケ」はマクの誤か。

(4) 「経釈之」、底本「経之」の間に小圈点を施し「釈」を右傍に書す。

(5) 「掠」、諸本此くの如く、河記出校せず、広版に付訓「カスメリ」あり。案ずるに、意通ぜず、また上句「明」と意対せず。疑ふらくは「昧」の誤か。

(6) 「計」、田版広版「許」に作り、河記出校せず。案ずるに、意通ぜざるが如し。当に「許」に作るべし。

(7) 『選択集』末尾に出づ。

#### 第六条

(1) 『選択集』第八章に出づ。経は則ち『観無量寿経』、釈は則ち『往生礼讃』なり。

(2) 此の廿二字、案ずるに、難者を謂へり。

(3) 『無量寿経』に出づ。

(4) 『往生礼讃』に出づ。

(5) 『略論安楽浄土義』に出づ。略抄なり。「等也」、田版広版「等也莫」に作り、河記出校せず。本書云く、「安得以有碍之識疑彼無碍之法乎」と。案ずるに、若し「莫」字あらば意通ずるが如しと雖も、「等也」二字未だ安んぜず。疑ふらくは、誤りて草体「安」を以て「也等」に作り、而して「等也」に作るか。

(6) 「他力悲」、底本「他悲」の間に小圈点を施し「力」を右傍に書す。

(7) 此の二文、『選択集』第八章の引く所なり。前者は『観経疏』に出で、後者は『往生礼讃』に出づ。

(8) 『選択集』第十二章に出づ。「是遠乖弥陀本願」、



德所禁、不可不恐。菩薩猶請仏証、必須定是非、凡夫何任我意、容成自義乎。

倩原師資来意者、上代先德於經得自在故、取意引文、末代人師於經恐深意故、

如言引文。但經文幽玄者、就經儲積、猶深奧者、副本量末<sup>(6)</sup>。然不順本書、不拘

末書、自在立義、無窮吐言。尤可斟酌、尤可思挹。只非失於自行、見重數遍之

人者、每見喧之、向積念數之輩者、每向咲之<sup>(7)</sup>。粗尋漢家本朝先蹤、道綽禪師化

并州者、七歲已上皆念仏、小康法師誘陸郡者、小兒之類悉称名。和尚化導流布

漢土、而京花諸州僧尼士女偏修梵行、先師勸誘充滿日域、而洛陽万国貴賤上下

普勇淨業。有智無智併唱仏号、在家出家等翫称名。加之、自行勇猛、言語道斷。

或寒冷流汗、表至誠相、或火急責体、示慍重志。惠心先德、勸「外儀雖異、心

念常存、念々相続、寤寐莫忘<sup>(12)</sup>」、先師上人、励「念仏恒沙、無上功德、復応恒沙<sup>(13)</sup>」。

如是応知、和漢両朝先師先德、豈云不領解仏意乎、寧云不通達深義乎。難者云、

「彼等諸師更不為自行、偏為利他行也」。答、「彼等諸師不為自行」、見何伝、出

何文。又先達若為利他行者、当世追其跡尤可行。然自他共不行、師弟同不勤。

菩薩尚兼自行、凡夫何不然乎。正因中已「就行立信」、按此釈有「五番相對<sup>(15)</sup>」。

然者正因之前者、雜行即云正行、其義不分明歟。『般舟讚』云、「万行俱回皆得

往。念仏一行最為尊。回生雜善恐力弱。無過一日七日念<sup>(14)</sup>」上。雖回向得生、

不遁雜名明。爰知、万行皆成念仏而得生。義甚以幽玄也。約取辺者、雜行悉取

之、約捨辺者、正業尚捨之。大增大減過、尤易招者歟。又就「言阿弥陀仏者即

是其行」之文、料簡「去行在仏体」。然此集已引彼文、釈「能帰行者之願行易具」

之旨。云經文云釈意、云私言云道理、尤顯然也。応知。

八者、「此集所立宗義、此不足也。当世宗義、其意斯周」云。然先師上人、立

二門判一代聖教、而例四教五時等之教相、待諸行顯一行精微、而例随他随自等

諸本此くの如く、河記出校せず。本書云く、「是遠非乖弥陀本願」と。言ふところは、是れ遠くは弥陀の本願に乖くのに非ず。案ずるに、「非」字微せば文対せず。当に補ふべし。

(9) 「意」、田版此くの如く、河記広版「智」に作る。

(10) 此に田版広版「於」あり、河記出校せず。案ずるに、此の字微せば文対せず。当に補ふべし。

(11) 諸本此くの如く、河記出校せず。案ずるに、上句と文対せず。疑ふらくは、此に一字を脱せるか。

#### 第七条

(1) 此の二文、『選択集』第三章に見ゆ。前者は『無量寿経』に出で、後者は『往生礼讃』に出づ。

(2) 「窺」、田版広版「闕」に作り、河記出校せず。二字の意異なること、第一条脚註を見るべし。案ずるに、意通ぜず。当に「闕」に作るべし。

(3) 「体」、田版広版「仏体」に作り、河記「仏」ノ字ナシ」と云ふ。案ずるに、「仏」字微せば上三句と文対せず。当に補ふべし。

(4) 「跌」、底本付訓「ツマツヒテ」あり、田版「跌」に作り、広版「跌」に作りて付訓「ツマツヒテ」あり、河記出校せず。案ずるに、これ蹉跌の意なり。当に「跌」に作るべし。

(5) 「来」、田版広版「素」に作り、河記「来」ニ作り「素歟」ト旁書ス」と云ふ。

(6) 「量」、田版広版「置」に作り、河記出校せず。案ずるに、意通ぜず。当に「置」に作るべし。

(7) 「咲」、底本「嘆」に作り、右傍に小圈点を施し上欄外に「笑」を書す。解題を見るべし。田版広版「咲」に作り、河記出校せず。『新撰字鏡』云く、「咲」「咲」二字同じ、喜ぶなり、諺るなりと。案

之廢立。皆有証拠、悉有准例。此則「浄土宗『觀無量寿經』意也」<sup>(1)</sup>云。其意者、聖道家『觀無量寿經』者、為其宗為權教、又為所廢、浄土宗『觀無量寿經』者、為自宗為依憑、又為所立。然者広引聖道諸教、悉入三福業、已以三福諸業、遍配当九品。然後廢彼諸行、立念仏行。此則「浄土宗『觀無量寿經』意也」。經是雖一部、互為主為伴。此集大旨、偏在此事。設雖諍宗義、未難此集、多雖鬱立教、未破此書。但此書始流布之時、或咎廢誦大乘、点筆破之、或痛捨発菩提心、結詞難之。雖然、倩思惟還自燒、屢審察悔而裂<sup>(2)</sup>。至当世宗義者、無所校之例証、無所引之現文、無所立之道理、無所許之分際。心手短者、無取法財。自心淺短、還下師訓。此則不計涯分、不顧罪報故也。応知。

**九者**、「此集所明、悉是隨機說也。於実義者、我独相伝」<sup>(3)</sup>云。若面受口決者、何故年々改義、時々易言。准前思今、未来不定。又先師在生之化儀者、敢不違此集之義勢。現蒙其化、得益者幾哉。或見紫雲、或聞異香、或感仏化<sup>(1)</sup>、或拝聖衆。加之、臨終正念、満十念者、算数難量、記録難尽。先師之言若方便者、何以顯如此現証。但当世流布義者、「以臨終之正念不正念、無定往生極樂之得不」。唯偏諧自義為正、随他人為邪計也。依之、不許先賢往生、不貴当機靈瑞。倩以去者不来而告、留者無往而見。聖教無証拠、伝記無先蹤。於臨終顛倒之行者、云何知往生、云何記其相。凡以臨終善惡、定当生苦樂、是如来金言、誰人疑慮之。是故恵心、故作臨終行儀、專勸最後正念。『往生要集』云、「念仏功積、運心年深者、臨命終時、大喜自生」<sup>(2)</sup>上。和尚、或明看病法用、或祈心不顛倒。委旨見『臨終要決』。又先師常言云、「武士与上人、多到最后顯於恥辱」。明知「可臨終正念」思食事。静商量者、恒沙宿善貯内、無上功德積外。罪障悉消、聖衆恒守。如来迎接、菩薩踟跪<sup>(2)</sup>。浄果忽萌<sup>(3)</sup>、聖果已隣。四魔遠去、万善爰熟。

ずるに、「嘆」は意通ぜず、「笑」は是の時用ひられず。故に改む。

(8) 「小康」、河記広版此くの如く、田版「少康」に作る。

(9) 「陸郡」、諸本此くの如く、河記出校せず。案ずるに、「睦郡」是なり。

(10) 「急」、底本「窓」に作り、田版広版「急」に作り、河記出校せず。案ずるに、「窓」は字書に見えず、「急」の草体は「窓」に似たり。「窓」は当に「急」の誤と為すべし。故に改む。

(11) 「異」、底本「畢」に作り、左傍に小圈点を施し右傍に「異」を書す。解題を見るべし。田版広版「異」に作り、河記出校せず。故に改む。

(12) 『往生要集』に出づ。

(13) 『選択集』第五章に出づ。

(14) 「校」、底本「校」に作り、田版広版「扶」に作り、河記出校せず。広版に付訓「スカテ」あり。案ずるに、「校」是なり。序文脚註を見るべし。

(15) 『選択集』第二章に見ゆ。「就行立信」は『観経疏』に出づ。

#### 第八条

(1) 『選択集』第十二章に出で、「一期物語」に見ゆ。

(2) 「裂」、底本「取」に作り、右傍に小圈点を施し上欄外に「裂」を書す。解題を見るべし。田版広版「裂」に作り、河記出校せず。故に改む。

(3) 「心手」、田版広版「信手」に作り、河記「心乎」ニ作り「信手」ヲ旁書スと云ふ。案ずるに、「短者、無取法財」は『大智度論』に出づ。云く、「無信如無手。無手人入宝山中、則不能有所取。無信亦如是。入仏法宝山、都無所得」と。疑ふらくは、

覺日已輝、長夜欲晴<sup>④</sup>。有何道理、身心顛倒。不載諸家伝記、不見諸師解釈。和尚筆点不足歟、先師智分不及歟。先師述懷云、「貧道昔披閱茲典、粗識素意、立捨余行、云歸念仏。自其已来至于今日、自行化他唯緯念仏<sup>⑤</sup>」<sup>上</sup>。遺書之趣、偏勸称名、在生之行、專在念仏。我等憑不定相伝、不如依此書称名。漏釈尊在世、雖殘恨於二千余年之霞、值三部妙典是悦、生善導滅後、雖致憂於五百余載之雲、披九卷章疏又幸。但先師上人、恭括<sup>⑥</sup>經藏、行者自宝<sup>⑦</sup>、唯示在此。因茲此經重増色、不知釈迦之応現在覽<sup>⑧</sup>、于時此釈再拳徳、不識善導之来生在覧。哀哉、去娑婆已送五々星霜、愁歎幾多、移浄土早坐三々芙蓉、利生定感。悲喜涙交流、後会期浄土。尊体隠、遺跡娥<sup>⑩</sup>、古言止、筆点芳。所教偏萌本願、所勸唯在称名。此則経肝心、釈折中也。披此書者、恋面拝之昔、企此行者、悲教訓之古。然上今下古、全非比校歟。設雖聞此等説、更不生一念疑心、唯増長成就我決定上々信心。何以故。先師所説、符合釈故、随順経故、証利多故、智者貴故、利生広故、智行足故也。彼井底説無常法狐、天帝拝之為師、雪山唱生滅偈鬼、大士敬之如仏。皆重法軽身習也。然於師範説、悉以理之。拙哉、愚哉、悲哉、痛哉。応知。

**十者**、「此集明往生之分際、未立成仏実義」<sup>云</sup>。然『玄義』云、「一心回願往生浄土為体」、又云、「道理成仏之法、要須万行円備、方乃剋成。豈将念仏一行、即望成者無有是処」、又云、「一正一依、豈得相似」、又云、「正報難期、一行雖精未剋」<sup>上</sup>。先師立宗名、即名浄土宗。凡三部四卷経中、未以往生浄土名方便、五部九卷釈中、未以直至道場為真実。面嫌称名、立同通論之見、直期仏果菩提、則墮別時之意。自失誤他<sup>①</sup>、不可尋外。又於所歸仏体、云非三身撰。浄土人師雖多、三身三土之外、未見弁仏身、聖道法門雖広、四身四土之外、未聞論仏体。

## 第九條

「心手」はこれ「信手」の音通誤写か。

(1) 「仏化」、田版広版「化仏」に作り、河記出校せず。案ずるに、これ倒にして、当に「化仏」に作るべし。

(2) 「踰」、河記広版此くの如く、田版「胡」に作る。案ずるに、「胡跪」「踰跪」意同じ。

(3) 「果」、田版広版「業」に作り、河記出校せず。案ずるに、底本の「浄果忽萌、聖果已隣」に作り、上下二句に於いて「果」を重用せること、疑ふべし。然れども、田版広版の「浄業」はこれ念仏の意なり。臨終正念し如来迎接し、而して後に念仏忽ち萌すと為すは、則ち意通ぜず。疑ふらくは「華」の誤か。「華」「果」二字は音通じ、「華」「業」二字の草体は相近く、「浄華」「聖果」二語は意対す。

(4) 「覺日已輝、長夜欲晴」、田版「覺目已輝、長夜欲明」に作り、河記「目ヲ「日」ニ作ル。明ヲ「晴」ニ作り「明」ヲ旁書ス」と云ひ、広版「覺日已輝、長夜欲明」に作る。案ずるに、日已に輝きて夜未だ明けずと為すは、則ち意通ぜず。「明」を以て「晴」を改むるもまた非なり。「日」は当に「月」に作るべし。言ふところは、覺悟の月已に輝きて長夜の雲散ぜんと欲す。

(5) 『選択集』末尾に出づ。

(6) 「括」、広版此くの如くにして付訓「カナリテ」あり、河記「括」ニ作り「探」ヲ旁書ス」と云ひ、田版「探」に作る。『新撰字鏡』云く、「括」は捜すなり、阿奈久留なりと。案ずるに、意通ず。

(7) 「自宝」、底本「自寶」に作り、田版広版「目足」に作り、河記出校せず。案ずるに、「寶」の略字



先徳已判報身、末学云非三身。『玄義』云、「過現諸仏、弁立三身。除斯已外、更無別体」<sup>已上</sup>。法報応化之外、仮何名、論何体。於虚空界如論寸尺、酌江河流似乾源底。不順他宗法門、不随自宗先達。嫌依報期正報、遮去行教領解。名顕行悉捨、号示觀皆取。雖取不行、不行募行。先師云、「随他之前、暫雖開定散門、随自之後、還閉定散門」<sup>2</sup>、当世談、「顕行之前、雖閉定散門、示觀之後、還開定散門」。誠黑白、誠水火。云何会、云何通。凡此集所明法門、甚広大深遠者、結五言四行之偈頌、示数十余張之肝心。頌曰、「速欲離生死 二種勝法中 且闍聖道門 選入浄土門 欲入浄土門 正雜二行中 且抛諸雜行 選応歸正行 欲修於正行 正助二業中 猶傍於助業 選応專正定 正定之業者 即是称仏名 称名必得生 依仏本願故」<sup>3</sup>。又云、「庶幾一經高覧之後、埋壁底莫遺窓前。恐為不令破法之人墮惡道也」<sup>4</sup>云。大衆同心、皆當懺悔所有破法罪業因縁。問、「今所引偈頌、此集肝心者、不奉三心、有何意乎」。答、其安心者、信心為詮。然者已云、「正定之業者、即是称仏名。称名必得生、依仏本願故」。此即「就行立信」意也。或人問上人云、「釈本願略安心、有何意」。答、「衆生称念、必得往生、是即安心也。言安心者、信為肝心」<sup>6</sup>云。問、「或人云、「此集是当初依上人命、我集要文」。其実不如何」。答、集『選択』一卷之文、当建久第九之曆。算歲月之積、向四十回。以年齢而可知、尋才芸・可思。問、「於流布本、有広略異。其相違、有何故」。答、略者即是高覧本也。然執筆弟子、為初心学者、後加名目。問、「就異本、其意別耶」。答、雖無幾別、非無少異。所詮不可如高覧本。問、「処々引『往生要集』文。此集意、可同彼邪」。答、先師物語云、「我為出離、久求仏法。粗闕顯密諸教、大体難解難行也。因茲、芳楞嚴先徳之跡、探『往生要集』之趣。念仏為正、諸行為傍。位雖該上下、正為

「宝」の草体は聊か「足」に近く、また『選択集』末尾云く「行者目足」と。当に「目足」に作るべし。

(8) 「在覧」、アルランと訓ず。

(9) 「土早坐」、底本「土坐」に作り二字の間の右に「早」を書す。

(10) 「娥」、諸本此くの如く、河記出校せず。『篆隸万象名義』云く、「娥」は美なるの兒と。案ずるに、「娥」は女の美貌を謂ひ、而して堂の威容を謂はず。疑ふらくは「峨」の誤か。同書云く、「峨」は高きの兒と。言ふところは、尊体は隠匿せらるるも遺跡は盛壮たり。

#### 第十条

(1) 「自失誤他」、田版広版「自失悞他」に作り、河記出校せず。『観経疏』に出づ。同書一本は「自失誤他」に作り、一本は「自失悞他」に作る。

(2) 『選択集』第十二章に出づ。

(3) 『選択集』第十六章に出づ。空格十七、底本あり、田版広版なく、河記出校せず。

(4) 『選択集』末尾に出づ。

(5) 「安」、広版此くの如く、田版「三」に作り、河記出校せず。

(6) 「一期物語」に見ゆ。

(7) 「第」、底本「弟」に作り、田版河記広版「第」に作る。案ずるに、「弟」はこれ「第」の略字なり。故に改む。

(8) 此に田版広版「而」あり、河記出校せず。案ずるに、此の字微せば上句と文対せず。当に補ふべし。

(9) 「邪」、田版広版「耶」に作り、河記出校せず。



凡下類。但凡下行相、引道綽善導釈、所引專雜之文、尚以不分明。故以『往生要集』而為先達、知浄土法門之冲微也<sup>(12)</sup>。以觀察為助業、以称名為正業。此義聊相違歟。問、「上已引道綽懷感惠心等、同之。何云有其相違耶」。答、引彼等師意者、只同分二行之篇也。全非為同義分引之。以何得知。此集終云、「師資之釈、其相違甚多。故不用之」<sup>(13)</sup>。明知、不同義分。応知<sup>(14)</sup>。夫『選択本願念仏集』、是渡苦海之船筏、到浄土之眼目也。「道俗貴賤、誰不帰者」<sup>(1)</sup>。願置坐右、須備廢忘。他門行人、尋跡雖来、自家學者、失道違背。昔面拋難行、而積念仏之功、今剩闍正業、現破進趣之見。貴君者不可踐影、重師者不可背命。正風空起、邪山雲晴、大虚雲散、朗日光輝。愚淺門流、面々下旧儀、迷情末葉、口々輕遺誠。於如来教法雖致謗、全不為如来之失、於明師遺典雖加難、敢莫思明師之過。不忍聞之、忘憚已決。袋臭金猶尚、啄鳥珠是珍也、身賤志猶清、詞頑理是鮮也。謗讚共結来縁、自他互垂引接矣<sup>(4)</sup>。

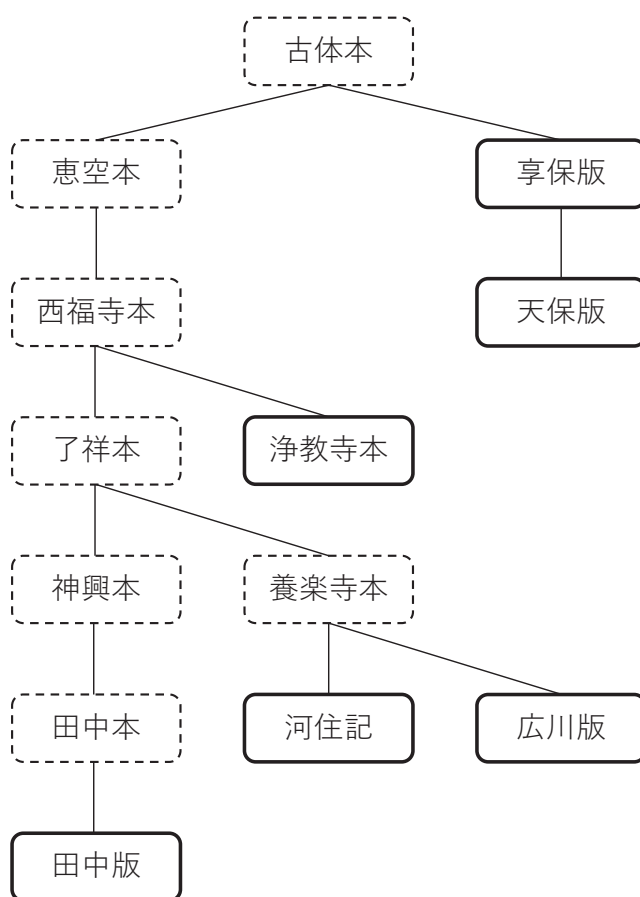
## 選択要決

### 結文

- 案ずるに、是の時、「邪」を疑辭に用ふることなし。当に「耶」に作るべし。
- (10) 「闕」、諸本此くの如く、河記出校せず。案ずるに、意通ず。
- (11) 「為正諸」、底本「為諸」に作り二字の間の右に「正」を書す。
- (12) 「一期物語」に見ゆ。
- (13) 『選択集』第十六章に出づ。
- (14) 此の下、底本改行なし、田版改行あり、河記出校せず、広版未詳。案ずるに、当に改行すべし。「応知」二字を以て一条を結ぶは、これ此書の体例なり。故に改む。
- (1) 『往生要集』に出づ。
- (2) 「臭」、底本「晁」に作り、田版「衆」に作り、河記「卑」ノ訛体」に作ると云ひ、広版「卑」に作る。案ずるに、「晁」是なり。言ふところは、縦ひ臭き袋中に在れども金はなほ尚ぶべし。今、通行の字体に改む。
- (3) 「啄鳥」、田版此くの如く、広版「啄鳥」に作り、河記出校せず。案ずるに、「啄鳥」「啄鳥」意通ぜず、上句「袋臭」と文対せず。これ倒にして、当に「鳥啄」に作るべし。言ふところは、鳥の啄む所と為れども珠はこれ珍なり。
- (4) 「接」、田版此くの如く、河記「攝」ノ訛体」に作ると云ひ、広版「攝」に作る。

## 伝写過程考

『要決』諸本の伝写系統を図示すれば左の如くになろう（除く稿者未見の聖徳寺本）。



※実線本は現存、破線本は亡佚または所在不明

**第一項 了祥本の傍註と田版広版の以註改正**

翻刻公刊された田版と広版に傍註は全くないが、謄写私印された河記によって、広版の底本である養楽寺本で甘簡ほどの不審字に傍註のあったことが知られる。そして二つの理由から、養楽寺本の傍註の大部分は同本の書写者によるものでなく、田版広版の共通祖本である了祥本にすでに存在していたものだと考えられる。

第一に、浄教寺本の第四決に四言二句「闇夜無燈、常開聖教」があり、この上句第四字を養楽寺本は「焼」に作り「燈歟私」と傍註していたという。「私」は同本の書写者によるものであることを示していよう。そして、同本の傍註に

「私」が用いられているのはこの一箇所だけらしいため、それ以外の傍註は原則として親本の了祥本にあったものの転写だと見るべきである。

第二に、浄教寺本の第二決に九言二句「已拏法滅百歳之時機、広説法住三時之利益」があり、この下句第二字を養楽寺本は「覽」に作り「況歟覽歟」と傍註していたという。「説」「況」「覽」三字は草書すると字形が近似する。しかし、正文を「覽」とし傍註を「況歟覽歟」とすることは不審である。仮に「覽」は「況」の誤写でないかと疑ったのであれば、正文「覽」にただ「況歟」とのみ傍註すればよく、「況歟覽歟」と傍註する必要はない。そのため、了祥本は下句第二字が判読困難な草体であって「況歟覽歟」と傍註されており、それを見た養楽寺本の書写者は動詞「覽」が是だと判断して正文をそう作りつつ、親本の傍註「況歟覽歟」も転写したと考えられる。

ただし、了祥本にあった傍註はその後の伝写過程でただ残されたり省かれたりしただけでなく、省かれつつそれによって正文を改められることも少なくなかったらしい。本稿ではこれを「以註改正」と仮称する。

例えば、第九決のある四言二句について田版と広版を比較すると、前者は「覺目已輝、長夜欲明」に、後者は「覺目已輝、長夜欲明」にそれぞれ作っており、上句第二字に「目」「日」の異なりがあるだけである。「覺目」では下句の「長夜」と意が対にならないため、「覺目」が誤りであることは疑いない。ただし河記によれば、広版の原本である養楽寺本は「目ヲ」「日」二作ル。明ヲ「晴」二作り「明」ヲ旁書スという。養楽寺本は正しくは「覺目已輝、長夜欲晴」に作っていたことと、広版は傍註「明」によって正文「晴」を改めていたことが知られる。そして、養楽寺本の傍註「明」が広版だけでなく田版でも正文になっているため、この傍註は同本だけでなく、田版の原本である神興本と広版の原本である養楽寺本の共通祖本である了祥本にすでに存在していたことも知られる。

了祥本の書写者は、その親本である西福寺本が「覺目已輝、長夜欲晴」に作っていたものの、「晴」は雲が散ずるの意であるため四言二句の意が通じず、「明」の誤字だろうと判断して斯く傍記したに違いない。「晴」を「明」の誤字とすることは、一見すると理があるかのようである。しかし、二字は行体や草体でもさほど近似せず、また広版のように「覺目已輝、長夜欲明」に作れば、日が

すでに輝きながら夜が未だ明けていないことになり、不審である。そのため、この四言二句は下句第四字「晴」を改めず、上句第二字「目」「日」を月に改めるべきである。月が「日」「目」に誤られ易いことは言うまでもなく、また月がすでに輝き雲もまた散ぜんと欲すとすれば不審はなくなる。

これを時系列で述べれば、西福寺本は「覚日已輝、長夜欲晴」に作っており、了祥本は「晴」を誤字と考え「明」と傍註して「覚日已輝、長夜欲晴<sup>明</sup>」とし、養樂寺本はこれをそのまま転写したが、広川が同本を翻刻公刊する時に正文「晴」を傍註「明」で改めつつ、その改字を註記しなかった、ということである。同じような以註改正が了祥本から田版に至るまでの過程でも生じたに違いないが、それが神興による了祥本の書写時に生じたのか、田中智肇による神興本の書写時に生じたのか、田中による自写本の翻刻時に生じたのかは知り得ない。なお、浄教寺本は「覚日已輝、長夜欲晴」となっている。

校勘そのものは必要な作業であるが、不審があるからと言って軽率に字句を改め、その改変を明示しないことは不当である。しかもその不審なるものがただの誤読曲解であれば、意図の如何によらず、校勘は改竄とその隠蔽になってしまう。稿者もまた深く自誠せざるを得ない。

## 第二項 西福寺本と浄教寺本

前項では、第二決の九言二句「已挙法滅百歳之時機、広説法住三時之利益」の下句第二字が了祥本で難読な草体になっていただろうと推定した。この箇所だけでなく、河記広版によつて養樂寺本を復元し、それを同系統の田版と別系統の浄教寺本と比較すると、了祥本には判読困難な草体が多かつたであろうと推定される。では、何故同本には判読困難な草体が多かつたのであろうか。

養樂寺本には、親本である了祥本の次のような奥書と識語が写されていたという（傍記引用者）。

文化十年<sup>癸酉</sup>夏、在<sup>三</sup>高倉<sup>字</sup>覺<sup>書</sup>書、了明雪光<sup>謹</sup>騰<sup>騰</sup>寫之<sup>二</sup>。

此書、洛陽小川西福精舍之什物、光恩院空公之遺書也。文化第十<sup>癸酉</sup>夏安居之時、令<sup>三</sup>了明騰<sup>騰</sup>寫之、以納<sup>三</sup>當寺之宝库<sup>一</sup>者也云爾。禿子 了祥誌

この書は洛陽小川西福寺の什物であり、光遠院恵空の遺書だ。文化十年（1813）の夏安居の時、自分了祥が了明雪光に騰写させた、と。了祥は同年に廿六歳の若さであつたため、了明は弟子でなく法弟であらうか。

了祥は同派の先徳である恵空を「空公」と敬称しており、了明もまた謹んで騰写したという。そのため、西福寺本が易読な楷体または行体だったものの了祥本では難読な草体になったとは考えられず、西福寺本がすでに難読な草体だったからそれを謹写した了祥本もまた難読な草体になったと考えるべきである。

広川は、この西福寺本がすなわち恵空本だったとする<sup>①</sup>。しかし、広川説には少なくとも二つの不審がある。第一に、恵空本は恵空が発見した古体本『要決』を書写二校したものであることが、養樂寺本の本奥書によつて知られる。二度も校合した成果である恵空本が難読な草体だったとは考え難い。

第二に、恵空は延宝八年（1680）に門徒から請われて西福寺に入り、元禄五年（92）に同寺を辞したという<sup>②</sup>。そして恵空が古体本を発見したのは、四年後の九年である（『選択集叢林記』追記）。恵空の所持本がすでに辞去していた西福寺に襲蔵されていたとは考え難い。そのため、西福寺本は恵空本を難読な草体で書写したものと考えるべきである<sup>③</sup>。

では、浄教寺本の親本は恵空本と西福寺本の何れであらうか。浄教寺本は誤字脱字倒文が了祥系統本と比べて少なく、字体は楷行である。そのため、西福寺本より良質の恵空本が親本だったと考えられなくもない。だが、浄教寺本には親本の草体を誤認したらしき箇所も僅かに存する。第五決で末書を「未盡」に誤り、第七決で急を「窓」に誤り、第九決で目足を「自寶」に誤っていることは、浄教寺本が親本の字形をそのまま転写したものでなく、親本の草体を楷行体に改めつつ転写したものだと考えられる。

浄教寺は、恵空が『要決』古体本を発見する以前から浄土宗であり、知恩院の京都門中十九箇寺の一つであつた。浄土宗の浄教寺蔵本の底本が真宗大谷派の西福寺蔵本だとは考え難いようでもある。しかし、両寺はともに洛中にあつて直線で一軒ほどの距離であり、また浄土宗の義山良照と真宗大谷派の恵空が互いに貴書を貸借授受していたという例もある。そのため、宗派の異なりを越えて浄教寺僧が西福寺本を書写したということは有り得ない。

この推測によつて、浄教寺本『要決』の大尾に撰号らしき「源智」二字があり書写奥書がないことも理解できるようになる。黒川道祐『雍州府志』巻第四寺院門上愛宕郡（天和二年「1682」起筆、貞享三年「1686」刊行）は、浄教



寺は平安末期に平重盛の開基した燈籠堂が後世移転したものでろうとする。また普陀峰牛隠『浄教寺縁起』（元禄七年「1694」成立）は、「洛陽多聞山浄教寺者、人皇八十代 高倉御宇、平氏重盛公所<sup>親カ</sup>勅建之燈籠堂也」という。重盛の開基とされる浄教寺の僧は、その孫源智の『要決』写本が西福寺にあることを知ってこれを書写したが、親本が真宗寺院の蔵書だと明かすことを憚って書写奥書せず、しかし西福寺本の恵空本奥書にあった「義山云、「コノ作者ハ勢観房ナルヘシ」ト」などによって撰号「源智」二字を加えたと考えられる。

浄教寺本と了祥本がともに西福寺本の写本だとすると、誤写が前者に少なく後者に多いのは、書写者の鑑識の優劣によるものであろう。了祥は後に学僧として知られるようになるが、前述の如く西福寺本を書写させた文化十年当時は廿六歳であり、謄写を担当した了明はより若かったであろう。如何に謹厳に写したとは言え、難読な草体の多かったであろう西福寺本を十分に読解できず、ただ草体の字形を模写しただけの箇所が多くなってしまうとしても怪しむに足らない。

### 第三項 諸本の音通誤写

漢文の書写では通常、字形を書写すべきである。しかし、数千字の漢文の書写で一画を写す毎に親本の字形を確認することは労が多く、親本の字を見てその音なり訓なりを心中に念じつつ写すということも生じ得る。そのため、伝写過程で「忘教大旨歟」（第七決）の「教」を田版は「経」に誤り、また「未難此集」（第八決）の「集」を田版は「宗」に誤るといったことになった。言うまでもなく、これらはそれぞれキョウ（厳密にはキヤウとケウ）とシユウ（厳密にはシユウとシフ）で音通する。

音通誤写は字形が大きく異なるため、一字と一字を対校すれば誤写であることは一目瞭然である。しかし、数千字と数千字を対校すれば検出され難くなり、況して対校を怠ればそのまま保存されてしまう。

浄教寺本と了祥系統本を比較すると、それらの誤字の殆んどすべてが西福寺本の草体誤読によると推定されるものである。ただし、数箇所だけ形似でなく音通によると推定される誤字がある。第五決の「肝涙」と第八決の「心手」は、それぞれ感涙と信手の音通誤写であろう。了祥系統本だけでなく浄教寺本でも「肝」「心」に作っているため、これらは共通祖本である西福寺本にすでにあつ

た音通誤写だと考えられる。

第九決で、浄教寺本は「浄果忽萌、聖果已隣」に作り、田版広版は「浄業忽萌、聖果已隣」に作っている箇所があり、上句第二字が異なっている。これは西福寺本で浄華となっており、それを浄教寺本は「浄果」に音通誤写し、了祥本は草体の近い「浄業」に形似誤写してしまったのかも知れない。

### 註

本付録で用いた史料の書誌は次の如し。引用では適宜字体と句読点を改め、訓点や傍点、傍記、括弧、頁数を付し、改行を省いた。

養樂寺本『選択要決』：広川堯敏「伝源智述『選択要決』の成立をめぐる諸問題（二）——その書誌学的検討——」（『大正大学研究紀要仏教学部文学部』七三、1988）。『浄教寺縁起』：小林円達『燈籠堂浄教寺』（燈籠堂浄教寺、1935）。

（1） 広川堯敏「『選択要決』の書誌学的研究」（第二篇第一章、初出1988）、『鎌倉浄土教の研究』、文化書院、2014、一八五頁。

（2） 経隆優「光遠院恵空講師略年譜」（『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』二、1984）参照。

（3） 恵空は西福寺を辞しても同寺と絶縁しなかったらしい。明和六年（1769）に西福寺恵徹が筆削した西蓮寺恵暁『得岸和上一期記』によると、恵空は西福寺を辞した時に同寺を法嗣に譲ったという（桑谷観宇「西福寺恵徹講師の研究」『宗学研究』一三、1936、五九、九〇頁）参照。そのため西福寺本『要決』は恵空本の写本であり、西福寺僧が恵空本の写本を入手したか、または恵空本の写本を持っていた者が西福寺に入ったかの何れかであろう。

付記 本稿は、令和三年度科学研究費補助金（基盤研究C）による研究成果の一部である。



## 執筆者一覧 (掲載順)

|                             |                                                                                     |                                 |
|-----------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------|
| 小 原 淳<br>OBARA, Jun         | 早稲田大学文学学術院<br>Faculty of Letters, Arts and Sciences,<br>Waseda University           | 教授<br>Professor                 |
| 眞 鍋 智 裕<br>MANABE, Tomohiro | 北海道大学文学研究院<br>Faculty of Humanities and Human<br>Sciences, Hokkaido University      | 准教授<br>Associate Professor      |
| 参 鍋 篤 司<br>SANNABE, Atsushi | 流通経済大学経済学部<br>Department of Economics, Ryutsu Keizai<br>University                  | 准教授<br>Associate Professor      |
| 和 田 有 理<br>WADA, Yuri       | 株式会社政策基礎研究所<br>Doctoral Institute for Evidence Based Policy                         | 主任研究員<br>Principal Investigator |
| 市 田 行 信<br>ICHIDA, Yukinobu | 株式会社政策基礎研究所<br>Doctoral Institute for Evidence Based Policy                         | 代表取締役<br>President              |
| カワチ イチロー<br>KAWACHI, Ichiro | ハーバード大学公衆衛生大学院<br>Harvard T. H. Chan School of Public Health,<br>Harvard University | 教授<br>Professor                 |
| 稲 葉 陽 二<br>INABA, Yoji      | 日本大学法学部<br>College of Law, Nihon University                                         | 教授<br>Professor                 |
| シュイ アリソン<br>XU, Alison      | 早稲田大学高等研究所<br>Waseda Institute for Advanced Study                                   | 講師<br>Assistant Professor       |
| 森 新之介<br>MORI, Shin'nosuke  | 早稲田大学高等研究所<br>Waseda Institute for Advanced Study                                   | 招聘研究員<br>Adjunct Researcher     |

### 早稲田大学高等研究所紀要 第14号

2022年3月15日 発行

編集・発行 早稲田大学高等研究所  
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田1-21-1  
T E L 03-5286-2460  
F A X 03-5286-2470

編集委員 池田 文・稲田 奏・海野典子・  
葛西 周・社本陽太・永島 優・  
フィットレル アーロン・武藤 慶

印刷 三美印刷株式会社

---